

令和4年度
業務年報



Annual Report 2022
Fukushima Agricultural Technology Centre

福島県農業総合センター

目 次

I 農業総合センターの概要

1 機能と沿革	I	1
2 所在地	I	3
3 組織及び事務の概要	I	4

II 技術開発・企画調整

1 試験研究課題一覧	II	1
2 共同研究、受託研究、研究協定一覧	II	7
3 試験研究の概要	II	8
A 東日本大震災・原子力災害からの復興の加速化による農林水産業の再生を支援するための試験研究の推進	II	8
B 農林水産業の生産力を強化するための、先端技術を活用した技術開発等の推進	II	19
C 県産農林水産物の競争力を強化するための、「ふくしま」ならではの価値向上に資する品種開発等の推進	II	21
D 地球温暖化等の気候変動に対応し、環境と共生する農林水産業を進めるための技術開発等の推進	II	28
E 安全・安心な県産農林水産物の安全供給と生産者の所得向上のための試験研究の推進	II	31
4 試験設計・試験成績検討会の開催状況	II	38
5 試験研究成果の公表	II	38
6 品種登録・職務発明	II	41
7 技術開発に伴う表彰・学位取得	II	41
8 有識者懇談会の開催	II	41
9 技術・研究に関する職員研修	II	42
10 試験研究推進会議の開催	II	42
11 所内ゼミ	II	43
12 初任者研修・新規採用職員研修	II	43
13 その他研修	II	44

III 地域農業支援

1 技術移転・技術支援	III	1
(1) 技術移転セミナー	III	1
(2) 技術支援（鳥獣害防止対策）	III	2
2 指導・啓発活動	III	3
(1) 研修会	III	3
(2) 技術指導資料	III	5
(3) 技術相談対応件数	III	6
3 主要農作物種子生産実績	III	6
4 オリジナル品種（園芸作物等）種苗生産実績	III	7
5 オリジナル品種の親株等の供給実績	III	8
6 家畜管理及び生産実績	III	8
(1) 畜産研究所本所	III	8
ア 家畜繋養実績	III	8
イ 各家畜繋養状況	III	9
ウ 各種生産実績	III	10
(2) 沼尻分場	III	13

IV	先進的農業者育成・支援		
1	農業短期大学の業務実績	IV	1
	(1) 概要	IV	1
	(2) 農業経営部の取組	IV	1
	ア 学生の状況	IV	1
	イ 専修教育の状況	IV	1
	ウ 進路指導の取組	IV	4
	エ 学生募集の取組	IV	5
	オ 学生数	IV	6
	カ 教育科目	IV	6
	キ 非常勤講師一覧	IV	8
	ク 教育行事	IV	9
	ケ 各種表彰者	IV	10
	コ 卒業生の進路状況	IV	10
	(3) 研修部の取組	IV	10
	ア 研修実施状況	IV	10
	イ 研修実績	IV	11
2	福島県農業総合センター農業短期大学校運営会議の開催	IV	14
V	食の安全・環境と共生する農業支援		
1	安全農業推進部の業務実績	V	1
	(1) 指導・有機認証課の業務	V	1
	ア 農業に関する業務	V	1
	イ 農作物の野生鳥獣被害とりまとめ	V	1
	ウ 肥料に関する業務	V	1
	エ 飼料に関する業務	V	2
	オ 有機認証に関する業務	V	3
	(2) 発生予察課の業務	V	3
	ア 病害虫発生予察事業	V	3
	イ 病害虫診断同定	V	4
	ウ ミバエ類等侵入警戒調査事業	V	4
	エ ウメ輪紋ウィルス (plum pox virus) の発生状況調査	V	4
	オ キウイフルーツかいよう病 Psa3 系統の発生状況調査	V	4
	カ クビアカツヤカミキリの発生状況調査	V	5
	キ スイカ果実汚斑細菌病	V	5
	ク 種馬鈴しょ検査	V	5
	ケ 農林水産データ管理・活用基盤強化事業	V	5
	コ 主要病害虫の発生状況	V	5
	(3) 分析課の業務	V	9
	ア 農林水産物を対象とした緊急時環境放射線モニタリングの実施	V	9
	イ その他検査の実施	V	10
	ウ 放射性物質測定技能試験	V	10
2	有機農業推進室の業務実績	V	10
VI	県民との交流・情報発信		
1	交流事業	VI	1
	(1) 第15回農業総合センターまつり	VI	1
	(2) 農的楽しみセミナー	VI	1
	(3) 子どもアグリ科学教室	VI	1
	(4) イモ掘り体験学習	VI	1

(5) 第13回田んぼの学校	VI	1
(6) 農業総合センター農業短期大学の取組	VI	1
2 視察見学者の受入状況	VI	2
3 施設の利用状況	VI	2
4 研究成果の発表	VI	4
(1) 学会等研究発表	VI	4
(2) シンポジウム等講演	VI	7
(3) 学会誌等投稿	VI	8
(4) 雑誌等投稿	VI	9
5 刊行物	VI	10
6 主要作物の生育情報の提供	VI	10
7 インターネットによる情報提供	VI	10
8 マスメディアによる報道	VI	11
9 福島県インターンシップの受入れ	VI	14
VII 職員・財産		
1 職員数	VII	1
2 施設・ほ場の面積及び飼養家畜数	VII	1

I 農業総合センターの概要

1 機能と沿革

(1) 機能

福島県農業総合センターは、農業関係の試験研究機関、病虫害防除所、肥飼料検査所及び農業短期大学校を再編統合し、5つの機能（ア 技術開発・企画調整機能、イ 地域農業支援機能、ウ 先進的農業者育成・支援機能、エ 食の安全・環境と共生する農業支援機能、オ 県民との交流・情報発信機能）を兼ね備えた本県農業振興の新たな拠点として平成18年4月郡山市日和田町に開所した。

ア 技術開発・企画調整機能

共通研究部門（経営・作業技術・生物工学・生産環境）、専門研究部門（水田畑作・園芸・果樹・畜産）、地域研究部門（会津・浜）が緊密に連携し、統合集中化のメリットを最大限に発揮することにより、実用性の高い技術の迅速かつ効率的な開発に取り組む。

イ 地域農業支援機能

地域農業を支援するため、既存の技術のみでは解決が困難な地域の課題に対し、現地の普及指導員、農業者、農業団体及び市町村等と共同して解決に当たる。

ウ 先進的農業者育成・支援機能

先進的な技術や最新の知見を営農条件に合った形に組み立て、実用的な新技術として生産現場に適応させることにより、複雑化・高度化する生産現場の課題解決の迅速化を図る。

農業教育面では、農業短期大学校と研究部門が一体的に地域を先導する農業後継者の育成に当たる。

エ 食の安全・環境と共生する農業支援機能

農業の振興には、環境に配慮し、消費者のニーズを重視して農産物を生産していくことが重要であるため、農業生産面からの環境保全や農薬等生産資材の適正使用の推進、農産物の安全性の確保に積極的に取り組む。また、県内における有機農業の普及拡大を強力に支援する。

オ 県民との交流・情報発信機能

センター整備の基本理念の一つである「開かれた試験研究機関」を具現化し、県民の様々な期待に応えられる交流・学習拠点としての役割を果たすため、県民の憩いの場、子供たちの農業体験や食農教育、高齢者の生涯学習等の機会を提供する。

(2) 沿革

年 度		事 項
和 暦	西 暦	
明治 29 年	1896 年	安積郡小原田村(現 郡山市小原田)に農事試験場(後の農業試験場)を設置
34 年	1901 年	福島町(現 福島市)に肥飼料検査室(後の肥飼料検査所)を設置
35 年	1902 年	安達郡高川村(現 郡山市熱海町)に種馬飼育場(後の畜産試験場)を設置
43 年	1910 年	郡山町虎丸町(現 郡山市虎丸)に移転
大正 3 年	1914 年	伊達郡梁川町(現伊達市)に原蚕種製造所(後の蚕業試験場)を設置
7 年	1918 年	河沼郡若宮村(現 河沼郡会津坂下町)に農事試験場特別試験地(後の農業試験場会津支場) を設置
12 年	1923 年	石城郡神谷村 (現いわき市)に石城分場(後の農業試験場いわき支場) を設置
14 年	1925 年	田村郡片曾根村(現田村市)にたばこ試験場を設置
昭和 10 年	1935 年	信夫郡平野村(現 福島市飯坂町)に農事試験場信達分場(後の果樹試験場)を設置 西白河郡矢吹町に県立修練農場(後の農業短期大学校)を設置 ※改称、統廃合により昭和 63 年(1988 年)現在名称
		相馬郡八幡村(現 相馬市成田)に農事試験場相馬水稻試験地(後の農業試験場相馬支場)を設置
		耶麻郡猪苗代町(現 猪苗代町)に猪苗代試験地(後の農業試験場冷害試験地)を設置
11 年	1936 年	郡山市に種鶏場(後の養鶏試験場)を設置 ※昭和 40 年(1965 年)改称、郡山市富田町に移転
17 年	1942 年	種馬飼育場を信夫郡荒井村(現 福島市)に移転(後の畜産試験場)
23 年	1948 年	安積郡富田村(現 郡山市富田町)に農事試験場を移転※昭和 36 年(1961 年)改称
27 年	1952 年	県内 16 か所に病虫害防除所を設置
33 年	1958 年	県特用作物原種農場をこんにゃく試験地として改称移管
42 年	1967 年	県農業短期大学校を設立
49 年	1974 年	会津農業センターの設立

年 度		事 項
和 暦	西 暦	
54 年	1979 年	会津支場を会津農業センター庁舎に移転 農業経営大学校を設置
55 年	1980 年	園芸試験場を果樹試験場に改組
63 年	1988 年	農業短期大学校、農業経営大学校及び会津農業センター（長期研修課程）を統合し、県立農業短期大学校を開校（矢吹町）
平成 8 年	1996 年	農業試験場創設 100 周年
14 年	2002 年	梁川支場を開場し、蚕業試験場を廃止
18 年	2006 年	農業総合センター発足 試験研究機関（農業試験場（本場・4 支場・2 試験地）、果樹試験場、たばこ試験場、畜産試験場（本場・1 支場）、養鶏試験場）、農業短期大学校、病害虫防除所、肥飼料検査所を再編統合 梁川支場を廃止
23 年	2011 年	センター本部安全農業推進部に分析課を設置
25 年	2013 年	独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構東北農業研究センター福島研究拠点内（福島市）に福島市駐在を設置
27 年	2015 年	福島市駐在を廃止し、南相馬市に浜地域農業再生研究センターを設置 畜産研究所養鶏分場（郡山市）を廃止
28 年	2016 年	畜産研究所（福島市）に養鶏科を設置
29 年	2017 年	農業短期大学校を農業経営部 5 学科に再編し、研究科を廃止

2 所在地

福島県農業総合センター 本部

〒963-0531 郡山市日和田町高倉字下中道^{しもなかみち}116 番地
TEL 024-958-1700 FAX 024-958-1726

果樹研究所

〒960-0231 福島市飯坂町平野字檀^{だん}の東^{ひがし}1 番地
TEL 024-542-4191 FAX 024-542-4749

畜産研究所

〒960-2156 福島市荒井字地藏原甲 18 番地
TEL 024-593-1096 FAX 024-593-4977

畜産研究所 沼尻分場

〒969-2752 耶麻郡猪苗代町大字蚕養^{こがい}字日影^{ひかげ}山乙 3696 番地
TEL 0242-64-3321 FAX 0242-64-2844

会津地域研究所

〒969-6506 河沼郡会津坂下町大字見明^{みみょう}字南原 881 番地
TEL 0242-82-4411 FAX 0242-82-4416

浜地域研究所

〒979-2542 相馬市成田字五郎右エ門橋 100 番地
TEL 0244-35-2633 FAX 0244-35-0319

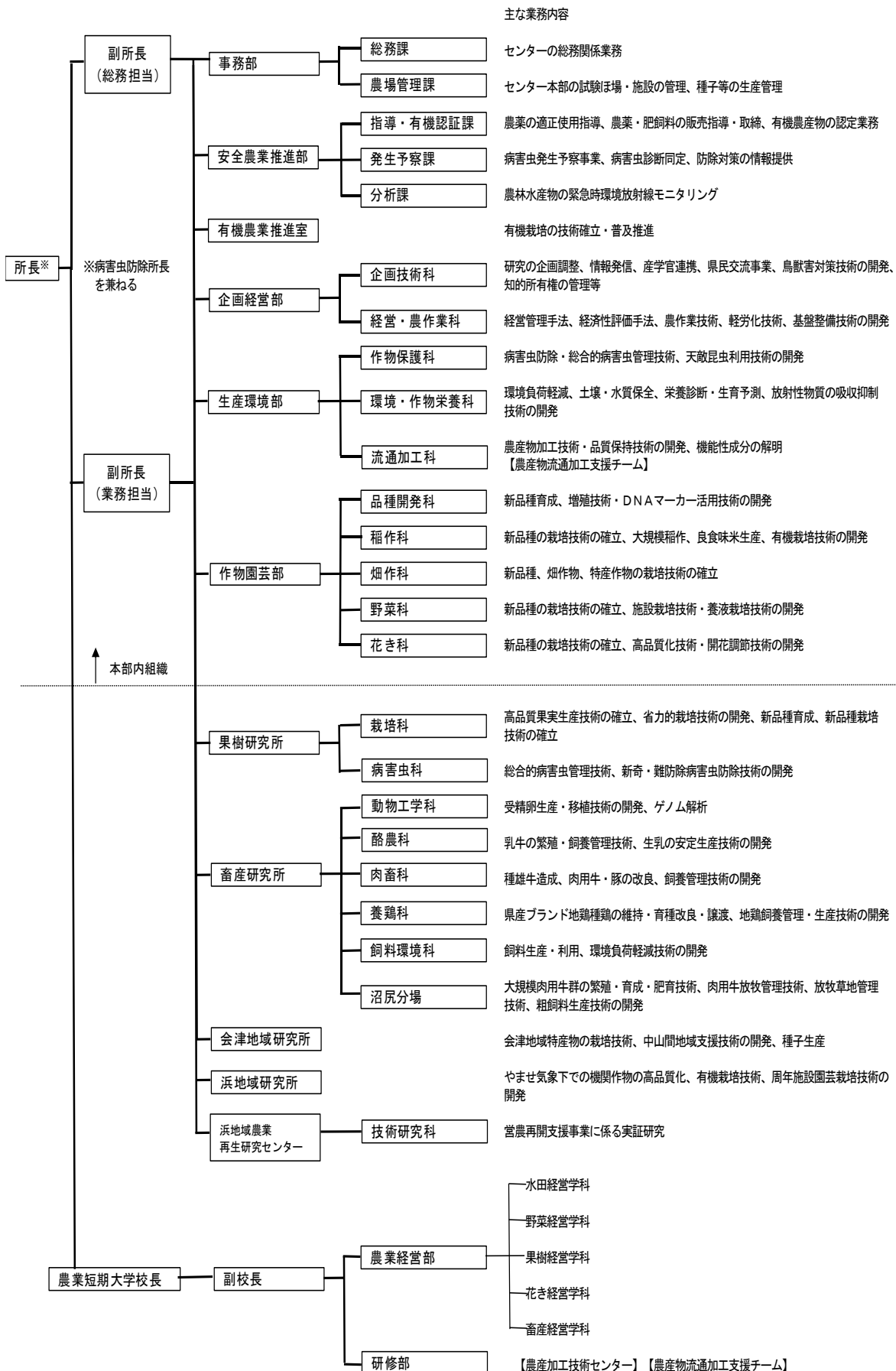
浜地域農業再生研究センター

〒975-0036 南相馬市原町区萱浜^{かいばま}字巢掛^{すかけ}場 45 番 169
TEL 0244-26-9562 FAX 0244-26-9563

農業短期大学校

〒969-0292 西白河郡矢吹町一本木^{いっぼんぎ}446 番地 1
TEL 0248-42-4111 FAX 0248-44-4553

3 組織及び事務の概要



Ⅱ 技術開発・企画調整

1 試験研究課題一覧

課題番号	試験課題（大課題・中課題・小課題）	始期	終期	担当部所	予算区分
A 東日本大震災・原子力災害からの復興の加速化による農林水産業の再生を支援するための試験研究の推進					
A1 農業における総合的な放射性物質対策の研究開発					
A1-1 放射性物質の分布状況の把握					
A1-1-1	土壌の経年調査	R3	R7	生産環境部 果樹研究所 畜産研究所 浜地域農業再生研究センター	外部資金 ^{※1}
A1-1-2	農地における放射性セシウム濃度深度分布の把握	R3	R7	生産環境部	繰入金
A1-1-3	郡山市における大気浮遊塵及び降下物中の放射性セシウム濃度調査	R3	R7	生産環境部	繰入金
A1-1-4	果樹における放射性物質濃度の経年変化の把握	R3	R7	果樹研究所	繰入金
A1-2 放射性物質の吸収抑制技術等の確立					
A1-2-1	水稲におけるカリ施用の適正量の検討	R3	R4	生産環境部	繰入金
A1-2-2	基準値超過等要因解析	R3	R7	生産環境部	繰入金
A1-2-3	県内農地土壌の交換性塩基含量の実態解明	R3	R7	生産環境部	繰入金
A1-2-4	非交換性カリ含量簡易測定法の開発	R3	R5	生産環境部	繰入金
A1-2-5	除染後水田水口へのカリ資材等を活用した放射性セシウム吸収リスクの低減技術の実証	R3	R4	生産環境部	繰入金
A1-2-6	除染後水田に対する中長期的な地力の実態解明と効果的な地力回復技術の開発	R3	R5	生産環境部	繰入金
A1-2-7	ゼオライト施用時における玄米への放射性セシウム移行リスク評価	R3	R4	生産環境部	外部資金 ^{※1}
A1-2-8	水稲の生産性と安全性の評価ならびに放射性物質移行抑制の実証	R3	R7	作物園芸部	繰入金
A1-2-9	畑作物の放射性セシウム吸収に対する土壌の影響解明	R3	R7	作物園芸部	繰入金
A1-2-10	カキ・ユズにおける放射性物質の吸収抑制技術等の確立	R3	R7	果樹研究所	繰入金
A1-2-11	避難指示区域等における農作物中放射性セシウム吸収抑制技術の開発	R3	R7	浜地域農業再生研究センター	繰入金
A1-2-12	放射性セシウム濃度低減のための野菜栽培と調理加工	R3	R7	生産環境部 浜地域農業再生研究センター	外部資金 ^{※9}
A1-2-13	再浮遊物質を含む大気中の放射性セシウムの動態と農地・農作物への影響の解明	R4	R4	浜地域農業再生研究センター	外部資金 ^{※1}
A1-3 特定復興再生拠点区域等の円滑な営農再開に向けた技術実証					
A1-3-1	計測ロボットを活用した放射性物質等分布実態の把握	R3	R7	浜地域農業再生研究センター	外部資金 ^{※1}
A1-3-2	営農再開を阻害する加害動物の行動特性や動物種把握による獣害防止策の提案	R3	R7	浜地域農業再生研究センター	外部資金 ^{※1}
A1-3-3	通い農業支援システム等を活用した栽培状況の可視化と評価	R3	R7	浜地域農業再生研究センター	外部資金 ^{※1}
A1-3-4	緑肥作物等の利用による地力回復技術の開発と蜜源利用	R3	R7	浜地域農業再生研究センター	外部資金 ^{※1}
A1-3-5	効率的雑草管理技術の開発と実証	R3	R7	浜地域農業再生研究センター	外部資金 ^{※1}
A1-3-6	特定復興再生拠点等における農作物栽培の生産性と安全性の評価	R3	R7	畜産研究所 浜地域農業再生研究センター	外部資金 ^{※1}
A1-3-7	放射性物質移行抑制技術の実証・開発と畑作物の安全性の評価	R3	R7	作物園芸部	外部資金 ^{※1}
A1-3-8	草地における放射性セシウム吸収抑制技術の開発・実証と未除染牧草地利用可否基準の策定	R3	R7	畜産研究所 浜地域農業再生研究センター	外部資金 ^{※1}
A1-3-9	山羊乳及び山羊肉の放射性セシウムの移行調査	R3	R5	畜産研究所	外部資金 ^{※1}
A1-3-10	生産現場における最適な放射性セシウム移行リスクの評価手法およびほ場特性に合わせた移行低減技術の提案	R3	R7	生産環境部	外部資金 ^{※1}
A2 避難地域等の営農再開を支える技術の実証					
A2-1 避難地域の営農再開を支援する研究					
A2-1-1	避難地域等における営農再開のための支援研究	R3	R7	浜地域農業再生研究センター	繰入金

課題番号	試験課題（大課題・中課題・小課題）	始期	終期	担当部所	予算区分
A2-2 広域エリアを対象とした大規模水田営農における生産基盤技術の確立実証					
A2-2-1	広域エリアにおける水田輪作栽培管理技術の開発・実証	R3	R7	作物園芸部 浜地域研究所	外部資金※1
A2-2-2	営農再開に対応した大規模水田輪作体系の実証	R3	R7	企画経営部 作物園芸部	外部資金※1
A2-2-3	広域エリアにおける ICT を用いた省力的ほ場管理技術	R3	R7	生産環境部	外部資金※1
A2-2-4	飼料用トウモロコシの安定多収、加工・調製技術の開発と実証	R3	R7	畜産研究所	外部資金※1
A2-2-5	経営管理システムを活用した経営データ分析・活用手法	R3	R7	企画経営部	外部資金※1
A2-3 先端技術を活用した施設野菜・畑作物の省力高収益栽培・出荷技術の確立					
A2-3-1	施設果菜類の雇用労力とロボットを作業主体とした大規模経営技術の開発・実証	R3	R7	企画経営部 作物園芸部 浜地域研究所	外部資金※1
A2-3-2	加工適性の高いコムギの導入による省力高収益生産技術の開発・実証	R3	R7	作物園芸部	外部資金※1
A2-3-3	露地野菜栽培における難防除雑草の優占化機構の解明と対策技術の確立	R3	R7	作物園芸部 浜地域農業再生研究センター	外部資金※1
A2-4 避難地域の営農再開を促進する先端プロ技術の社会実装					
A2-4-1	花きの計画的安定生産技術の実証	R3	R7	作物園芸部	国庫
A2-4-2	早期成園化が可能な樹形によるナシ、ブドウ、モモの省力・高品質安定生産技術の実証	R3	R7	果樹研究所	国庫
A2-4-3	肉用牛の AI 超音波肉質診断技術の実証	R3	R7	畜産研究所	国庫
B 農林水産業の生産力を強化するための、先端技術を活用した技術開発等の推進					
B1 先端技術を活用した新たな農業生産技術の開発					
B1-1 イノベーションによる避難地域の新たな農業生産技術の開発					
B1-1-1	稲作の大規模化・省力化に向けた農業水利施設管理省力化ロボットの開発	R3	R5	企画経営部	外部資金※1
B1-1-2	「見える化」技術を活用した土壌肥沃度のバラツキ改善技術の開発	R3	R5	浜地域農業再生研究センター	外部資金※1
B1-1-3	ICT・放牧を活用した肉用繁殖雌牛管理技術の効率化	R3	R7	畜産研究所	外部資金※1
B1-2 スマート農業技術を活用した農業生産技術の確立					
B1-2-2	データベースを活用したスマート農業経営の構築	R3	R5	企画経営部	一般財源
B1-2-3	花粉採取と受粉作業の省力化を可能にするスマート農業技術の開発	R4	R6	果樹研究所	外部資金※1
B1-3 先端技術を活用した省力的栽培技術の確立					
B1-3-1	水稻無コーティング湛水直播による業務用米の低コスト生産技術の確立	R2	R4	作物園芸部	外部資金※1
B1-3-2	IoT による遠隔監視システムを活用した育苗管理の省力化技術開発	R3	R5	企画経営部	一般財源
B1-3-3	「米処」会津地域における新たな稲作経営の展開のための栽培技術の確立	R3	R5	会津地域研究所	外部資金※1
B1-3-5	ブロッコリー選別自動収穫機の機械化栽培体系の確立	R3	R6	企画経営部 作物園芸部 浜地域研究所	外部資金※1
B1-3-6	ブロッコリー栽培における一斉収穫・出荷・販売体系の構築	R3	R5	企画経営部	外部資金※6
B1-3-7	ICT・IoT 技術を活用した花きの新たな農業生産技術の確立	R3	R7	会津地域研究所	一般財源
B1-3-8	大規模酪農経営における飼養管理技術の確立	R3	R6	畜産研究所	一般財源
C 県産農産物の競争力を強化するための、「ふくしま」ならではの価値向上に資する品種開発等の推進					
C1 市場ニーズに対応したオリジナル品種・系統と生産技術等の開発					
C1-1 個性豊かな県オリジナル水稻、野菜、花き品種の育成					
C1-1-1	個性豊かな県オリジナル水稻品種の育成	R3	R7	作物園芸部 浜地域研究所	国庫 一般財源 寄附金※2

課題番号	試験課題（大課題・中課題・小課題）	始期	終期	担当部所	予算区分
C1-1-2	個性豊かな県オリジナル野菜品種の育成	R3	R7	作物園芸部	国庫 一般財源 寄附金 ^{※2}
C1-1-3	個性豊かな県オリジナル花き品種の育成	R3	R7	作物園芸部	国庫 一般財源 寄附金 ^{※2}
C1-1-4	個性豊かな品種育成のための促進技術開発	R3	R7	作物園芸部	国庫 一般財源
C1-1-5	バイテク活用による優良原種苗の長期保存・増殖技術開発	R3	R7	作物園芸部	一般財源
C1-2 作物、野菜、花きの有望品種・系統の評価					
C1-2-1	奨励品種決定調査	R3	R7	作物園芸部 会津地域研究所 浜地域研究所	一般財源
C1-2-3	麦類育成系統の地域適応性試験	R3	R7	作物園芸部	外部資金 ^{※4}
C1-3 作物、野菜、花きの有望系統・新品種の栽培技術の確立					
C1-3-1	県産米の高品質化・良食味米生産のための栽培管理技術の確立	R3	R5	作物園芸部 会津地域研究所 浜地域研究所	外部資金 ^{※3, ※6}
C1-3-2	県オリジナル酒造好適米の栽培方法の確立	R3	R5	作物園芸部 会津地域研究所	国庫
C1-3-3	野菜の有望系統・新品種の栽培技術の確立	R3	R5	作物園芸部	国庫
C1-3-4	花きの有望系統・新品種の栽培技術の確立	R3	R5	作物園芸部 会津地域研究所 浜地域研究所	国庫
C1-4 個性豊かな県オリジナル果樹品種の育成					
C1-4-1	個性豊かな県オリジナル果樹品種の育成	R3	R7	果樹研究所	国庫 寄附金 ^{※2} 一般財源
C1-5 果樹の有望系統の評価および新品種・有望系統の栽培技術の確立					
C1-5-1	果樹系統適応性検定試験	R3	R7	果樹研究所	外部資金 ^{※4} 一般財源
C1-5-2	県オリジナル果樹品種の安定生産・流通技術の確立	R3	R7	果樹研究所	国庫 一般財源
C1-6 個性豊かな県優良家畜等の改良					
C1-6-1	牧草・飼料作物の優良草種・品種の選定	R3	R7	畜産研究所	一般財源
C1-6-2	「フクシマL2」の開放型育種	R3	R7	畜産研究所	一般財源
C1-6-3	県ブランド鶏の改良と開発	R3	R7	畜産研究所	一般財源
C1-6-4	胚移植技術を活用した高能力肉用牛の効率的生産技術の確立	R3	R7	畜産研究所	一般財源
C1-6-5	ゲノム情報を活用した家畜の育種改良技術の確立	R3	R7	畜産研究所	一般財源 国庫
C1-6-6	ゲノミック評価を利用した繁殖雌牛の評価	R3	R5	畜産研究所	寄附金 ^{※2}
C2 農産物を「ふくしま」ならではの産品にする技術の開発					
C2-1 県産農産物の特性を活かした利用技術の開発					
C2-1-1	県産農産物の加工技術の開発	R3	R7	生産環境部	一般財源
C2-1-2	県産農産物の品質保持技術の開発	R3	R7	生産環境部	一般財源
C2-1-3	本県農産物の機能性成分の評価と利用技術の開発	R3	R7	生産環境部	国庫
C2-2 県産農産物の輸出拡大に向けた生産・保鮮技術の確立					
C2-2-1	モモせん孔細菌病に対する多目的防災網を活用した防除効果の検証	R3	R5	果樹研究所	国庫
C2-2-2	ダリアの鮮度保持技術の開発	R3	R4	作物園芸部	繰入金
C2-2-3	シュコンカスミソウの輸出に向けた鮮度保持技術の開発	R3	R7	会津地域研究所	繰入金

課題番号	試験課題（大課題・中課題・小課題）	始期	終期	担当部所	予算区分
C2-2-4	ナシ黒星病に対する秋期及び果実肥大後期の新防除体系の検証	R3	R5	果樹研究所	国庫
C2-3 「福島牛」ブランド競争力強化技術の確立					
C2-3-1	「福島牛」の高付加価値生産システムの確立	R3	R7	畜産研究所	国庫 一般財源
C2-4 「ふくしま」ならではの地域特産物を活かした栽培・流通技術の確立					
C2-4-3	積雪を活かした野菜の栽培及び貯蔵技術の確立	R1	R3	生産環境部 会津地域研究所	一般財源 国庫
C2-4-4	オタネニンジンの産地づくり支援に関する研究	R4	R7	作物園芸部 会津地域研究所	国庫
C2-4-5	エゴマ安定生産体系の確立	R4	R7	企画経営部 生産環境部 作物園芸部	国庫 一般財源
D 地球温暖化等の気候変動に対応し、環境と共生する農林水産業を進めるための技術開発等の推進					
D1 気候変動に対応し農業生産の安定化に寄与する技術の開発					
D1-1 気候変動に対応した生産技術の開発					
D1-1-1	夏季高温条件下における良質・良食味米生産技術の確立	R3	R5	作物園芸部	寄附金※2
D1-1-2	主要野菜の安定生産技術の確立	R3	R7	作物園芸部	国庫 一般財源
D1-1-3	温暖化傾向に対応した花きの安定生産技術の確立	R3	R7	作物園芸部	一般財源
D1-1-4	主要農作物生育作柄解析調査研究	R3	R7	作物園芸部 会津地域研究所 浜地域研究所	一般財源
D1-1-5	温暖化に対応した果樹の生育予測技術及び生育障害対策技術の確立	R3	R7	果樹研究所 会津地域研究所	外部資金※1 一般財源
D2 環境負荷を低減する農業生産に資する研究開発					
D2-1 中山間地における農地管理技術の開発					
D2-1-1	受益者対応型中山間地域の暗渠排水技術の確立	H28	R4	企画経営部	繰入金
D2-1-2	中山間地における農地保全管理の省力技術体系の確立	R1	R5	企画経営部	繰入金
D2-1-3	遊休農地再生利用のための土地利用型作物栽培体系の確立	R3	R4	会津地域研究所	一般財源
D2-2 環境と共生する病虫害防除技術の開発					
D2-2-1	総合的病虫害管理（IPM）による環境と共生する農業技術の確立	R3	R7	生産環境部	一般財源
D2-2-2	果樹における生物資源等を活用した環境と共生する病虫害防除技術の開発	R3	R7	果樹研究所	一般財源 外部資金※1
D2-3 有機農産物の低投入持続型栽培技術の確立					
D2-3-1	有機農産物の低投入持続型栽培技術の確立	R3	R7	有機農業推進室 企画経営部	国庫
D2-4 環境負荷の低減に向けた技術の開発					
D2-4-1	温室効果ガス排出軽減技術の確立	R3	R7	生産環境部	外部資金※1
D2-4-2	農地における土壌管理実態調査	R3	R7	生産環境部	国庫
D2-4-3	果樹園における省力的環境負荷軽減のための肥培管理技術の確立	R3	R7	生産環境部	一般財源
D2-4-5	効率的肥培管理技術の確立	R3	R7	生産環境部	一般財源
D2-4-6	家畜排せつ物堆肥の高度利用技術の開発	R4	R8	生産環境部 畜産研究所	繰入金
E 安全・安心な県産農林水産物の安定供給と生産者の所得向上のための試験研究の推進					
E1 産地や経営体において収益性を高める技術の研究開発					
E1-1 水稻、畑作物の安定生産技術の確立					
E1-1-1	寒冷地における雑草イネ省力防除技術の開発	R3	R5	作物園芸部	外部資金※1

課題番号	試験課題（大課題・中課題・小課題）	始期	終期	担当部所	予算区分
E1-1-2	省力的な稲作栽培に適応した雑草防除技術の開発	R3	R7	作物園芸部	一般財源
E1-1-3	畑作物の高品質・安定栽培技術の確立	R3	R7	作物園芸部	外部資金 ^{※8} 一般財源
E1-1-4	マルチオミクス解析に基づく作物の安定多収に向けた栽培技術の開発	H30	R6	作物園芸部	外部資金 ^{※1}
E1-1-5	葉たばこ特別調査	R3	R7	作物園芸部	外部資金 ^{※5}
E1-2 野菜・花きの安定生産技術の確立					
E1-2-1	地域特性を活かした施設花きの安定生産技術の確立	R3	R7	作物園芸部	一般財源
E1-2-2	ふくしまの特色ある露地花きの安定生産技術の確立	R3	R7	作物園芸部	一般財源 寄附金 ^{※2}
E1-2-3	特産野菜の安定生産技術の確立	R3	R7	企画経営部 作物園芸部	寄附金 ^{※2} 国庫
E1-3 会津地域に適した作物、園芸品目等の生産技術の確立					
E1-3-1	会津地域における地場野菜等の生産技術の開発	R3	R4	会津地域研究所	一般財源
E1-3-2	会津地域における野菜オタネニンジンとしての生産技術の開発	R3	R5	会津地域研究所	一般財源
E1-4 浜通り地方に適した作物、園芸品目等の生産技術の確立					
E1-4-1	浜通りにおける大規模水田利用支援技術の開発	R3	R7	浜地域研究所	一般財源
E1-4-2	浜通りの気候を活かした野菜・花き等の生産振興支援技術の確立	R3	R7	浜地域研究所	一般財源 科研費
E1-5 果樹の安定生産技術の確立					
E1-5-1	革新的栽培技術体系による果樹の栽培管理技術の確立	R3	R7	果樹研究所	寄附金 ^{※2} 一般財源
E1-5-2	モモ「あかつき」の核障害軽減対策技術の確立	R3	R7	果樹研究所	一般財源
E1-5-3	大規模経営に対応できるリンゴの省力・高品質生産技術体系の確立	R3	R7	果樹研究所	一般財源
E1-6 畜産の安定生産技術の確立					
E1-6-1	乳牛の安定生産技術の確立	R3	R5	畜産研究所	外部資金 ^{※1} 科研費
E1-6-2	肉用牛の安定生産技術の確立	R3	R5	畜産研究所	寄附金 ^{※2} 一般財源
E1-6-3	豚の安定生産・高付加価値化技術の確立	R3	R5	畜産研究所	一般財源 繰入金
E1-7 新たな技術・手法等の導入効果に関する経営的評価					
E1-7-1	GAPを活用した経営改善効果の検証	R4	R6	企画経営部	国庫
E2 農産物の安定供給に寄与する鳥獣被害防止・病害虫防除等に係る研究開発					
E2-1 野生鳥獣害対策技術の確立					
E2-1-1	ICT機器等を利用した野生鳥獣被害対策技術の確立	R3	R5	企画経営部	繰入金
E2-2 農作業事故防止技術体系の確立					
E2-2-1	農作業事故による怪我のデータ収集とその体系化	R3	R7	企画経営部	国庫
E2-3 新奇病害虫・難防除病害虫防除技術の確立					
E2-3-1	新奇・難防除病害虫に対する防除技術の開発	R3	R7	生産環境部	一般財源
E2-4 果樹の病害虫に対する防除技術の確立					
E2-4-1	果樹の重要な課題である病害虫に対する防除技術の確立	R3	R7	果樹研究所	一般財源
E2-4-2	果樹等の幼木期における安定生産技術の確立	R2	R6	生産環境部 果樹研究所	外部資金 ^{※1}
E2-4-4	果樹における農業耐性、抵抗性を管理する技術確立	R3	R7	果樹研究所	一般財源
E2-4-5	果樹病害虫の防除法改善に関する試験	R3	R7	果樹研究所	一般財源
E2-4-7	相次いで侵入した外来カミキリムシから日本の果樹と樹木を守る総合対策手法の確立	R4	R7	果樹研究所	外部資金 ^{※1}
E2-5 新農薬・新資材等の効率的利用法					

課題番号	試験課題（大課題・中課題・小課題）	始期	終期	担当部所	予算区分
E2-5-1	安全で効率的な新農薬・新資材等の実用化	R3	R7	生産環境部 作物園芸部 果樹研究所 会津地域研究所 浜地域研究所	外部資金※7

- 【備考】
- ※1 農林水産省
 - ※2 JA グループ福島
 - ※3 公益社団法人農林水産・食品産業技術振興協会
 - ※4 国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構
 - ※5 日本たばこ産業株式会社
 - ※6 新稲作研究会
 - ※7 公益社団法人福島県植物防疫協会
 - ※8 国立大学法人福島大学
 - ※9 公益財団法人飯島藤十郎記念食品科学振興財団

2 共同研究、受託研究、研究協定一覧

(1) 福島県農林水産部共同研究

- ア 低カドミウム遺伝子を付与したイネ系統の作成（福島県）
（国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構農業環境変動研究センター）
- イ 福島県オリジナルの閉花受粉性を持つ水稻品種の育成と特性評価
（国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構作物研究部門・生物機能利用研究部門）
- ウ 水稻いもち病ほ場抵抗性検定の東北地域向け基準品種の追加策定
（国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構東北農業研究センター）
- エ ゲノム育種による福島県オリジナル品種の開発（国立大学法人福島大学）
- オ 和牛における経済形質のゲノム選抜手法の確立（独立行政法人家畜改良センター）
- カ 黒毛和種における肉質形質のゲノミック評価手法の確立と高度化
（国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構畜産研究部門）

(2) 福島県農林水産部受託研究

- ア トルコギキョウ品種特性調査（一般社団法人日本種苗協会）

(3) 研究協定

- ア 地域資源を活用した水稻の品種育成に関する研究
（国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構*1ほか30公設試験研究機関）
*1 次世代作物開発研究センター
- イ 水稻新品種の育成（富山県農林水産総合技術センター）
- ウ 国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構の水稻有望系統を交配母本とした水稻品種・系統の共同育成（福島県）
（国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構中日本農業研究センター）
- エ 倍加半数体リンゴ品種を利用した果実形質の遺伝解析に関する研究
（国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構果樹茶業研究部門）
- オ 避難地域等における営農再開のための支援研究（株式会社南東北クボタ）

備考 1 福島県農林水産部共同研究

福島県農林水産部共同研究要綱に定められた、県と県以外の者が技術と知識を交換し、研究及び研究費用を分担しながら、共通の課題解決に向けて共同で行う研究

2 福島県農林水産部受託研究

福島県農林水産部受託研究要綱に定められた、委託者の負担する経費を使用して公務として行い、その成果を委託者に報告する試験研究

3 研究協定

農業総合センターと県以外の者が技術と知識を交換し、共通の課題解決に向けて共同で行う研究のうち、研究結果として知的所有権等の発生が見込めない1に至らない研究（所長が締結する研究契約）

※共同研究及び受託研究は、福島県農林水産技術会議評価部会の承認後、知事が実施機関と契約を締結している。

3 試験研究の概要

(文中に【普及成果○】【参考成果○】【放射線技術情報○】【営農再開技術情報○】の記載のある成果については、当センターのホームページに令和4年度に得られた研究成果として掲載されております。)

A 東日本大震災・原子力災害からの復興の加速化による農林水産業の再生を支援するための試験研究の推進

A1 農業における総合的な放射性物質対策の研究開発

A1-1 放射性物質の分布状況の把握

試験課題名：土壌の経年調査		A1-1-1
予算区分：外部資金（放射性物質測定調査委託事業） 開始年度：R3 終了年度：R7 担当科所 環境・作物栄養科、果樹研究所、畜産研究所、浜地域農業再生研究センター		
概要	土壌中の放射性セシウム濃度は、水田、畑地、樹園地、草地の4地目とも2012年から減少する傾向が見られた。また、空間線量率も、全地目で減少傾向が見られた。	
試験課題名：農地における放射性セシウム濃度深度分布の把握		A1-1-2
予算区分：繰入金（福島県民健康管理基金） 開始年度：R3 終了年度：R7 担当科所 環境・作物栄養科		
概要	浜地域研究所の水田における深度別の ¹³⁷ Cs存在割合を調査した結果、2014年から2016年にわたり ¹³⁷ Csが下層へ移動する傾向が見られたが、2016年から2022年まで深度別の ¹³⁷ Cs存在割合に大きな変化がなく、下層への ¹³⁷ Csの移動の程度は小さかった。	
試験課題名：郡山市における大気浮遊塵及び降下物中の放射性セシウム濃度調査		A1-1-3
予算区分：繰入金（福島県民健康管理基金） 開始年度：R3 終了年度：R7 担当科所 環境・作物栄養科		
概要	放射性セシウムの大気中濃度は、測定を開始した2014年2月から減少する傾向が認められるが、2018年以降、時折やや高い値を示すことがあった。また、放射性セシウムの大気中降下量も減少する傾向が認められるが、日平均の風速が大きくなる冬季から春季に降下量が多くなる傾向が見られた。	
試験課題名：果樹における放射性物質濃度の経年変化の把握		A1-1-4
予算区分：繰入金（福島県民健康管理基金） 開始年度：R3 終了年度：R7 担当科所 果樹研究所栽培科		
概要	所内及び現地ほ場において葉・果実中の放射性Cs濃度を測定した。放射性セシウムは各樹種で低く推移しており、測定の結果、検出限界値未満となった検体もあった【放射線技術情報4】。土壌表面及び1m高において、剥土処理による外部被ばくリスク回避効果が確認された。土性の異なる2か所の樹園地における深さ30cmの土壌中 ¹³⁷ Csの分布率を調査した結果、重植土ほ場が砂壤土ほ場と同様に下方へ移行する傾向が見られた。	

A1-2 放射性物質の吸収抑制技術等の確立

試験課題名：水稲におけるカリ施用の適正量の検討		A1-2-1
予算区分：繰入金（福島県民健康管理基金） 開始年度：R3 終了年度：R4 担当科所：環境・作物栄養科		
概要	精密ほ場において、過去に玄米中放射性セシウム濃度が50Bq/kgを超過したことがある現地ほ場の土壌を用い、カリ無施用で栽培を継続すると、土壌中の交換性カリ含量が低下するとともに、玄米中放射性セシウム濃度が50Bq/kgを超える程度まで高まったが、カリを基準量(10kg/10a相当)継続して施用した場合は、玄米中放射性セシウム濃度が10Bq/kg程度に抑えられた【放射線技術情報1】。	

試験課題名：基準値超過等要因解析		A1-2-2
予算区分：繰入金（福島県民健康管理基金） 開始年度：R3 終了年度：R7 担当科所：環境・作物栄養科		
概要	県内の水稲作付けほ場 66 か所の土壌中交換性カリ含量の平均値は、26mg/100g であり、2015～2020 年度の調査時よりも減少する傾向が見られた。交換性カリ含量が以前の調査で 25mg/100g を上回っていたが、2022 年度の調査では 25mg/100g を下回っているほ場は、カリ施用量の平均値が 5.0kg/10a と他のほ場より低かった【放射線技術情報 2】。 ダイズを作付けしたほ場の 2022 年度の土壌中交換性カリ含量の平均値は、62mg/100g であり、子実中 ^{137}Cs 濃度の平均値は、3.7Bq/kg 以下であった。	
試験課題名：県内農地土壌の交換性塩基含量の実態解明		A1-2-3
予算区分：繰入金（福島県民健康管理基金） 開始年度：R3 終了年度：R7 担当科所：環境・作物栄養科		
概要	2011 年、2014 年、2017 年に調査を行ったほ場 103 地点の土壌について交換性カリ含量を調査した結果、25mg/100g を超えた地点は 55 地点、2017 年に 25mg/100g 以上あったが 25mg 未満となった地点が 31 地点あった。	
試験課題名：非交換性カリ含量簡易測定法の開発		A1-2-4
予算区分：繰入金（福島県民健康管理基金） 開始年度：R3 終了年度：R5 担当科所：環境・作物栄養科		
概要	放射性セシウム吸収抑制対策として肥培管理の指標となる非交換性カリ含量について、迅速な診断を可能とするため、簡易測定法の検討を行った結果、抽出方法はクエン酸抽出法が有効であった。また、イオンメーターによる測定は、原子吸光光度計より精度が劣る結果となった。	
試験課題名：除染後水田水口へのカリ資材等を活用した放射性セシウム吸収リスクの低減技術の実証		A1-2-5
予算区分：繰入金（福島県民健康管理基金） 開始年度：R3 終了年度：R4 担当科所：環境・作物栄養科		
概要	現地調査の結果、水口付近は土壌中交換性カリ含量が低く、玄米中 ^{137}Cs 濃度が高い傾向が認められたが、玄米中 ^{137}Cs 濃度は全調査地点とも、基準値を大幅に下回っていた。 水稲のポット試験により、カリ資材による ^{137}Cs 移行低減効果の持続性を確認した結果、フィンランド産金雲母が最も高く、続いて南アフリカ産バーミキュライト、ゼオライトの順番であることが明らかになった【放射線技術情報 3】。	
試験課題名：除染後水田に対する中長期的な地力の実態解明と効果的な地力回復技術の開発		A1-2-6
予算区分：繰入金（福島県民健康管理基金） 開始年度：R3 終了年度：R5 担当科所：環境・作物栄養科		
概要	牛ふん堆肥の連用区は、対照区（慣行施肥と稲わら還元）より収量が多かった。玄米のタンパク質含量は全区で高く、区による差が認められなかった。また、牛ふん堆肥の連用区は、土壌中の可給態窒素含量が対照区よりも多く、堆肥連用により土壌の化学性の改善が見られた。	
試験課題名：ゼオライト施用時における玄米への放射性セシウム移行リスク評価		A1-2-7
予算区分：外部資金（放射性物質測定調査委託事業） 開始年度：R3 終了年度：R4 担当科所：環境・作物栄養科		
概要	現地ほ場において、ゼオライトの放射性セシウムの玄米への移行低減効果の持続性を調査した結果、玄米への ^{137}Cs 移行低減は、11 年を経過しても継続することが確認された。また、カリ無施用のポット栽培試験 4 作目でも、ゼオライト施用(3t/10a 相当以上)による玄米中の ^{137}Cs 濃度の移行低減効果が確認された。	

試験課題名：水稲の生産性と安全性の評価ならびに放射性物質移行抑制の実証		A1-2-8
予算区分：繰入金（福島県民健康管理基金） 開始年度：R3 終了年度：R7 担当科所：稲作科		
概要	カリ含量が低い現地ほ場において、カリ上乗せ施用による土壤中交換性カリ含量の変化を調査した結果、カリ上乗せ施用の効果は2か年程度でなくなった。また、土壤中の非交換性カリ含量の変化はほとんどなかった。カリを施用した場合、土壤中交換性カリ含量に比べて、非交換性カリ含量の変動はほとんどなかった。	
試験課題名：畑作物の放射性セシウム吸収に対する土壌の影響解明		A1-2-9
予算区分：繰入金（福島県民健康管理基金） 開始年度：R3 終了年度：R7 担当科所：畑作科		
概要	ダイズの生育量や収量は、基肥80%+追肥20%のカリ施用で全量基肥と同程度となり、放射性セシウム吸収抑制効果も認められた。 過去10年間カリ無施用のダイズほ場では、土壤中の交換性カリ含量及び放射性セシウム濃度は漸減傾向であった一方、子実中の放射性セシウム濃度及び子実への放射性セシウム移行係数は漸増傾向であり、R3年度までと同様の推移をしていることが確認できた。	
試験課題名：カキ・ユズにおける放射性物質の吸収抑制技術等の確立		A1-2-10
予算区分：繰入金（福島県民健康管理基金） 開始年度：R3 終了年度：R7 担当科所：果樹研究所栽培科		
概要	カキの無せん定区は濃度のばらつきが大きい傾向があり、安全な原料柿生産にはせん定は欠かせない作業であると考えられた。カキ新植ほ場での葉及び果実中放射性セシウム濃度は、どの処理区も十分に低い値であったが、現地ほ場の表土戻区の葉でやや高い傾向が見られた。現地では、0-20cmの層で土壤中交換性カリ濃度が高いほど、移行係数が低い傾向が見られた。ユズ現地ほ場の果実中 ¹³⁷ Cs濃度は、葉中 ¹³⁷ Cs濃度、一年枝中 ¹³⁷ Cs濃度との相関が高いことが確認された。	
試験課題名：避難指示区域等における農作物中放射性セシウム吸収抑制技術の開発		A1-2-11
予算区分：繰入金（福島県民健康管理基金） 開始年度：R3 終了年度：R7 担当科所：浜地域農業再生研究センター		
概要	粃殻くん炭は、水稲ポット栽培試験において塩化カリと同様に土壤中交換性カリ含量を高め、放射性セシウム吸収抑制効果があった【放射線技術情報6】。 ペルシアンクローバ、秋ソバを作付けたほ場に蜜蜂の巣箱を設置して採蜜した結果、ハチミツの放射性セシウム濃度は基準値を下回った。蜂蜜の花粉解析の結果、ペルシアンクローバが含まれるのは採蜜開始後2週間で、その後はシロツメグサが多く含まれてることが明らかとなった。 メタン発酵消化液は、水稲ポット栽培試験において塩化カリと同等以上に放射性セシウムの吸収を抑制し、塩化カリ代替効果があった【放射線技術情報7】。	
試験課題名：放射性セシウム濃度低減のための野菜栽培と調理加工		A1-2-12
予算区分：外部資金（飯島藤十郎記念食品科学振興財団助成事業） 開始年度：R3 終了年度：R7 担当科所：浜地域農業再生研究センター、環境・作物栄養科		
概要	野菜の放射性セシウムの移行リスクを調査するため、6種類の野菜(コマツナ、パレイショ、カンシヨ、ニンジン、ブロッコリー、カボチャ)を土壤中交換性カリ含量が異なる条件で栽培した結果、コマツナ、パレイショ、ブロッコリー、カボチャについては、交換性カリ含量を高めることで放射性セシウム吸収を低減できることが示された【放射線技術情報8】。	
試験課題名：再浮遊物質を含む大気中の放射性セシウムの動態と農地・農作物への影響の解明		A1-2-13
予算区分：外部資金（放射能調査研究委託事業） 開始年度：R4 終了年度：R4 担当科所：浜地域農業再生研究センター		
概要	帰還困難区域内でコンテナ栽培をしたコマツナ及び11種類の作物について、降下物の影響は小さいことが示された。	

A1-3 特定復興再生拠点区域等の円滑な営農再開に向けた技術実証

試験課題名：計測ロボットを活用した放射性物質等分布実態の把握		A1-3-1
<p>予算区分：外部資金（農林水産分野の先端技術展開事業） 開始年度：R3 終了年度：R7 担当科所：浜地域農業再生研究センター</p>		
概要	<p>土壌中の放射性セシウム分布状況をトラクタ搭載型放射能測定ロボット（KURAMA-X）で計測した結果、歩行型の KURAMA-m と同様に可視化できることが確認された【放射線技術情報9】。</p>	
試験課題名：営農再開を阻害する加害動物の行動特性や動物種把握による獣害防止策の提案		A1-3-2
<p>予算区分：外部資金（農林水産分野の先端技術展開事業） 開始年度：R3 終了年度：R7 担当科所：浜地域農業再生研究センター</p>		
概要	<p>特定復興再生拠点においてアライグマの生息状況を調査した結果、旧市街地を利用する個体と山林や周辺農地を利用する個体が確認された。また、メスはオスより定住傾向が強く、出産が関係していると考えられた。</p>	
試験課題名：通い農業支援システム等を活用した栽培状況の可視化と評価		A1-3-3
<p>予算区分：外部資金（農林水産分野の先端技術展開事業） 開始年度：R3 終了年度：R7 担当科所：浜地域農業再生研究センター</p>		
概要	<p>トルコギキョウとストック栽培での通い農業支援システムを導入した情報共有試験で、新規生産者が通知や LINE を通した指導により高品質な切り花を生産することができた。新規生産者からは、システムに対しほ場間の温度差がわかる通知や、かん水時期と量を知らせる通知が必要との要望があった。</p>	
試験課題名：緑肥作物等の利用による地力回復技術の開発と蜜源利用		A1-3-4
<p>予算区分：外部資金（農林水産分野の先端技術展開事業） 開始年度：R3 終了年度：R7 担当科所：浜地域農業再生研究センター</p>		
概要	<p>緑肥作物として秋ソバの前作にクリムソクローバを播種し7月にすき込むことで、ヘアリーベッチに比べてソバの倒伏を抑え増収が期待できると考えられた。クリムソクローバを、前年秋播き又は当年3月14日までに春播きすると、ソバが増収になる可能性があった。 ペルシアソクローバのすき込み後に秋ソバを播種したほ場で採蜜した結果、採蜜量は多かったが、秋季にハチミツの放射性セシウム濃度が上昇する傾向があった。</p>	
試験課題名：効率的雑草管理技術の開発と実証		A1-3-5
<p>予算区分：外部資金（農林水産分野の先端技術展開事業） 開始年度：R3 終了年度：R7 担当科所：浜地域農業再生研究センター</p>		
概要	<p>各種多年生雑草の優占する保全管理ほ場において塩素酸塩粒剤を雑草発生時に散布した結果、ほ場による効果のばらつきが見られたものの、イヌスギナ、スギナ、ヨモギ、そのほか多年生雑草に対して有効な防除効果が認められた。また、耕起からの日数にかかわらず、塩素酸塩粒剤を冬季(12月下旬～3月下旬)に散布することで、翌春以降に発生するヨモギを効果的に防除できた。</p>	
試験課題名：特定復興再生拠点等における農作物栽培の生産性と安全性の評価		A1-3-6
<p>予算区分：外部資金（農林水産分野の先端技術展開事業） 開始年度：R3 終了年度：R7 担当科所：浜地域農業再生研究センター、畜産研究所飼料環境科</p>		
概要	<p>大熊町、葛尾村の特定復興再生拠点区域に設置された試験水田で、水稻の生産性と安全性を評価した。いずれのほ場においても玄米収量は基準収量並で、玄米中放射性セシウム濃度は基準値を大幅に下回った。 特定復興再生拠点区域の除染後農地において、飼料用トウモロコシ及び牧草を栽培した結果、放射性セシウム濃度は飼料の暫定許容値(100Bq/kg)を大幅に下回った。また、再浮遊した¹³⁷Csが玄米中¹³⁷Cs濃度に及ぼす影響は小さいことを確認した【営農再開技術情報1】。</p>	

試験課題名：放射性物質移行抑制技術の実証・開発と畑作物の安全性の評価		A1-3-7
予算区分：外部資金（農林水産分野の先端技術展開事業） 開始年度：R3 終了年度：R7 担当科所：畑作物科		
概要	作物が吸収する放射性セシウム量を予測するために開発されたセシウム吸着シートが、畑作物において適用可能であるか現地実証を行った。ダイズは、ラッカセイやソバに比べて、子実中への放射性セシウム移行係数が高かった。また、ラッカセイの移行係数は、交換性カリ含量が低くても高まりにくく、ソバの移行係数はカリ施用により低下することを確認した。また、R3年度までのデータを用いて、土壌中の交換性放射性セシウム濃度及び交換性カリ含量から、ダイズ・ラッカセイ・ソバの子実中の放射性セシウム濃度を推測する式を作成した。	
試験課題名：草地における放射性セシウム吸収抑制技術の開発・実証と未除染牧草地利用可否基準の策定		A1-3-8
予算区分：外部資金（農林水産分野の先端技術展開事業） 開始年度：R3 終了年度：R7 担当科所：畜産研究所飼料環境科、浜地域農業再生研究センター		
概要	草地更新時に造粒金雲母を施用することにより、土壌中交換性カリ含量が低い場合においても、牧草中放射性セシウム濃度の上昇を抑えられる傾向があった。また、草地維持管理時に使用するカリ質肥料として硫酸カリ苦土を施用し、牧草中のミネラルバランスの改善を試みたが、効果は判然としなかった。 放射性セシウム低吸収草種であるトールフェスクについて、営農再開地域に適した品種を選定するため利用1年目の収量性等を調査した結果、年間乾物収量は「ウシブエ」が最も高かった。また、トールフェスクは嗜好性が劣るとされているが、オーチャードグラスと比較して採食速度及び採食量に差はなく、搾乳牛の飼料として利用可能であることを確認した【放射線技術情報5】。放牧利用について、牧草中の放射性セシウム濃度は低く、放牧牛の血液成分に問題がないことを確認した。	
試験課題名：山羊乳及び山羊肉の放射性セシウムの移行調査		A1-3-9
予算区分：外部資金（農林水産分野の先端技術展開事業） 開始年度：R3 終了年度：R5 担当科所：畜産研究所酪農科		
概要	山羊に放射性セシウムを含む飼料を28日間給与し、畜産物等への放射性物質の移行に関する調査をした結果、山羊乳の ^{137}Cs 濃度は飼い直し70日目で検出限界値(0.8Bq/kg)未満となり、山羊乳と骨格筋の ^{137}Cs の移行係数は、それぞれ0.09、0.93(実測値から算出した暫定値)であった。	
試験課題名：生産現場における最適な放射性セシウム移行リスクの評価手法およびほ場特性に合わせた移行低減技術の提案		A1-3-10
予算区分：外部資金（農林水産分野の先端技術展開事業） 開始年度：R3 終了年度：R7 担当科所：環境・作物栄養科		
概要	西郷村の水田48か所の土壌調査を行った結果、非交換性カリ含量はいずれの地点も50mg/100g乾土以下であり、黒ボク土では交換性放射性セシウム含量と交換性カリ含量比がやや高くなる傾向が見られた。 カリ無施用区ではカリ施用区より交換性カリ含量は低く、移行係数は高くなった。栽培期間中に交換性 ^{137}Cs 含量が変動することが認められた。 水稻のポット試験では、カリ無施用により収穫後に土壌の交換性 ^{137}Cs 含量が増加する土壌が見られた。非交換性カリ含量と移行係数には負の相関が見られたが、交換性 ^{137}Cs 含量と移行係数の関係は判然としなかった。	

A2 避難地域等の営農再開を支える技術の実証

A2-1 避難地域の営農再開を支援する研究

	試験課題名：避難地域等における営農再開のための支援研究	A2-1-1
	予算区分：繰入金（福島県原子力災害等復興基金） 開始年度：R3 終了年度：R7 担当科所：浜地域農業再生研究センター	
概要	<p>浪江町の4地区のほ場群で土壌養分の実態調査を行った結果、水稻の作付け回数の増加に伴い土壌中の交換性カリ含量が増加する傾向にあった【営農再開技術情報2】。</p> <p>双葉町の除染後農地では、腐植含量と可給態窒素含量の基準値を満たすほ場は4割程度であり、除染時の客土の厚さ10cm以上のほ場では全て基準値未満であった。また、腐植含量と可給態窒素含量の間に相関関係が認められ、土づくりの必要性の判断指標になると考えられた【営農再開技術情報3】。</p> <p>浪江町でメタン発酵消化液の流し込み施肥によりWCS用稲「たちあやか」を栽培した結果、慣行栽培と比較し籾重は低下したが、全重は同等であった。また、放射性セシウム濃度は検出限界値を下回った。</p> <p>大熊町で前年秋に播種したペルシアンクローバをすき込んでソバを播種した結果、成熟期前に倒伏したことから、肥沃な土壌では播種時期遅らせる必要があると考えられた。</p> <p>ヘアリーベッチのすき込み適期は、秋播きで5月上旬、春播きで6月中旬と考えられたが、春播きによる炭素及び窒素供給量は秋播きの4割程度であった【営農再開技術情報4】。</p> <p>大熊町で、営農再開直前を想定して塩素酸塩粒剤を前年12月に散布した上で緑肥作物の春播きを行いすき込んだ結果、十分な量の窒素及び炭素を供給できた【営農再開技術情報5】。</p> <p>難防除雑草である多年生のエゾノギンギシとスギナが混生している休耕地において、冬季にグリホサートカリウム塩液剤と塩素酸塩粒剤を体系処理した結果、両者を有効に防除できた【営農再開技術情報6】。</p> <p>電気柵は設置場所や管理作業の不備で十分な効果を発揮できない事例も多いため、電気柵周辺の土壌表面の状態が電圧降下に与える影響を評価した結果、本体の出力が低下した時にコンクリートやアスファルト舗装で柵線の適正な電圧の目安である4kV以下となる可能性が示された【営農再開技術情報7】。</p> <p>浪江町でのナタネ栽培における加害鳥獣であるニホンザル及びヒヨドリの被害実態を明らかにした。ニホンザルによる被害が主茎抽だい直後であれば、側枝による収穫が可能であった【営農再開技術情報8】。</p> <p>簡易的な放射性セシウム降下物の評価法を考案し、降下物由来の放射性セシウムが植物体へ与える影響は極めて限定的であることを確認した。</p> <p>富岡町の除染後水田での水稻湛水直播栽培において、「播種同時散布の初期除草剤＋初中期一発除草剤」と「播種同時散布の初中期一発除草剤＋中後期除草剤」の体系処理を比較した結果、いずれも雑草の発生を抑制し、水稻の収量を確保できた【営農再開技術情報9】。</p> <p>川俣町で、春播きマメ科緑肥（ヘアリーベッチ）をすき込んで「山木屋在来ソバ」を栽培した結果、化学肥料を使った栽培と同等の収量を確保できた【営農再開技術情報10】。</p> <p>富岡町で、ソバ「会津のかおり」の播種を8月下旬まで遅らせても、目標収量が得られた。</p> <p>川内村の前年排水不良のソバほ場で、入梅前に心土破碎及び額縁明きよによる排水対策を行った結果、排水性が向上し、適期作業と収量の改善ができた【営農再開技術情報11】。</p> <p>飯館村の水田転換畑のソバほ場で、営農排水改良ラインナップ技術新世代機であるカットブレーカーによる心土破碎を行った結果、排水性が向上し、収量の改善ができた【営農再開技術情報12】。</p> <p>南相馬市の営農再開直前の保全管理農地に緑肥作物のクロタラリア（マメ科）とソルガム（イネ科）を播種した結果、すき込みによる炭素及び窒素供給量は、クロタラリアよりソルガムが優れ、緑肥作物なし（雑草）の2.4倍であり、タマネギ収量も1割程度増加した【営農再開技術情報13】。</p> <p>葛尾村のピーマン栽培において、ほ場の傾斜による収穫量のムラを解消するために、不足が予想される窒素量を肥効調節型肥料で傾斜上部と中部の基肥に施用したが、収穫量を均一にすることはできなかった。</p> <p>5種類の野菜（コマツナ、ホウレンソウ、カブ、キャベツ、ブロッコリー）について、土壌中の交換性カリ含量を高めることにより、可食部の放射性セシウム吸収を低減できることが示された【放射線技術情報8】。</p> <p>榎葉町でR2年度から本格的な出荷が始まり、R3年度から斑点性の病害の発生が見られているユウカリについて、現地で指導している散布頻度で薬剤散布を行った結果、「グニー」は「銀世界」より病害による被害が少なく、収量を確保できた【営農再開技術情報14】。</p>	

概要	<p>浜通り平坦地域ではトルコギキョウの栽培が拡大しているが、一部の施設でフザリウムが原因と考えられる土壌病害による減収が問題となっている。そのため、多発ほ場で、R3年度に転炉石灰によるpH 矯正と還元消毒を実施し、立木性セネシオ栽培後に再び転炉石灰を散布して還元消毒を実施した結果、消毒後に菌密度の低下が見られた。消毒後のトルコギキョウ抑制作型では発病株率が低くなり、出荷率が90%以上となった【営農再開技術情報15】。</p> <p>浪江町の花木ほ場のオヒシバにグリホサートカリウム塩液剤への抵抗性があることを確認した【営農再開技術情報16】。グリホシネートPナトリウム塩液剤(ザクサ液剤)及びジクワット・パラコート液剤(プリグロックスL)については除草効果を確認できたが、ジクワット・パラコート液剤では残草が見られた【営農再開技術情報17】。</p> <p>大熊町で栽培したイタリアンライグラスの1番草について、土壌中の交換性カリ含量が高いほど牧草への放射性セシウムの移行係数は低くなった。</p> <p>「福島県飼料作物奨励品種」として新たに登録されたペレニアルライグラス改良品種である「夏ごしペレ」を飯館村で栽培した結果、従来品種の「ヤツユメ」と同等以上の乾物収量が確保できた。また、除染後農地で早春施肥による窒素追肥量を増やした結果、硝酸態窒素濃度の許容範囲内を維持したまま牧草収量を増加させることができた【営農再開技術情報18】。</p> <p>榎葉町で実施した寒地型牧草のイタリアンライグラスと暖地型飼料作物のソルガムとの二毛作栽培体系において、イタリアンライグラス単作体系より乾物収量が増加した。また、TDN1kg 当たり生産費は18.0円削減可能であった【営農再開技術情報19】。</p> <p>浪江町で緑肥作物のヘアリーベッチを栽培してすき込んだ後に飼料用トモロコシを栽培した結果、堆肥施用と同等のTDN(可消化養分総量)収量が確保でき、堆肥施用と同等の増収が期待できた【営農再開技術情報20】。</p>
----	---

【参考】 営農再開に向けた実証栽培(26課題)

No	実証地区	品目	面積(a)	課題名	概要
1	川俣町 山木屋	作物 (ソバ)	25	山木屋在来ソバの栽培実証	緑肥作物のすき込みによる、山木屋在来ソバの生産性向上を図る。
2	南相馬市 小高区	作物 (水稻)	90	マメ科緑肥作物すき込みによる水稻栽培の実証 排水不良農地における緑肥作物の栽培	排水不良農地におけるマメ科緑肥作物栽培の実証、及びマメ科緑肥すき込み後の水稻の生育及び品質の検証を行う。
3	南相馬市 小高区	野菜 (タマネギ)	5.3	除草剤散布時期による難防除雑草に対する防除効果	保全管理期間中における、除草剤散布と緑肥作物栽培が、タマネギ栽培期間中の雑草の植生、及びタマネギの生産性に与える影響を明らかにする。
4	南相馬市 小高区	野菜 (タマネギ)	7.5	タマネギ栽培における地力増進作物の選定	保全管理期間中の緑肥作物の違いが、タマネギの生産性に与える影響を明らかにする。
5	飯館村 前田	作物 (ソバ)	30	ソバ栽培における排水対策の実証	問題となっているほ場の現状を把握した上で、技術・知識を有する機関と検討し、導入可能な技術を実証する。
6	飯館村 関根	畜産 (牧草)	1.0	除染後農地におけるペレニアルライグラスの栽培実証	ペレニアルライグラスの福島県奨励品種(現在申請中含む)を、除染後農地で栽培した時の収量や品質等の検証を行う。
7	榎葉町 上繁岡	花き (ユウカリ)	1.5	浜通り平坦地域におけるユウカリ病害の防除方法の検討	浜通り平坦部において、ユウカリの病害による被害が見られるため、防除方法の検討を行う。
8	榎葉町 下井手	畜産 (飼料作物)	8.0	浜通り沿岸地域における飼料作物収量向上栽培実証	浜通り沿岸地域で、イタリアンライグラスとソルガムの二毛作体系で栽培した時の収量性について検討する。

No	実証地区	品目	面積(a)	課題名	概要
9	富岡町 本岡	作物 (水稻)	60	除染後農地におけるふくひ びきの湛水直播栽培の実証	イネ科及び広葉雑草に効果のある初期除 草剤、中期除草剤の体系処理を実証する。
10	富岡町 上手岡	作物 (ソバ)	9	晩生品種の導入による秋ソ バの作期拡大の実証	「会津のかおり」より熟期の遅いソバ品種 を導入して、作期拡大を実証する。
11	富岡町 (特定復 興再生拠 点区域)	野菜 (全般)	4.8	特定復興再生拠点等におけ る各種野菜の安全性評価	特定復興再生拠点における、野菜栽培の 安全性を評価する。
12	川内村 下川内	作物	30	ソバ栽培における排水対策 の実証	暗きよ又は明きよの施工による、排水対策 効果を実証する。
13	大熊町 (特定復 興再生拠 点区域)	野菜 (全般)	4.8	特定復興再生拠点等におけ る各種野菜の安全性評価	管理する生産者がいる前提で特定復興 再生拠点における、野菜栽培の安全性を評 価する。
14	大熊町 熊	畜産 (牧草)	2.0	営農再開に向けたイタリアン ライグラスの栽培実証	営農再開に向けて、放射性セシウム吸収 抑制対策を行ってイタリアンライグラスを栽 培した時の安全性について評価する。
15	大熊町 大川原	地力増進 作物	55	緑肥作物の組合せによる農 地保全管理技術の実証	緑肥作物と主作物との組み合わせを考慮 し、播種時期と刈り取り時期を検討する。
16	大熊町 下野上	地力増進 作物	20	特定復興再生拠点での効果 的な雑草管理と地力増進作 物の選定	除草剤を使用した効果的な雑草管理を実 証し、後作物に適した地力増進作物を選定 する。
17	大熊町 野上	地力増進 作物	9.1	特定復興再生拠点での地力 増進作物の播種適期の検討	水稻作付前のマメ科緑肥作物のすき込み までに、マメ科緑肥作物の生育が十分に確 保できる播種適期を検討する。
18	双葉町	水稻	-	営農再開前水田の地力現状 分析、改良方法の提案	町内の営農再開が見込まれる農地の化 学性、及び放射性セシウム等を分析し、地力 の現状を把握することで、土壌改良等の必 要性について検討する。
19	浪江町	水稻	57	液肥活用の可能性検討	資材の成分、品質及び使用場面等の問題 を整理し、効果的な使用方法を検討する。
20	浪江町	水稻	-	営農再開前水田の地力現状 分析、改良方法の提案	町内の営農再開が見込まれる農地の化 学性等を分析し、地力の現状を把握するこ とで、土壌改良等の必要性について検討す る。
21	浪江町 幾世橋	花き (トルコギ キョウ)	2	トルコギキョウ栽培における 土壌病害対策技術の実証	トルコギキョウ栽培における土壌病害解決 のために、土壌消毒方法の効果を検証す る。
22	浪江町 小野田	花き (コニフ ァー)	55	花木栽培ほ場における抵抗 性雑草の防除方法の検討	花木栽培ほ場において発生が見られてい る、薬剤抵抗性雑草の防除方法を検討す る。

No	実証地区	品目	面積(a)	課題名	概要
23	浪江町立野	畜産(飼料作物)	2	緑肥作物すき込みによる飼料作物の収量確保技術の実証	除染後農地における飼料作物の生産性向上を図るため、緑肥作物による効果的な地力回復技術を実証する。
24	浪江町立野	鳥獣害対策	25	鳥獣被害の実態把握及び対策改善提案	当該地域における鳥獣被害の実態を把握し、加害種を特定するとともに、効果的な被害防止対策を検討する。
25	葛尾村下葛尾	野菜	0.3	中山間地域に適したピーマンかん水技術の実証	ほ場の傾斜による、ピーマンの生育ムラを解消する技術を実証する。
26	共通	鳥獣害対策	-	電気柵設置条件の調査	電気柵の効果的な利用のため、ほ場周辺において電圧に影響する要素を調査する。

A2-2 広域エリアを対象とした大規模水田営農における生産基盤技術の確立

試験課題名：広域エリアにおける水田輪作栽培管理技術の開発・実証		A2-2-1
予算区分：外部資金（農林水産分野の先端技術展開事業） 開始年度：R3 終了年度：R7 担当科所：稲作科、浜地域研究所		
概要	乾田直播栽培について、「ふくひびき」、「天のつぶ」、「コシヒカリ」の3品種における播種時期及び窒素施肥量を変えた栽培試験（浜地域研究所）や、「天のつぶ」における播種量(苗立数)及び窒素施肥量を変えた栽培試験(稲作科)を行い、生育状況、収量などの基礎データを収集した。その結果、「ふくひびき」、「天のつぶ」は9月下旬、「コシヒカリ」は9月下旬から10月上旬に成熟期に達した。目標収量を確保するため「ふくひびき」では穂数320本/m ² 、籾数35,000粒/m ² 、「天のつぶ」では穂数410本/m ² 、籾数32,000粒/m ² が必要になると考えられた。	
試験課題名：営農再開に対応した大規模水田輪作体系の実証		A2-2-2
予算区分：外部資金（農林水産分野の先端技術展開事業） 開始年度：R3 終了年度：R7 担当科所：畑作科、経営・農作業科		
概要	浅層暗きよを施工した区では、降雨後の土壌水分が速やかに低下する傾向にあった。浅層暗きよや畦立てをすることによって、ダイズの出芽率が改善された。しかし、畦立てした区では滞水により生育が抑制された。 現地ほ場においては排水対策施工前のダイズの生育収量調査を行い、(国研)農研機構東北農研ヘデータを提供した。	
試験課題名：広域エリアにおけるICTを用いた省力的ほ場管理技術		A2-2-3
予算区分：外部資金（農林水産分野の先端技術展開事業） 開始年度：R3 終了年度：R7 担当科所：作物保護科		
概要	斑点米被害予測モデルの構築と精度検証に向けた調査を行った。調査地域における斑点米被害の主要加害種は、クモヘリカメムシとカスミカメムシ類であり、クモヘリカメムシのトラップ誘殺数に影響する土地の利用情報要因として、トラップから1km以内の針葉樹林面積が抽出された。	

試験課題名：飼料用トウモロコシの安定多収、加工・調製技術の開発と実証		A2-2-4
予算区分：外部資金（農林水産分野の先端技術展開事業） 開始年度：R3 終了年度：R7 担当科所：畜産研究所飼料・環境科		
概要	水田輪作体系に適した多収子実用トウモロコシ品種を選定するため、生育特性や収量性を調査した結果、中晩生品種「SH4681」の収量が多かったが、R4年度は湿害の影響が大きく登熟の遅れが見られた。 子実用トウモロコシ利用拡大に向け、肉用牛繁殖経営で利用可能なサイレージを開発するため、子実用トウモロコシに飼料用米等を混合した飼料をガラ袋ラップ法により調製し供卵牛に給与した結果、血液性状に問題はなく、飼料の嗜好性も良好であった。また、サイレージ開封後のカビ毒や発酵品質について、調査した開封後13日まで基準値以内であり、未開封のものは調製後7か月が経過しても良質な発酵を維持することができた。	
試験課題名：経営管理システムを活用した経営データ分析・活用手法		A2-2-5
予算区分：外部資金（農林水産分野の先端技術展開事業） 開始年度：R3 終了年度：R7 担当科所：経営・農作業科		
概要	2法人の経営管理システムの入力データから作業別の労働時間を算出して比較した結果、一つの法人で入力漏れがあることがわかり、システム活用上の問題となることが明らかになった。また、相双地域の大規模経営体に聞き取り調査を行い、経営の状況及び経営管理システムの活用状況について整理した。	

A2-3 先端技術を活用した施設野菜・畑作物の省力高収益栽培・出荷技術の確立

試験課題名：施設果菜類の雇用労力とロボットを作業主体とした大規模経営技術の開発・実証		A2-3-1
予算区分：外部資金（農林水産分野の先端技術展開事業） 開始年度：R3 終了年度：R7 担当科所：浜地域研究所、野菜科、経営・農作業科		
概要	施設夏秋キュウリ栽培におけるつる下ろし栽培について、仕立て本数は4本が適当であり、一果実当たりの収穫作業時間は、摘心栽培と比較し8割程度に短縮された。 ミスト噴霧について、噴霧量の違い及び仕立て方法の違いによる高温抑制効果、生育及び収量への影響を調査した。噴霧量が多いほど高温抑制や湿度改善効果が高いことを確認し、生育や収量への影響も考慮してミスト噴霧する際の参考値を決定した。また、アーチ摘心栽培、つる下ろし栽培ともにミスト噴霧による可販果本数、A品本数の増収効果が確認された。特に、つる下ろし栽培では、高温時期の収量がミスト噴霧により向上することを確認した。 生産管理支援システムの現地導入により、スマートフォンとQRコードを用いて作業員、栽培方法、作業項目別の詳細な作業記録を収集、集計できた。また、作業記録に環境条件や出荷量のデータを照らし合わせることで、各要素が作業効率に与える影響を評価する指標としてシステムが活用できることを明らかにした。	
試験課題名：加工適性の高いコムギの導入による省力高収益生産技術の開発・実証		A2-3-2
予算区分：外部資金（農林水産分野の先端技術展開事業） 開始年度：R3 終了年度：R5 担当科所：畑作科		
概要	コムギ品種「夏黄金」について、追肥を省略したいいくつかの施肥体系を試験し、幼穂形成期追肥を省略した区が慣行並の収量と検査等級となった。また、本品種の栽培適応性を判断するため、県内の積雪地域で2か所に試験ほ場を設置し調査した結果、「ゆきちから」並の収量となったことから、積雪地域での栽培が可能であると考えられた。 コムギの生育に障害となる雑草の発生状況を調査した結果、ネズミムギの発生ほ場が目立った。	

試験課題名：露地野菜栽培における難防除雑草優占化機構の解明と難防除雑草対策技術の確立		A2-3-3
予算区分：外部資金（農林水産分野の先端技術展開事業）		
開始年度：R3 終了年度：R7		
担当科所：浜地域農業再生研究センター、野菜科		
概要	<p>タマネギの春まき直播栽培で、適する品種と播種時期を明らかにするため、生育及び収量を調査した結果、生育期間が長く確保できる晩生品種の「トタナ」が適し、播種時期は低温の影響を受けにくい4月上・中旬が適していることを明らかにした。秋まき直播栽培では、雑草防除体系においてR3年に直播栽培へ適用が拡大されたペンディメタリン乳剤をタマネギ2葉期に用いることで、越冬前の中耕を省略できる省力的な防除体系を確立した【参考成果15】。</p> <p>また、タマネギ栽培で問題となるカラシナは、慣行防除体系にグリホサートカリウム塩液剤を追加処理することで効果的に防除できた。</p>	

A2-4 避難地域の営農再開を促進する先端プロ技術の社会実装

試験課題名：花きの計画的安定生産技術の実証研究		A2-4-1
予算区分：国庫（農林水産分野の先端技術展開事業）		
開始年度：R3 終了年度：R7		
担当科所：花き科		
概要	<p>【キク類】 温度条件を揃えた環境では、多くの品種で日長条件によって到花日数が変動する可能性が示唆された。昼白色LED、電球色LEDを用いて電照栽培を行った場合、いずれも赤色LEDよりやや劣るものの、開花抑制効果は高かった。小ギクの挿し穂の温湯浸漬処理において、冷蔵の有無や冷蔵期間の違いによる挿し芽後の障害などへの影響は、判然としなかった。水差し状態で遮光した場合、立ち枯れ症状はほぼ見られなかった。</p> <p>【トルコギキョウ】 秋出荷作型において、15℃の作型適応処理は、20℃に比較して開花期が3~6日程度遅くなるものの、同等以上の切り花を得ることができ、8月上旬定植と比較すると7月中旬定植で品質向上効果が高かった。作型適応処理の電照の光の強さは、切り花品質には大きく影響しないが、品種により電照が強くなるほど採花期が早まる傾向が見られた。</p>	
試験課題名：早期成園化が可能な樹形によるナシ、ブドウ、モモの省力・高品質生産技術の実証		A2-4-2
予算区分：国庫（農林水産分野の先端技術展開事業）		
開始年度：R3 終了年度：R7		
担当科所：果樹研究所栽培科、病害虫科		
概要	<p>ナシジョイントV字樹形について、「王秋」は4年目には10a当たり約4,600~6,100kgの収量が得られ、果実の大きさは570~630gと概ね標準的な果実が生産された。また、花芽着生率については、2年生苗区が1年生苗区より優れる傾向にあった【参考成果17】。「甘太」は4年目には10a当たり約3,800~4,600kgの収量を得ることができ、収量、果実品質、花芽の着生については、苗木の樹齢の違いによる差は認められなかった【参考成果18】。</p> <p>ブドウ「BK シードレス」の花穂整形時間は枝梗区で最も短かったが、果粒数が少なく、果房重が小さかった。カサ掛けによる日焼け対策試験については、日焼け果発生率はいずれの試験区でも無処理区と比較して低く抑えられた。果実品質に対するカサの種類の影響はなかった。</p> <p>モモのジョイントV字樹形において、簡易雨よけを組み合わせた結果、収穫期が遅れる傾向にあったが、果実品質への大きな影響は認められなかった。また、ジョイントV字樹形は、立木栽培と比較し、収穫期が遅れ、果実が小さい傾向が認められた。</p>	
試験課題名：肉用牛のAI超音波肉質診断技術の実証		A2-4-3
予算区分：国庫（農林水産分野の先端技術展開事業）		
開始年度：R3 終了年度：R7		
担当科所：畜産研究所肉畜科		
概要	<p>AI超音波肉質診断により、肥育中に肉質を判断した。肉質の向上が見込める牛は、単価向上を目指して共励会へ出品するなど、実証農家が経営判断する上で根拠の一つになった。肉質の向上が見込めない牛は、早期出荷を促すことにより、平均肥育日数が26.4日短縮された。</p>	

B 農林水産業の生産力を強化するための、先端技術を活用した技術開発等の推進

B 1 先端技術を活用した新たな農業生産技術の開発

B 1-1 イノベーションによる避難地域等の新たな農業生産技術の開発

試験課題名：稲作の大規模化・省力化に向けた農業水利施設管理省力化ロボットの開発 B1-1-1	
予算区分：外部資金（農林水産分野の先端技術展開事業） 開始年度：R3 終了年度：R5 担当科所：経営・農作業科	
概要	浜通り地域では、労働力不足のため水路の管理を外部委託している地域があることを確認した。開発した試作機の性能評価を行った結果、従来の人力による水路管理作業の労力の2割以上を低減できることが示された。
試験課題名：「見える化」技術を活用した土壌肥沃度のバラツキ改善技術の開発 B1-1-2	
予算区分：外部資金（農林水産分野の先端技術展開事業） 開始年度：R3 終了年度：R5 担当科所：浜地域農業再生研究センター	
概要	「土壌肥沃度の見える化」＋「高機能堆肥の可変散布」システムを開発中であり、高機能堆肥の施用効果を検証するため、コムギのポット試験を開始した。
試験課題名：ICT・放牧を活用した肉用繁殖雌牛管理技術の効率化 B1-1-3	
予算区分：外部資金（農林水産分野の先端技術展開事業） 開始年度：R3 終了年度：R7 担当科所：畜産研究所沼尻分場	
概要	放射線の測定機能を搭載するGPSを作成中であり、携帯電話の電波が届かない場所においても通信が可能であった。試作機による放射線測定は市販品と同程度であり、データを自動取得できたが、位置情報の誤差が大きく、改良が必要であった。

B 1-2 スマート農業技術を活用した農業生産技術の確立

試験課題名：データベースを活用したスマート農業経営の構築 B1-2-2	
予算区分：一般財源（企業農業参入サポート強化事業） 開始年度：R3 終了年度：R5 担当科所：経営・農作業科	
概要	大規模水田経営体について経営管理システムのデータを調査し、一部のスマート農業機械を導入した場合の経営モデルを作成した。また、園芸品目（アスパラガス、モモ、リンドウ）について経営指標を作成するとともに、普及機関に対して聞き取りを行い経営指標作成のための課題を抽出した。
試験課題名：花粉採取と受粉作業の省力化を可能にするスマート農業技術の開発 B1-2-3	
予算区分：外部資金（戦略的スマート農業技術等の開発・改良） 開始年度：R4 終了年度：R6 担当科所：果樹研究所栽培科	
概要	自走式花蕾採取機の利用に向けてリンゴのジョイント樹を育成した結果、「スノードリフト」と「センチネル」で生育が良好であった。 オウトウのドローン受粉の実用化に向けて、「暖地オウトウ」花粉を利用したときの結実率、果実品質を慣行と比較した結果、有意な差はなかった。

B 1-3 先端技術を活用した省力的栽培技術の確立

試験課題名：水稲無コーティング湛水直播による業務用米の低コスト生産技術の確立 B1-3-1	
予算区分：外部資金（イノベーション創出強化研究推進事業） 開始年度：R2 終了年度：R4 担当科所：稲作科	
概要	無コーティング直播について、ロボットトラクタと折りたたみ式ハーロー対応播種機を用い、ほ場一筆に根出し種子をフルオートで無人で精度良く播種することができた。また、根出し種子を用いた無コーティング直播栽培では、鉄コーティング直播栽培と同等の収量及び玄米品質が得られ、本県において適応可能であることを実証した【参考成果11】。

試験課題名：IoTによる遠隔監視システムを活用した育苗管理の省力化技術開発		B1-3-2
予算区分：一般財源 開始年度：R3 終了年度：R5 担当科所：経営・農作業科		
概要	市販のIoT機器を利用した遠隔監視システム（通い農業支援システム）にカメラを容易に追加でき、ハウス内の温度、湿度、地温、土壌水分、写真の情報を生産者のスマートフォンに通知することができることを実証した。	
試験課題名：「米処」会津地域における新たな稲作経営の展開のための栽培技術の確立		B1-3-3
予算区分：外部資金（イノベーション創出強化研究推進事業） 開始年度：R3 終了年度：R5 担当科所：会津地域研究所		
概要	大規模の稲作経営体で過度に集中する春作業の分散化を目指し、降雪・積雪前の初冬に播種する初冬播き乾田直播栽培について会津平坦部での適応性を検討した。前年産種子で50%以上の苗立率が得られ、種子の貯蔵条件として冷蔵処理が有効であることを確認した。また、肥料試験では、シグモイド型肥料の有効性が明らかとなった。生産者による現地実証では、収量減となった原因と経営的な課題を抽出した。	
試験課題名：ブロッコリー選別自動収穫機の機械化栽培体系の確立		B1-3-5
予算区分：外部資金（戦略的スマート農業技術等の開発・改良） 開始年度：R3 終了年度：R6 担当科所：経営・農作業科、野菜科、浜地域研究所		
概要	ブロッコリーの機械収穫に適した品種として、「SK8-123」が有望であると考えられた。長期無追肥苗について、深植えによる倒伏軽減効果を確認できた。慣行の手収穫時間は16.5～26.7秒/株で、その場合の全株収穫に必要な労働費は20,963円/10aと試算された。	
試験課題名：ブロッコリー栽培における一斉収穫・出荷・販売体系の構築		B1-3-6
予算区分：外部資金（新稲作研究会委託試験） 開始年度：R3 終了年度：R5 担当科所：経営・農作業科		
概要	加工業務用の秋作ブロッコリーの機械一斉収穫において、0.17m/sで一斉収穫ができ、出荷可能品割合は53.6%であった。青果用ブロッコリーの手収穫を上回る収益性の確保には、収穫速度と出荷可能品割合の向上が必要であることが明らかになった。	
試験課題名：ICT・IoT技術を活用した花きの新たな農業生産技術の確立		B1-3-7
予算区分：一般財源 開始年度：R3 終了年度：R7 担当科所：会津地域研究所		
概要	トルコギキョウ抑制作型において、同一地域内2ほ場の栽培環境モニタリングデータを収集、比較した結果、生理障害発生の要因として飽差が一因として考えられ、今後の栽培環境の改善に活用できると考えられた。	
試験課題名：大規模酪農経営における飼養管理技術の確立		B1-3-8
予算区分：一般財源 開始年度：R3 終了年度：R6 担当科所：畜産研究所酪農科		
概要	大規模酪農経営において重要視される長命連産性について、要因を解析するために牛群検定データの分析を行った。その結果、長命連産性が達成できている農家と比べて、長命連産性に課題がある農家は、初産、2産において、平均搾乳日数とJMRペナルティが長くなる傾向があった。併せて、農家での長命連産性の評価を行うため、農家の牛群検定成績から、長命連産性を評価できるシートの開発に取り組んだ。	

C 県産農林水産物の競争力を強化するための、「ふくしま」ならではの価値向上に資する品種開発等の推進

C1 市場ニーズに対応したオリジナル品種・系統と生産技術等の開発

C1-1 個性豊かな県オリジナル水稻、野菜・花き品種の育成

試験課題名：個性豊かな県オリジナル水稻品種の育成		C1-1-1
予算区分：国庫（福島県産農産物競争力強化事業(研究)）、一般財源、寄附金（JAグループ福島寄附金） 開始年度：R3 終了年度：R7 担当科所：品種開発科、浜地域研究所		
概要	<p>出穂期が「あきたこまち」～「日本晴」並の高温登熟性の優れる良質・極良食味品種、低温出芽性と伸長性があり耐倒伏性の優れる直播向け品種、高度精白可能な酒造好適米品種の育成を目標とし、74 組合せの交配を行い、58 組合せ(粳米 44、酒米 10、糯米 4)から稔実種子を得た。</p> <p>系統選抜により、一般粳 32 系統(郡系 1401～1432)、糯米 2 系統(郡系糯 1433、1434)、酒米 10 系統(郡系酒 1435～1444)、飼料用米 1 系統(郡系 1445)の計 45 系統に新規で郡系番号を付与した。</p> <p>郡系から有望な系統を選抜し、「郡系 1275」に「福島 72 号」、「郡系 1276」に「福島 73 号」、「郡系 1352」に「福島 74 号」、「郡系 1351」に「福島 75 号」を付与し、次年度の生産力検定本調査、奨励品種決定基本調査に供試することとした。</p> <p>福島番号を付与した系統について、総合的な評価を行った結果、「福島 59 号」、「福島 63 号」、「福島 66 号」、「福島 68 号」、「福島 69 号」は、比較品種よりもかなり多収だった。「福島 59 号」、「福島 63 号」、「福島 66 号」、「福島 69 号」は、食味も優れていた。福島系統のうち「福島 59 号」、「福島酒 60 号」、「福島 62 号」、「福島 63 号」は特性を把握したため、試験終了とした。</p> <p>県育成系統の湛水直播適性（低温出芽性、低温伸長性）を検定した結果、発芽率“優”と判定した系統はなかった。</p> <p>福島番号系統及び郡系系統の一部、計 30 系統について高温登熟性検定を実施した結果、「強」と「やや強」と判定した系統は 23 系統であった。特に、「福島 68 号」と「福島 69 号」は、収量性と高温登熟性に優れていたため有望とした。</p> <p>特性検定試験（耐冷性、葉もち、穂もち、真性抵抗性）を実施した。耐冷性が「強」以上と判定された系統は 30 系統、葉もちが「強」以上と判定された系統は 48 系統、穂もちが「強」以上と判定された系統は 44 系統だった。真性抵抗性は、93 系統についていもち病に対する真性抵抗性遺伝子型を明らかにした。</p>	
試験課題名：個性豊かな県オリジナル野菜品種の育成		C1-1-2
予算区分：国庫（福島県産農産物競争力強化事業(研究)）、一般財源、寄附金（JAグループ福島寄附金） 開始年度：R3 終了年度：R7 担当科所：品種開発科		
概要	<p>【イチゴ】 収量性、果実品質、病害抵抗性に優れた交配母本を選定し、19 組合せで交配を行った。個体選抜では、8 組合せ 341 個体を供試し、4 組合せ 7 個体を選抜した。系統選抜では 5 系統を供試し、1 系統を選抜し、「郡系 106」を付与した。「福島 ST14 号」について現地適応性試験を県内 7 か所で行った。有望との評価を得た。「福島 ST14 号」の特性検定を実施し、炭疽病抵抗性、萎黄病抵抗性について明らかにした(炭疽病は【参考成果 9】)。</p> <p>【アスパラガス】 品質及び収量性が優れる全雄系統、又は混性品種を育成するため、18 組合せの交配を行った。組合せ検定 1 年目に 16 系統を供試した。組合せ検定 2 年目では、供試 16 系統の中で収量に優れた 1 系統に「郡交 22」を付与した。「福島交 11 号」は、生産力検定試験において、標準品種と収量が同等で茎重が重い結果となった。また、現地試験において 2 年生の収量調査の結果、標準品種「ウェルカム」と比較し、南会津のほ場では多かったが、喜多方では少なかった。</p>	

試験課題名：個性豊かな県オリジナル花き品種の育成		C1-1-3
予算区分：国庫（福島県産農産物競争力強化事業(研究)）、一般財源、寄附金（JAグループ福島寄附金） 開始年度：R3 終了年度：R7 担当科所：品種開発科		
概要	<p>【リンドウ】 頂花咲き性が優れ需要期に採花できる青紫系品種、変わった花色や花序等の特長を持つ新規性の高い品種を育成するため、自殖系統 9 組合せ、組合わせ能力検定 77 組合せの交配を行った。</p> <p>組合わせ能力検定では、育種素材として 2 個体を選抜し、挿し芽増殖適性検定では、栄養系「F10192(4)」に「郡交栄 112」を付与した。培養適性検定では、栄養系「F1884(4)」を培養適性・増殖適性有と評価した。</p> <p>福島栄 24 号の地域適応性を調査するため、県内 4 か所のリンドウ産地で現地試験を実施し、会津地方や県北地方山間部での育苗養成期(定植 1 年目)の生育は、おおむね良好であった。</p> <p>【カラー】 個体選抜(育苗・養成期検定)に供試する、自殖交配 30 系統及び組み合わせ交配 123 系統の球根を養成した。また、系統選抜に供試する 2 系統及び生産力検定に供試する「郡系 5」、「郡系 6」の球根を養成した。</p>	
試験課題名：個性豊かな品種育成のための促進技術開発		C1-1-4
予算区分：国庫（福島県産農産物競争力強化事業(研究)）、一般財源 開始年度：R3 終了年度：R7 担当科所：品種開発科		
概要	<p>【イネ】 DNA マーカーを用いて福島系統 8 系統、郡系系統 34 系統の多型解析を行い、葉いもち抵抗性、穂いもち抵抗性、耐冷性、閉花受粉、及びカドミウム低吸収性遺伝子の有無を明らかにした。</p> <p>県オリジナル品種・系統及び系譜に関わる品種・系統について、ゲノム解析を行った。「福島 47 号」の高温登熟性に関与する可能性のある QTL と遺伝子 2 つに着目した。</p> <p>「里山のつづ」と「福島 47 号」の交配後代(F2)を含む 850 検体の遺伝子を抽出し、マーカー解析を行った。2 マーカーで確認した遺伝子多型が「福島 47 号」型の個体は、22 個体だった。</p> <p>【リンドウ】 2020 年度の未授精胚珠培養で得られた植物体のうち、2022 年度に着花した個体について 3 個体が稔性を有した。</p> <p>【アスパラガス】 両性花由来実生 27 個体について、DNA マーカーを用い超雄性を判別した結果、超雄性個体はなかった。また、新規超雄性個体作出のため薬培養を行った結果、11 本程度の再生シュートが形成された。</p>	
試験課題名：バイテク活用による優良原種苗の長期保存・増殖技術開発		C1-1-5
予算区分：一般財源 開始年度：R3 終了年度：R7 担当科所：品種開発科		
概要	<p>【リンドウ】 培養苗における越冬芽形成に及ぼす温度と植物調節剤の影響を検討し、有効となる温度条件や植物調節剤による抑制及び促進の効果を確認した。</p> <p>【オタネニンジン】 「かいしゅうさん」原種株の組織培養に適した滅菌処理と培地を検討したが、処理による違いは見られず、再生個体を得ることができなかった。</p>	

C 1 - 2 作物、野菜、花きの有望品種・系統の評価

試験課題名：奨励品種決定調査		C1-2-1
予算区分：一般財源 開始年度：R3 終了年度：R7 担当科所：稲作科、畑作科、会津地域研究所、浜地域研究所		
概要	<p>水稻では、予備試験で「福島 66 号」をやや有望、本調査で「福島 59 号」、「福島 63 号」を試験終了とした。</p> <p>コムギでは、本調査で「夏黄金」をやや有望、需要が拡大している「さとのそら」を次年度の調査で検討することとした。</p> <p>ダイズでは、予備試験で「東北 185 号」を試験終了、「東北 191 号」、「関東 147 号」、「北陸 6 号」を継続とした。</p>	

試験課題名：麦類育成系統の地域適応性試験	C1-2-3
予算区分：外部資金（国産麦開発支援事業） 開始年度：R3 終了年度：R7 担当科所：畑作科	
概要	育成地から配付された小麦 26、大麦 21 系統のうち、小麦の 4、大麦の 2 系統をやや有望とした。

C1-3 作物、野菜、花きの有望系統・新品種の栽培技術の確立

試験課題名：県産米の高品質化・良食味米生産のための栽培管理技術の確立	C1-3-1
予算区分：外部資金（新稲作研究会委託試験、稲民間育成品種評価委託試験） 開始年度：R3 終了年度：R5 担当科所：稲作科、会津地域研究所、浜地域研究所	
概要	「あきたこまち」に比べ、「全農 20-01」と「全農 20-02」、「ゆみあずき」は収量性が優るが、慣行苗区の玄米品質と食味官能評価が劣るため、やや有望でないと評価した。 浜地域研究所において民間育成系統を 4 系統供試し、2 系統をやや有望と評価した。 高密度播種（密苗）は、慣行苗よりも苗の老化が早く、育苗日数が長い程、苗の草丈が長くなり発根量が減少した。密苗区と慣行苗区で移植精度に差がなく、使用箱数は密苗区で 58%~72%と少なくなった。密苗栽培において側条施肥により、初期生育、穂数、収量が向上した【参考成果 1 2】。

試験課題名：県オリジナル酒造好適米の栽培方法の確立	C1-3-2
予算区分：国庫（オリジナルふくしま水田農業推進事業） 開始年度：R3 終了年度：R5 担当科所：品種開発科、会津地域研究所	
概要	酒造好適米は、高温になると消化性、千粒重、整粒歩合が低下する傾向が見られた。今年度の生産力検定予備調査では、登熟期間の気温が同等な基準品種や打ち切りとした系統に比べ、特に消化性及び千粒重が優れるか、同等以上の系統を選抜できた。 移植時期や苗の違い（中苗と稚苗）による品質への影響を評価した結果、「福乃香」は、移植時期を遅らせることで苗質や施肥法の違いによらず心白面積と心白面積割合が小さくなった。一方、心白面積発現率と玄米タンパク質含有率に差は見られなかった。

試験課題名：野菜の有望系統・新品種の栽培技術の確立	C1-3-3
予算区分：国庫（福島県産農産物競争力強化事業（研究）） 開始年度：R3 終了年度：R5 担当科所：野菜科	
概要	イチゴ「福島 ST14 号」について、電照の効果に関する試験を実施した結果、電照の有無による収量差はないが、電照により葉数の展開や第三次腋花房の生長が早まることを確認した。芽数管理について、芽数が多いほど収量は多いが、大果の収量や平均 1 果重が小さくなるため、芽数を 1 芽又は 2 芽にすることが適切と考えられた。

試験課題名：花きの有望系統・新品種の栽培技術の確立	C1-3-4
予算区分：国庫（福島県産農産物競争力強化事業（研究）） 開始年度：R3 終了年度：R5 担当科所：品種開発科、花き科、会津地域研究所、浜地域研究所	
概要	県オリジナルリンドウ品種「天の川」の挿し芽増殖について、挿し芽時期が早くなるほど越冬芽形成率は高くなった。また、「天の川」は追肥時期を早めると、切花長が長くなった。 県オリジナルカラー品種である 3 品種について、培養苗を 1 年間養成した球根を栽培した結果、定植時の球根重が 50g 以下では未開花株が発生した。また、前年度に収穫した切り下球根の小球を養成した結果、定植時期が早いほど球根増殖率は高かったが、球根の腐敗が増加した。 県オリジナルカラー 3 品種について、3 月に順化した培養苗（セル苗）から開花球を養成する方法について検討した結果、セル苗をポリポットに鉢上げして育苗した後、パイプハウスに定植する方法が球根肥大に有効であることを明らかにした【参考成果 1 0】。

C1-4 個性豊かな県オリジナル果樹品種の育成

試験課題名：個性豊かな県オリジナル果樹品種の育成		C1-4-1
予算区分：国庫（福島県産農産物競争力強化事業(研究)）、寄附金（JAグループ福島寄附金）、一般財源		
開始年度：R3 終了年度：R7		
担当科所：果樹研究所栽培科		
概要	<p>モモ、ナシ、リンゴ、ブドウのオリジナル品種育成に向けて、交雑、選抜、現地試作を実施した。「モモ福島16号」は、小果であるが甘味が多く食味良好で、果樹研究所育成品種(系統)検討会での評価が高く品種登録希望と判断された。</p> <p>新梢への菌液接種によるモモせん孔細菌病の病斑の拡大程度に基づき、「コーラル」より病斑長が小さい個体6個体を選抜した【参考成果19】。</p>	

C1-5 果樹の有望系統の評価および新品種・有望系統の栽培技術の確立

試験課題名：果樹適応性検定試験		C1-5-1
予算区分：外部資金（系統適応性・特性検定試験）、一般財源		
開始年度：R3 終了年度：R7		
担当科所：果樹研究所栽培科		
概要	<p>モモ第10回系統適応性検定試験として筑波系7系統を供試し、全系統について収穫時期や果実品質等の確認を行った。ニホンナシ第9回系統適応性検定試験として筑波系3系統を調査した。リンゴ第6回系統適応性検定試験として盛岡系3系統を供試し、各系統ともに食味は中位～良好と評価した。</p>	
試験課題名：県オリジナル果樹品種の安定生産・流通技術の確立		C1-5-2
予算区分：国庫（福島県産農産物競争力強化事業(研究)）、一般財源		
開始年度：R3 終了年度：R7		
担当科所：果樹研究所栽培科		
概要	<p>台木の違いによる「はつひめ」の樹体生育を調査した結果、「ひだ国府紅しだれ」で幹周が細く他の台木と比較し樹体生育が緩慢であり、せん定量が少なくなる傾向を確認した【参考成果20】。</p>	

C1-6 個性豊かな県優良家畜等の改良

試験課題名：牧草・飼料作物の優良草種・品種の選定		C1-6-1
予算区分：一般財源		
開始年度：R3 終了年度：R7		
担当科所：畜産研究所飼料・環境科		
概要	<p>耐暑性、越夏性が高い極長期利用型のイタリアンライグラス(イタリアンライグラス型フェストロリウム含む)品種を選定するため、4品種を播種し利用1年目の収量性等を調査した結果、「アキアオバ3」ほか全3品種が越夏可能で秋期の収量が多かった。</p>	
試験課題名：「フクシマL2」の開放型育種		C1-6-2
予算区分：一般財源		
開始年度：R3 終了年度：R7		
担当科所：畜産研究所肉畜科		
概要	<p>「フクシマL2」の開放型育種を実施した。外部より導入したランドレース精液により人工授精を要実施し、のべ14頭のうち8頭が受胎した(受胎率57.2%)。</p>	
試験課題名：県ブランド鶏の改良と開発		C1-6-3
予算区分：一般財源		
開始年度：R3 終了年度：R7		
担当科所：畜産研究所養鶏科		
概要	<p>県ブランド種鶏の改良の結果、「会津地鶏」及び「ふくしま赤しゃも(川俣シャモ)」の雌系種鶏である「ロードアイランドレッド種P13」系統、雄系種鶏である「大型会津地鶏」と「大型しゃも」及び「大型しゃも」後継系統の推定育種価は向上し、遺伝的改良は進んでいた。「会津地鶏」モモ肉の味及び機能性成分含量を数値化し、生産者へ情報提供した。</p>	

試験課題名：胚移植技術を活用した高能力肉用牛の効率的生産技術の確立		C1-6-4
予算区分：一般財源 開始年度：R3 終了年度：R7 担当科所：畜産研究所動物工学科		
概要	移植前に子宮に胚培養液を注入する SEET 法(試験区)を用いて、体内受精胚を試験区で1個移植し、対照区にて体内及び体外受精胚をそれぞれ1個ずつ移植した結果、体内受精胚を移植した試験区及び対照区でそれぞれ1頭の受胎を確認した。	
試験課題名：ゲノム情報を活用した家畜の育種改良技術の確立		C1-6-5
予算区分：一般財源、国庫(福島牛改良基盤再生事業) 開始年度：R3 終了年度：R7 担当科所：畜産研究所動物工学科		
概要	県有種雄牛12頭(枝肉重量の推定育種価正確度0.95以上)の推定育種価(2022年7月)と(独)家畜改良センターとの共同研究で得られたゲノム育種価(2022年5月)との間においては、バラの厚さ及び脂肪交雑の項目で中程度の相関が、ほか4形質で高い相関があった。 県有種雄牛12頭(枝肉重量の推定育種価正確度0.95以上)の推定育種価(2020年7月)と(国研)農研機構との共同研究で得られたゲノム育種価(2022年2月)との間において、オレイン酸及びMUFAで高い相関があった。 また、福島県独自で訓練群を整備し、枝肉6形質についてゲノム育種価推定式を作成した。これにより、本県でのゲノミック評価体制を確立した【参考成果29】。	
試験課題名：ゲノミック評価を利用した繁殖雌牛の評価		C1-6-6
予算区分：寄附金(JAグループ福島寄附金) 開始年度：R3 終了年度：R5 担当科所：畜産研究所動物工学科		
概要	市販の滅菌綿棒で採材し、採材後特別な処置を施さずに2日間冷蔵保管した鼻腔内試料を用いて、ゲノミック評価に十分な量及び品質のDNAが得られた【参考成果30】。	

C2 農産物を「ふくしま」ならではの産品にする技術の開発

C2-1 県産農産物の特性を活かした利用技術の開発

試験課題名：県産農産物の加工技術の開発		C2-1-1
予算区分：一般財源 開始年度：R3 終了年度：R7 担当科所：流通加工科		
概要	県産農産物の加工技術や品質保持技術の開発・改良を進めるとともに、加工原料としての特性を解明することによって特色ある加工素材の利用技術を開発する。 あんぽ柿の原料果の果皮色を果実カラーチャートにより判定し、あんぽ柿の品質を調査した結果、収穫時6.0以上で品質の高いあんぽ柿の生産につながることを明らかにした【R3秋冬作参考成果2】。 また、あんぽ柿の冷凍、解凍の過程における白粉発生経過を調査した。 発芽玄米麴の製麴条件を調査し、マイクロ波熱処理により蒸米の水分率が低下し、製麴歩合及び酵素活性が高まることを明らかにした。また、完成した発芽玄米麴は、白米麴に比べて中性プロテアーゼ活性やγ-アミノ酸(GABA)が高くなる傾向を確認した。 県産ナシの加工特性を調査し、CI値(Crispness Index)はナシのシャリ感を評価する目安となることを明らかにした【参考成果8】。	
試験課題名：県産農産物の品質保持技術の開発		C2-1-2
予算区分：一般財源 開始年度：R3 終了年度：R7 担当科所：流通加工科		
概要	県オリジナルイチゴ品種「福島ST14号(ゆうやけベリー)」について、輸送を想定した振動が1月から5月収穫のイチゴ果実に与える影響について明らかにした【R3秋冬作参考成果3】。	

試験課題名：本県農産物の機能性成分の評価と利用技術の開発		C2-1-3
予算区分：国庫（福島県産農産物競争力強化事業(研究)）		
開始年度：R3 終了年度：R7		
担当科所：流通加工科		
概要	<p>ブロッコリーに含まれるアミノ酸の種類を特定し、含有量と局在を可視化した。また、アスパラガスの一次加工後の機能性成分等の含有量の変化について明らかにした。ルチンについては、加熱・加工前後の含有量の変化が少なく、紫アスパラガスのアントシアニンは、加熱すると緑色に変わるものの含有量が大きく減らず、真空凍結乾燥加工で維持される傾向を明らかにした【普及成果1】。</p> <p>ブロッコリーについて、加熱処理後のビタミンC含有量の変化を明らかにした。</p>	

C2-2 県産農産物の輸出拡大に向けた生産・保鮮技術等の開発

試験課題名：モモせん孔細菌病に対する多目的防災網を活用した防除効果の検証		C2-2-1
予算区分：国庫（園芸グローバル産地育成強化事業）		
開始年度：R3 終了年度：R5		
担当科所：果樹研究所病害虫科		
概要	<p>4月から多目的防災網を設置することにより、モモせん孔細菌病の防除効果が高く、果実品質への影響は認められないことが示唆された。</p>	
試験課題名：ダリアの鮮度保持御術の開発		C2-2-2
予算区分：繰入金（園芸グローバル産地育成強化事業）		
開始年度：R3 終了年度：R4		
担当科所：花き科		
概要	<p>ダリアを蕾切りの切り前で輸出した場合、通常切りと同等の日持ち期間を確保できることが示唆された【参考成果16】。</p> <p>また、ダリアの輸出を想定した横箱輸送において、絞り込み包装により直径10cmで汚損割合が少なく、緩衝材の使用により汚損発生割合が少なかった。しかし、緩衝材を使用せずに発生した傷は小さく、商品価値に影響はないと見られるため、緩衝材は不用であると考えられた。</p>	
試験課題名：シュコンカスミソウの輸出に向けた鮮度保持技術の開発		C2-2-3
予算区分：繰入金（園芸グローバル産地育成強化事業）		
開始年度：R3 終了年度：R7		
担当科所：会津地域研究所		
概要	<p>シュコンカスミソウの乾式輸送における梱包前の処理条件について検討した結果、25℃48h処理により開花が進行する傾向が見られたが、花持ちは低下する傾向にあった。また、品質保持剤の添加により日持ちの向上が見られたが、開花の進行を抑えられるケースも見られた。</p>	
試験課題名：ナシ黒星病に対する秋期及び果実肥大後期の新防除体系の検証		C2-2-4
予算区分：国庫（園芸グローバル産地育成強化事業）		
開始年度：R3 終了年度：R5		
担当科所：果樹研究所病害虫科		
概要	<p>果樹研究所内及び現地ほ場における長果枝のりん片生組織露出芽率は、10月中旬頃から高くなり始め、11月上旬頃にピークとなった。このことから、ナシ黒星病の秋期防除は10月中旬～11月上旬頃に3回実施することで、幸水収穫後(9月中旬頃)の防除の削減が可能と考えられた【普及成果2】。</p> <p>また、果実感受性が高い時期における新規の防除体系は、慣行の防除体系と比較して防除効果が高く、気象条件によっては14日間隔の防除でも十分な効果が得られると考えられた。</p>	

C2-3 「福島牛」ブランド競争力強化技術の確立

試験課題名：「福島牛」の高付加価値生産システムの確立		C2-3-1
予算区分：国庫（福島県産農産物競争力強化事業(研究)、福島牛改良基盤再生事業、うまい！「福島県産牛」生産・販売力強化対策事業）、一般財源 開始年度：R3 終了年度：R7 担当科所：畜産研究所肉畜科		
概要	福島牛ならではの「おいしさ」に関する要因解析を行うため、95 検体の遊離アミノ酸やラクトン類を測定した。 ゲノム育種価と「おいしさ」の指標を活用した種雄牛造成に向け、「喜多三郎」、「光茂晴」の現場後代検定が終了した。 地域資源を活用した肥育牛への給与試験において、酒粕飼料の成分分析及び牛肉の味覚センサーによる分析を実施した。酒粕を給与した牛肉は、甘みの値が高かった。 福島県版和牛総合指数試験において、「おいしさ」に関連するオレイン酸や和牛香、遺伝的評価を組み合わせた、和牛総合指数評価技術を確立し、種雄牛造成に活用するために 2,017 頭(R4.2 月現在)の枝肉調査を実施した。	

C2-4 「ふくしま」ならではの地域特産物を活かした栽培・流通技術の確立

試験課題名：積雪を活かした野菜の栽培及び貯蔵技術の確立		C2-4-3
予算区分：一般財源、国庫（菜食健美ふくしま！地域特産物活用事業） 開始年度：R1 終了年度：R3 担当科所：会津地域研究所、流通加工科		
概要	キャベツの簡易雪室貯蔵を行う場合、積雪 10cm 以上で継続することにより、雪室内温度を貯蔵に適する温度に維持できた。貯蔵による裂球が一部品種で発生した。また、腐敗の発生は、年次変動があった。 機能性成分γ-アミノ酪酸(GABA)は、貯蔵後 2 週間で増加する傾向にあった【R3 秋冬作参考成果 4】。	
試験課題名：オタネニンジンの産地づくり支援に関する研究		C2-4-4
予算区分：国庫（地域特産活用産地づくり支援事業） 開始年度：R4 終了年度：R7 担当科所：会津地域研究所、品種開発科		
概要	市販の収穫コンテナを用いて、根長 15cm 以上の 1 年生苗を得るためには、底土 20cm 以上が必要であり、底土 20cm とする場合、1 コンテナ当たりの資材代は慣行(底土 25cm)より 378 円削減された。1 コンテナ当たりの播種数は 150~350 粒で、移植可能な大きさの苗生産が可能であった。また、生産者の負担となっている除草作業について、電動小型除草機を用いることにより省力化できることを明らかにした【参考成果 3 1】。 組織培養技術を用いて作出した「かいしゅうさん」培養苗をプランターに定植し、7 粒の種子を得た。	
試験課題名：エゴマ安定生産体系の確立		C2-4-5
予算区分：国庫（地域特産活用産地づくり支援事業）、一般財源 開始年度：R4 終了年度：R7 担当科所：畑作科、流通加工科、経営・農作業科		
概要	エゴマの収穫期の分散化を図るため、早生系統の生育特性を調査した。いずれも不稔が多く低収であった。また、栽植密度の違いによる生育・収量への影響を調査し、では、株間 30cm が最適であった。 エゴマ油の酸化に影響する子実保管の条件を調査し、湿度 100% 条件では子実水分率が搾油効率に支障を来す 6% を超え、酸価の上昇が見られた。 エゴマを 5ha 以上栽培する大規模経営体 3 戸に対し、経営調査を実施した。共通した課題は、除草作業の省力化であり、けん引式レーキ等の機械導入が必要であると考えられた。販売においては、種実を未加工で販売するよりもエゴマ油に加工して販売することで収益性が高まると考えられた。	

D 地球温暖化等の気候変動に対応し、環境と共生する農林水産業を進めるための技術開発等の推進

D1 気候変動に対応し農業生産の安定化に寄与する技術の開発

D1-1 気候変動に対応した生産技術の開発

試験課題名：夏季高温条件下における良質・良食味米生産技術の確立		D1-1-1
予算区分：寄附金（JA グループ福島寄附金） 開始年度：R3 終了年度：R5 担当科所：稲作科		
概要	「天のつぶ」、「福笑い」、「福島46号」、「福島47号」、「福島59号」は、「コシヒカリ」、「ひとめぼれ」と比較すると白未熟粒が少なかった。緩効性肥料の追肥で登熟後期まで肥効を維持することにより、登熟期の葉色低下を抑えられると判明した。高温登熟条件下では、飽水管理を行うことで白未熟粒の発生リスクを軽減することができると考えられた。	
試験課題名：主要野菜の安定生産技術の確立		D1-1-2
予算区分：国庫（スマート農業プロセスイノベーション推進事業）、一般財源 開始年度：R3 終了年度：R7 担当科所：野菜科		
概要	トマト栽培におけるミスト噴霧の高温抑制効果、生育及び収量への影響を調査した。ミスト噴霧により、平均気温 30℃及び 35℃以上の積算時間が短くでき、飽差も改善された。また、ミスト噴霧による収量差は判然としなかったが、空洞果の発生が抑えられた。 アスパラガス「ふくきたる」のセルトレイ苗を4月上旬に定植することで、定植年に30kg/a以上の収量が得られることを明らかにした【R3 秋冬作参考成果5】。「ふくきたる」を用い、夏期の追加立茎が翌年の収量へ与える影響を調査した。「ふくきたる」は晩秋に萌芽が停止した後でも萌芽に適した環境下であれば、5℃以下の低温に遭遇しなくても4日で萌芽の再開が見られることを確認した。	
試験課題名：温暖化傾向に対応した花きの安定生産技術の確立		D1-1-3
予算区分：一般財源 開始年度：R3 終了年度：R7 担当科所：花き科		
概要	トルコギキョウのポット栽培において、土壌水分やかん水量の違いがチップバーンの発生に及ぼす影響を調査したが、判然としなかった。また、土壌水分を乾燥状態で管理することにより、生育の停滞やロゼット化などに影響を与えることが示唆された。	
試験課題名：主要農作物生育作柄解析調査研究		D1-1-4
予算区分：一般財源 開始年度：R3 終了年度：R7 担当科所：稲作科、畑作科、会津地域研究所、浜地域研究所		
概要	水稻については、6月2、3半旬の低温により、平年に比べて幼穂形成始期が1~2日、出穂期が2~4日遅くなった。9月1~4半旬は気温が高かったため、「天のつぶ」を除いて登熟日数が平年に比べて1~4日短くなった。玄米重は、平年対比で本部が87~100(穂数の減)、会津地域研究所が90~91(穂数、1穂粒数の減)、浜地域研究所が99~108(登熟歩合、千粒重の増)であった。品質は、平年に比べて未熟粒が多く、粒厚が薄かった。 水稻品種「福笑い」について、成熟期判定の目安となる籾水分率は25%程度であり、平均的な稈の長さの穂の中間にある籾を測定することで、籾水分率の推定が可能であることを明らかにした【参考成果13】。 ダイズについては、標播では、播種後の出芽が斉一で、5葉期と開花期は平年より早かった。成熟期は、「あやこがね」と「里のほほえみ」が平年並、「タチナガハ」が平年より4日遅かった。稔実莢数と粗子実重は、平年並~優った。晩播では、播種後の降雨が少なく、出芽が遅れ初期生育は確保されず、5葉期と開花期は平年より遅かった。成熟期は、平年より3~4日遅かった。標播・晩播ともに、6月4半旬以降の高温により害虫が早期に多発し、特に吸実性カメムシ類による虫害が多く、精子実重は平年並~少なかった。べと病罹病粒は標播でわずか、晩播でやや多く認められた。 麦類については、播種後適度な降雨があり出芽期は平年並だったが、苗立本数は平年より少なかった。越冬期間が低温、寡照、少雨だったため生育量は平年より下回った。越冬後の高温、多照により生育は回復し、出穂期は平年並となったが、6月上~中旬の低温、寡照により成熟期は平年より6日遅かった。成熟期の稈長、穂長、穂数は平年並で、収量も平年並だった。品質は平年より優り、1等中となった。	

試験課題名：温暖化に対応した果樹の生育予測技術及び生育障害対策技術の確立		D1-1-5
予算区分：外部資金（戦略的スマート農業技術等の開発・改良）、一般財源		
開始年度：R3 終了年度：R7		
担当科所：果樹研究所栽培科、会津地域研究所		
概要	<p>リンゴの日焼けは、白色化織布を被覆することにより、日焼け発生果実数は約 47%減少し、サビ果は約 40%増加した。果実品質で差は見られなかった。</p> <p>リンゴのひょう傷の拡大は果実の赤道部及びこうあ部で大きく、果肉褐変は裂傷よりも打撲症状が多かった。ひょう害後の摘果では、なるべく傷が小さくて浅く、打撲症状ではない、がくあ部に近い果実を残すことにより、収穫時のひょう傷が目立ちにくくなると考えられた【参考成果 2 1】。</p> <p>モモ「あかつき」、ナシ「幸水」、リンゴ「ふじ」の DVR モデルを作成し、生育ステージ予測モデルを作成した。精度は概ね実用可能なものと判断された。</p>	

D 2 環境負荷を低減する農業生産に資する研究開発

D 2 - 1 中山間地における農地管理技術の開発

試験課題名：受益者対応型中山間地域の暗渠排水技術の確立		D2-1-1
予算区分：繰入金（中山間ふるさと水と土保全基金）		
開始年度：H28 終了年度：R4		
担当科所：経営・農作業科		
概要	33PS のセミクローラ型トラクタで暗きょ管を設置できる、小型の浅層暗きょ施工器を制作した【参考成果 2】。	
試験課題名：中山間地における農地保全管理の省力技術体系の確立		D2-1-2
予算区分：繰入金（中山間ふるさと水と土保全基金）		
開始年度：R1 終了年度：R5		
担当科所：経営・農作業科		
概要	刈払機では、法面面積が大きくなるほど心拍数が上昇するが、リモコン式草刈機では面積が大きいても心拍数の上昇を抑えられた。また、機器の操作の経験年数により、リモコン式草刈機よりも刈払機の方が、作業能率が高い場合があることを明らかにした。	
試験課題名：遊休農地再生利用のための土地利用型作物栽培体系の確立		D2-1-3
予算区分：一般財源		
開始年度：R3 終了年度：R4		
担当科所：会津地域研究所		
概要	遊休農地の拡大抑制、解消に向けた取組を行う組織等の参考となるよう、会津地域において先進的にソバの栽培で遊休農地の再生利用を行っている事例について調査し、事業内容や再生対象ほ場の特徴を明らかにした【参考成果 3 2】。	

D 2 - 2 環境と共生する病害虫防除技術の開発

試験課題名：総合的病害虫管理（IPM）による環境と共生する農業技術の確立		D2-2-1
予算区分：一般財源		
開始年度：R3 終了年度：R7		
担当科所：作物保護科		
概要	<p>斑点米カメムシ類のクモヘリカメムシについて効率的な防除体系構築のため、調査地域（南相馬市、浪江町）の発生主要種、被害状況及び防除実績の情報収集を行った。</p> <p>水稻のイネドロオイムシについて、試験地のイネドロオイムシ個体群は、チアメトキサム剤に対する感受性が低下していると考えられた。同個体群に対して、フルピリミン剤、シアントラニリプロール剤及びチアクロプリド剤の箱施用、クロチアニジン剤の散布は高い防除効果があることを明らかにした。</p> <p>水稻のいもち病について、出穂前の穂は、日平均気温 25℃で出穂 4 日前（出穂始めからの有効積算温度で -60 日℃）から穂いもちを発病する危険性があることを明らかにした。</p> <p>トマトハウスでの循環扇使用が、ほ場環境、病害発生に及ぼす影響を調査した結果、使用しない場合に比べ、ハウス内の温度及び湿度に明確な差は見られなかったが、推定葉濡れ時間が短縮された。うどんこ病の発生は、やや多くなる傾向があった。</p>	

試験課題名：果樹における生物資源等を活用した環境と共生する病害虫防除技術の開発 D2-2-2	
予算区分：一般財源、外部資金（農林水産研究推進事業）	
開始年度：R3 終了年度：R7	
担当科所：果樹研究所病害虫科	
概要	福島市のリンゴ園地から採集した土着天敵フツウカブリダニは、スピネトラム水和剤及びテブフェンピラド水和剤に対して薬剤感受性がやや高かった。

D2-3 有機農産物の低投入持続型栽培技術の確立

試験課題名：有機農産物の低投入持続型栽培技術の確立 D2-3-1	
予算区分：国庫（環境にやさしい農業推進事業）	
開始年度：R3 終了年度：R7	
担当科所：有機農業推進室、企画経営部	
概要	<p>水稲有機栽培ほ場において、副産物(稲わら等)のみを再投入して栽培を継続する「低投入持続型水稲有機栽培技術」を実証した。実証5年目であるR4年の精玄米重はR3年よりも増収し、339～346kg/10aであり、有機慣行区(505kg/10a)の67～69%であった。</p> <p>また、水稲有機栽培ほ場において畝立て耕起を行うことにより、冬期間の土壌乾燥と稲わらの分解促進効果、コナギの発生抑制効果が認められた。しかし、コナギの発生抑制効果は初期のみで、ほ場のコナギ発生数が年々増加したことから、畝立て耕起の継続だけではコナギの防除は困難であり、他の技術の併用が必要と判断された。</p> <p>野菜有機栽培ほ場において、トンネル又は不織布被覆のみの無加温ビニールハウス内で、コマツナ、ハウレンソウ、レタス、ソラマメ、シュンギク、オータムポエムを栽培した。いずれも順調に生育し、冬春期の有機野菜として有望であった。</p> <p>水稲有機栽培に取り組む一法人を調査した結果、リモコン草刈機による法面の草刈りは、刈払機より省力化、軽労化になることを確認した。また、畦畔除草作業は、数種類の機械を用いて行われており、刈払機の延べ作業時間が最も多かった。リモコン草刈機の経済性を試算した結果、損益分岐面積は66haとなった。また、作業時間記録を調査した結果、水田除草機による作業時間が1時間16分/10a、自動水管理システムによる水管理作業時間が32分/10aであった。</p>

D2-4 環境負荷の低減に向けた技術の開発

試験課題名：温室効果ガス排出軽減技術の確立 D2-4-1	
予算区分：外部資金（農地土壌炭素貯留量等基礎調査事業(農地管理技術検証)）	
開始年度：R3 終了年度：R7	
担当科所：環境・作物栄養科	
概要	水田の「秋耕」及び「中干し延長」技術の温室効果ガスの発生抑制効果を調査した結果、「中干し延長」が「秋耕」より削減効果が大きく、双方の技術を組合せたことで効果が大きくなることはなかった。また、いずれの技術も収量への影響は認められなかった【参考成果6】。
試験課題名：農地における土壌管理実態調査 D2-4-2	
予算区分：国庫（農地土壌温室効果ガス排出量算定基礎調査事業(農地管理実態調査)）	
開始年度：R3 終了年度：R7	
担当科所：環境・作物栄養科	
概要	農地土壌炭素貯留に関する土壌調査を、県内13地点で行った。深さ30cmの農地の土壌炭素量は39.8～207.7(t/ha)であった【参考成果7】。
試験課題名：果樹園における省力的環境負荷軽減のための肥培管理技術の確立 D2-4-3	
予算区分：一般財源	
開始年度：R3 終了年度：R7	
担当科所：環境・作物栄養科	
概要	<p>モモの効率的な施肥法の確立を目的に慣行より50%削減した施肥について調査した結果、慣行の施肥量と比較し、土壌の化学性、樹体生育、収穫量、果実品質、せん孔細菌病発生率に有意な差は認められなかった。</p> <p>また、リンゴにおいて、肥効調節型肥料の施肥時期(9月、10月、3月)について調査した結果、リンゴの樹体生育と果実品質、着色等で施肥時期の違いによる差は見られなかった。</p>

試験課題名：効率的肥培管理技術の確立		D2-4-5
予算区分：一般財源 開始年度：R3 終了年度：R5 担当科所：環境・作物栄養科		
概要	中山間地域におけるソバの安定生産の確立のため、会津坂下及び南会津地域のソバほ場 36 か所について、土壌の理化学性及び栽培管理に関する聞き取り調査を行った結果、仮比重が小さいほ場でソバの収量が高い傾向が認められ、収量の向上には、有機物の施用等により土壌の孔隙率を高めることが有効と示唆された。	
試験課題名：家畜排せつ物堆肥の高度利用技術の開発		D2-4-6
予算区分：繰入金（畜産環境保全対策事業(産業廃棄物税基金)） 開始年度：R4 終了年度：R8 担当科所：環境・作物栄養科、畜産研究所飼料・環境科		
概要	堆肥のペレット化に適した調製方法を明らかにするため、県内堆肥センターの生産堆肥の性状等を調査した結果、堆肥の水分を 25%程度に落とす必要があることが明らかとなった。 また、県内の公設堆肥センター6 か所の堆肥成分について調査した結果、カリウム、リン酸、カルシウム、マグネシウム含量については、ロットによる差が小さかったが、窒素については、可給態窒素含量と窒素の無機化量でロットによる差が見られた。R5 次年度は、堆肥の種類、ロットによる肥効の違いについて調査する。	

E 安全・安心な県産農林水産物の安定供給と生産者の所得向上のための試験研究の推進

E1 産地や経営体において収益性を高める技術の研究開発

E1-1 水稲、畑作物の安定生産技術の確立

試験課題名：寒冷地における雑草イネ省力防除技術の開発		E1-1-1
予算区分：外部資金（戦略的プロジェクト研究推進事業） 開始年度：R3 終了年度：R5 担当科所：稲作科		
概要	3月以降、雑草イネ種子は、休眠が明ける条件(温度、水分)が揃えば発芽した。また、雑草イネ種子の寿命は2年程度と考えられ、発生が確認された場合、翌年の防除が重要になる。なお、移植栽培において、雑草イネに対する水稲除草剤の防除効果が高まる処理時期は、「芽が動き出す前(未発芽)」の時期であり、「ハト胸状態」以降は防除効果が低下した【参考成果14】。	
試験課題名：省力的な稲作栽培に適応した雑草防除技術の確立		E1-1-2
予算区分：一般財源 開始年度：R3 終了年度：R7 担当科所：稲作科		
概要	鉄コーティング直播栽培において、トリアファモン・ピラクロニル・ベンゾビスクロン粒剤をイネ1葉期からノビエ3葉期までに散布すると薬害及び雑草の発生がなく、除草剤1回施用による除草が可能であった。	
試験課題名：畑作物の高品質・安定栽培技術の確立		E1-1-3
予算区分：外部資金（福島大学委託）、一般財源 開始年度：R3 終了年度：R7 担当科所：畑作科		
概要	伝統的発酵食品や新たな大豆加工食品の開発に適したダイズ品種を選抜するため、遺伝的多様性を持つ国内外のダイズ及び各県奨励品種等合計 336 品種・系統について栽培特性を調査し、318 品種・系統の子実を収穫した。 コムギ「夏黄金」の最適な播種時期と播種量、コムギ「さとのそら」の最適な播種時期と施肥体系について検討した。「夏黄金」は、晩播（11月上中旬播種）にすることで収量が多くなり、「さとのそら」は、10月中旬に播種し、窒素施用を後期重点的な追肥体系にすることで収量が多くなった。 ダイズの難防除雑草である帰化アサガオ類とアレチウリを対象として、トリフルラリン乳剤の播種前土壌混和処理による防除効果を調査した。帰化アサガオ類については、処理 30 日までの個体密度及び生育量を抑制したが、アレチウリは判然としなかった。	

試験課題名：マルチオミクス解析に基づく作物の安定多収に向けた栽培技術の開発		E1-1-4
予算区分：外部資金（ムーンショット型農林水産研究開発事業） 開始年度：H30 終了年度：R6 担当科所：畑作科		
概要	ダイズを対象に、共同で試験を行う関係各所から送付された 12 種類の肥料について栽培試験を行い、生育データ及び土壌試料を解析担当の研究機関に提供した。 施用資材と播種時期、栽植様式を変えてダイズを栽培し、生育・収量データを解析担当の研究機関に提供した。	
試験課題名：葉たばこ特別調査		E1-1-5
予算区分：外部資金（日本葉たばこ技術開発協会） 開始年度：R3 終了年度：R7 担当科所：畑作科		
概要	新規薬剤の葉たばこへの適性を検証するため、所定量の薬剤を適期に散布後、官能試験用の原料を生産し、日本たばこ産業株式会社に提供した。	

E1-2 野菜・花きの安定生産技術の確立

試験課題名：地域特性を活かした施設花きの安定生産技術の確立		E1-2-1
予算区分：一般財源 開始年度：R3 終了年度：R5 担当科所：花き科		
概要	鉢花カーネーションの電照栽培の光源として電球色 LED を使用することにより、赤色 LED と同等かそれ以上の開花促進効果を得られた。また、電照を行うことで 2 月まで最低温度の慣行である 12℃ から 9℃ に下げて管理しても需要期出荷が可能であり、燃料消費量を 1~2 割程度減らせる可能性が示された。ただし、電照栽培により品質低下が見られた。 トルコギキョウの作型適応苗を用いた秋出荷作型における赤色 LED 電照による品質向上効果については、品種間における効果の差が判然としなかった。また、8 月上旬定植作型で、赤色光電照による開花の抑制や切り花重が向上する傾向が見られた。 トルコギキョウの品種特性調査について、22 系統(品種)を供試し、21 系統をほ場に展開し、生育調査を実施した。	
試験課題名：ふくしまの特色ある露地花きの安定生産技術の確立		E1-2-2
予算区分：一般財源、寄附金（JA グループ福島寄附金） 開始年度：R3 終了年度：R7 担当科所：花き科		
概要	リンドウ「ふくしまさやか」「ふくしましおん」「ふくしまほのか」「天の川」を用いて、主要な生育ステージ到達日を調査した結果、いずれの品種も萌芽期は遅くなり、開花期も平年並から遅くなった。また、肥効調節型肥料を用いて、定植時に 2 年分の肥料を投入する試験を行い、定植 2 年目の生育を調査した結果、「ふくしまさやか」と「ふくしまほのか」で茎数が慣行区よりも多く、その他の生育はほぼ同等であった。 小ギク 25 品種を調査した結果、頂花雷の着色時における直径の年次間差が少なく花蕾直径の 2 回計測による開花予測が可能だと考えられる品種は、9 品種であった。 ユーカリについて、過湿条件又は過乾燥条件が続くと生育が緩慢になることが明らかになり、は種時期を早め、定植苗の生育量を確保することで、生育が良好となる傾向が見られたが、越冬率に及ぼす影響については判然としなかった。挿し木増殖については、用土に鹿沼土を用いシャワーでかん水することが適していることが示唆された。	

試験課題名：特産野菜の安定生産技術の確立		E1-2-3
予算区分：寄附金（JAグループ福島寄附金）、国庫（風評に打ち勝つ園芸産地競争力強化事業）		
開始年度：R3 終了年度：R6		
担当科所：野菜科、経営・農作業科		
概要	<p>つるありサヤインゲンについて、盛夏期にミスト噴霧を行うことでほ場の気温は低下したが、30℃以上の積算時間に大きな影響はなく、高温による減収を改善することができなかった。</p> <p>つる無しサヤインゲンのエダマメ収穫機による収穫では、損傷率を1～2割に抑え、8割以上の健全莢を収穫することができた。また、収穫の遅れによる倒伏で、損傷率の増加が見られた。</p> <p>矮性サヤインゲン栽培の年間労働時間は366時間で、全体の2/3を収穫・調製作業が占め収益は、31.4万円/10aであった。経営規模は、収穫・調製作業によって制約されることから、省力化技術の導入が必要であると考えられた。</p>	

E1-3 会津地域に適した作物、園芸品目等の生産技術の確立

試験課題名：会津地域における地場野菜等の生産技術の開発		E1-3-1
予算区分：一般財源		
開始年度：R3 終了年度：R4		
担当科所：会津地域研究所		
概要	<p>オタネニンジン栽培について、新規栽培者でも取り組みやすい新たな省力栽培技術として、シートテープ播種の可能性を検討した結果、コンテナ栽培（秋播き）でテープの種類を変えて播種した場合、生育や形状の差はなく、慣行の播種と同等であった。</p>	
試験課題名：会津地域における地場野菜オタネニンジンとしての生産技術の開発		E1-3-2
予算区分：一般財源		
開始年度：R3 終了年度：R5		
担当科所：会津地域研究所		
概要	<p>採種専用株の栽培技術確立のため、摘蕾方法や追肥の影響について試験を行った結果、追肥区は株当たり粒数が多く、100粒当たりの種子重量も重い傾向であった。</p>	

E1-4 浜通り地方に適した作物、園芸品目等の生産技術の確立

試験課題名：浜通りにおける大規模水田利用支援技術の開発		E1-4-1
予算区分：一般財源		
開始年度：R3 終了年度：R7		
担当科所：浜地域研究所		
概要	<p>ダイズの生育量確保による収量増加を目指し、早播における播種時期、播種量、開花期以降の追肥を検討した。その結果、極早播（5月上旬播）と早播（5月下旬播）では、標播（6月上旬播）と比べ生育量は優ったが、不稔と障害粒の発生が多く、収量は劣った。また、開花期以降の追肥により収量は増加した。</p> <p>浜通りにおけるダイズ「さとのそら」の最適な施肥体系の確立及び生育診断指標の作成を目指し、所内に試験ほを設置した。</p>	
試験課題名：浜通りの気候を活かした野菜・花き等の生産振興支援技術の確立		E1-4-2
予算区分：一般財源、科研費		
開始年度：R3 終了年度：R7		
担当科所：浜地域研究所		
概要	<p>カンパニュラの摘心栽培について、5本残し区が最も優れていたが、切り花長は61.7cmと短かった。また、一部に芯止まりも確認された。</p> <p>ヤママユガ絹糸腺は、幼虫を冷凍しても抽出することが可能であった。野生のヤママユガ抜け殻繭は、相馬市など5か所で確認できた。</p>	

E 1 - 5 果樹の安定生産技術の確立

試験課題名：革新的栽培技術体系による果樹の栽培管理技術の確立		E1-5-1
予算区分：寄付金（JA グループ福島寄付金）、一般財源 開始年度：R3 終了年度：R7 担当科所：果樹研究所栽培科		
概要	オウトウJV樹形における定植 7 年目の収量は約 136.2kg/10aで、慣行同樹齢と比べて、同等であったが果実品質は一果重が大きく、糖度が低い傾向が認められた。 平棚栽培のニホンナシ「幸水」ジョイント栽培と新一文字栽培は、慣行樹形に比較して植栽後早期に多収量が得られ、定植後 13 年目においても多収を維持できることが確認された。	
試験課題名：モモ「あかつき」の核障害軽減対策技術の確立		E1-5-2
予算区分：一般財源 開始年度：R3 終了年度：R7 担当科所：果樹研究所栽培科		
概要	モモ「あかつき」の早期着果管理は核障害の発生が少なかった。過去の樹齢 19 年での調査と同様の結果となった。また、果実品質にも有意な差は見られなかった。	
試験課題名：大規模経営に対応できるリンゴの省力・高品質生産技術体系の確立		E1-5-3
予算区分：一般財源 開始年度：R3 終了年度：R7 担当科所：果樹研究所栽培科		
概要	リンゴ「ふじ」において、摘花剤としてギ酸カルシウム水溶剤（商品名：エコルーキー）、摘果剤として NAC 水和剤（商品名：マイクロデナポン水和剤 85）を利用することにより、10a 当たりの予備摘果及び仕上げ摘果に要する作業時間は 30%程度削減されることを明らかにした【参考成果 2 2】。	

E 1 - 6 畜産の安定生産技術の確立

試験課題名：乳牛の安定生産技術の確立		E1-6-1
予算区分：外部資金（農林水産省：輸出促進のための新技術・新品種開発事業、科学研究費助成事業・基盤研究(C)) 開始年度：R3 終了年度：R5 担当科所：畜産研究所酪農科		
概要	黄色ブドウ球菌(SA)乳房炎ワクチンを、鼻腔内及び皮下へ投与する回数を比較した結果、鼻腔内投与の回数を 3 回から 1 回に減らしても、乳汁中 SA 特異的 IgA 抗体価の上昇は確認されたが、鼻腔内と皮下に同時投与した場合には SA 特異的 IgG 抗体価のみ上昇した。また、酪農場周辺における野生動物の出現状況を調査した結果、春と秋の出現率が高く、病原体の保有状況は、サルモネラ陽性率 2.0%、リステリア陽性率 11.6%、マダニ寄生率 46.2%であった。野生動物侵入防止対策として、侵入防止ネットが有効であった。	
試験課題名：肉用牛の安定生産技術の確立		E1-6-2
予算区分：寄附金（JA グループ福島寄附金）、一般財源 開始年度：R3 終了年度：R5 担当科所：畜産研究所沼尻分場		
概要	発酵飼料を全期間給与した試験では、発酵区の粗飼料の摂取量は 7-10 か月齢で対照区を上回り推移した。体重、体高、胸囲は両区とも黒毛和種正常発育曲線((公社)全国和牛登録協会)の発育上限付近で推移した。腹囲は 9 か月齢程度まで対照区が上回り推移したが、以降は両区とも同等に推移した。 発酵飼料の強化試験において、強化区では離乳を終えた 3 か月齢から原材料が醸造副産物、トウモロコシ等である発酵飼料の給与を開始した。対照区では R5.1 月から試験を開始した。強化区の体重、体高、胸囲は、黒毛和種正常発育曲線((公社)全国和牛登録協会)における正常発育程度での開始となった。	

試験課題名：豚の安定生産・高付加価値化技術の確立		E1-6-3
予算区分：一般財源、繰入金（産業廃棄物税基金） 開始年度：R3 終了年度：R5 担当科所：畜産研究所肉畜科		
概要	酒粕・白酒ヌカ・醤油粕を4:5:1の割合で混合・調製した酒粕ペレットを、肥育豚に配合飼料の30%を代替して給与した結果、肥育豚飼料として利用可能であり、飼料費削減及び脂肪の質に影響を与え、豚肉の官能特性に影響を及ぼすことを明らかにした。 果実残さの飼料化方法については、原料の水分含量の高さから、リキッド化が適正である可能性があった。しかし、ハンドリングの悪さ、既存施設の利用が困難などの問題があるため、固形化方法を検討する必要があった。	

E 1 - 7 新たな技術・手法等の導入効果に関する経営的評価

試験課題名：GAP を活用した経営改善効果の検証		E1-7-1
予算区分：国庫（第三者認証GAP取得等促進事業） 開始年度：R4 終了年度：R6 担当科所：経営・農作業科		
概要	GAP 認証取得により、リスクへの意識や農作業安全についての意識が向上することがわかった。また、衛生管理や農作業安全について、GAP 認証後の年数に関わらず効果が高い傾向が見られた【 参考成果3 】。一方、消費者への理解や、帳票作成の手間などの問題点が明らかとなった。	

E 2 農産物の安定供給に寄与する鳥獣被害防止・病虫害防除等に係る研究開発

E 2 - 1 野生鳥獣害対策技術の確立

試験課題名：ICT 機器等を利用した野生鳥獣被害対策技術の確立		E2-1-1
予算区分：繰入金（中山間ふるさと水と土保全基金） 開始年度：R3 終了年度：R5 担当科所：企画技術科		
概要	積雪地帯における複合柵について、支柱を補強することで最深積雪 200cm でも耐雪性が確保できることを実証した【 R3 秋冬作参考成果1 】。また、無料地図ソフトを利用して、Web 上において、鳥獣被害対策関連情報を地図上に可視化して関係者間で共有する手法を実証した【 参考成果1 】。	

E 2 - 2 農作業事故防止技術体系の確立

試験課題名：農作業事故による怪我のデータ収集とその体系化		E2-2-1
予算区分：国庫（地域農業担い手活性化支援事業） 開始年度：R3 終了年度：R7 担当科所：経営・農作業科		
概要	県内の負傷事故について、時期別、年代別、農業機械別等の発生状況を整理し、4 件の聞き取り調査において発生要因を明らかにした。	

E 2 - 3 新奇病害虫・難防除病害虫防除技術の確立

試験課題名：新奇・難防除病害虫に対する防除技術の開発		E2-3-1
予算区分：一般財源 開始年度：R3 終了年度：R7 担当科所：作物保護科		
概要	県内の令和4年度の依頼件数は67件で、前年比79.8%であった。内訳は、作物10件(14.9%)、野菜26件(38.8%)、花き及び樹木類31件(46.3%)であった。診断・同定結果は、ウイルス・ウイロイド病が8件(11.9%)、細菌病が4件(6.0%)、糸状菌病が25件(37.3%)、虫害が2件(3.0%)、生理障害・薬害が8件(10.6%)、不明・正常が20件(30.3%)であった。 クモヘリカメムシについて、県北・県中地方と阿武隈高地の水田において、発生は確認されなかった。これは、2022年2月上旬の日最高気温の平均値が低かったことが要因として推察された。 ダイズ紫斑病について、アゾキシストロピン剤に対する感受性が低下している紫斑病菌を福島県で初めて確認した。 トマトのコナジラミ類について、いわき地方のトマト栽培における発生種と、その防除効果の高い薬剤を明らかにした。 トマト萎凋病について、夏秋トマト栽培終了後の11月初めにクロルピクリン錠剤を全面処理し、翌年4月まで継続被覆した結果、十分な消毒効果を確認した【参考成果4】。 トマトかいよう病では、前作にトマトかいよう病が発生していたほ場の残さ及び資材が、越冬後次作のトマトかいよう病の伝染源となることを明らかにした【参考成果5】。 トルコギキョウ斑点病について、ユニフォーム粒剤及びオリゼメート粒剤の定植時土壌表面処理及びセルトレイ処理で本病に対する高い防除効果を確認した。	

E 2 - 4 果樹の病害虫に対する防除技術の確立

試験課題名：果樹の重要な課題である病害虫に対する防除技術の確立		E2-4-1
予算区分：一般財源 開始年度：R3 終了年度：R7 担当科所：果樹研究所病害虫科		
概要	モモせん孔細菌病の罹病落葉は、感染拡大に影響しないこと【参考成果24】、春型枝病斑からは長期間にわたって病原細菌が漏出すること【参考成果25】、スピードスプレーヤーによるせん孔細菌病防除では被害が拡大しないことを明らかにした。 フレールモアによる落葉処理で、乗用草刈機による粉碎処理と同等のナシ黒星病の防除効果が認められた。梅雨期以降の「豊水」果実の黒星病感受性は、昨年同様に低いと考えられた。	
試験課題名：果樹等の幼木期における安定生産技術の確立		E2-4-2
予算区分：外部資金（農林水産研究推進事業） 開始年度：R3 終了年度：R7 担当科所：環境・作物栄養科、果樹研究所病害虫科		
概要	野菜類軟腐病菌を主要品種の切り枝に接種したが、いずれの品種においてもモモ胴枯細菌病（モモ急性枯死症）の発病枝率は低く、品種間差は判然としなかった。	
試験課題名：果樹における農薬耐性、抵抗性を管理する技術確立		E2-4-4
予算区分：一般財源 開始年度：R3 終了年度：R7 担当科所：果樹研究所病害虫科		
概要	ナミハダニで感受性が高く安定していたのは、ミルベメクチン、BPPS、ピフェナゼート、アシノナピル、スピロメシフェンであった。カンザワハダニ及びオウトウハダニは供試した薬剤に対する感受性の低下はみられなかった。	

試験課題名：果樹病害虫の防除法改善に関する試験		E2-4-5
予算区分：一般財源 開始年度：R3 終了年度：R7 担当科所：果樹研究所病害虫科		
概要	リンゴ褐斑病の二次感染期において、テブコナゾール水和剤及びピラジフルミド水和剤は、防除効果が高いと考えられた。 会津地方のリンゴ園でのハダニ類防除において、気門封鎖剤を主体とした防除体系は、慣行防除体系と同等の効果を示すことが示唆された。 果樹カメムシ防除を目的としたシラフルオフェン水和剤の代替剤は、シベルメトリン水和剤が適していると考えられた。	
試験課題名：相次いで進入した外来カミキリムシから日本の果樹と樹木を守る総合対策手法の確立		E2-4-7
予算区分：外部資金（イノベーション創出強化研究推進事業） 開始年度：R3 終了年度：R7 担当科所：果樹研究所病害虫科		
概要	本県においてクビアカツヤカミキリの発生及び被害は認められなかった。また、ツヤハダゴマダラカミキリ成虫は、隔離された条件のリンゴにおいて後食及び産卵することが確認された。	

E 2 - 5 新農薬・新資材等の効率的利用法

試験課題名：安全で効率的な新農薬・新資材等の実用化		E2-5-1
予算区分：外部資金（新農薬等に関する試験研究事業） 開始年度：R3 終了年度：R7 担当科所：作物保護科、環境・作物栄養科、稲作科、野菜科、果樹研究所栽培科、病害虫科、会津地域研究所、浜地域研究所		
概要	新農薬の実用化試験として、水稻、野菜及び果樹の殺菌剤及び殺虫剤 96 剤、水稻、畑作物及び果樹の除草剤及び植物成長調整剤等 12 剤の実用化試験を受託した。このほか、肥料・農薬等の効率的利用法として、水稻、野菜及び果樹の 21 試験を受託した。 キュウリの隔離床養液栽培において、培地はヤシガラマットとロックウールマット、品種は「ニーナ Z」と「夏華」、仕立て方法はアーチ摘心栽培とつる下ろし栽培の組み合わせを比較した結果、アーチ摘心栽培では「ニーナ Z」、つる下ろし栽培では「夏華」を用いることでそれぞれ 17.7t 以上、19.1t 以上の可販果収量を確保できた。培地による生育、収量に大きな差はなかった。 ナシ栽培において、天敵保護防除体系を導入することで土着カブリダニ類を保護し、ハダニ類の発生を抑制することを明らかにした【普及成果 3】。 インピルフルキサム水和剤及びキノプロール水和剤は、梅雨期のナシ黒星病の果実感染を防ぐ効果が高いことを明らかにした【参考成果 2 7】。 水稻育苗ハウスの未利用期間に、簡易養液栽培システムによるパプリカ栽培を実証し、8 月上旬～11 月下旬まで収穫し、約 4t/10a の収量を得ることができた【参考成果 3 3】。	

4 試験設計・試験成績検討会の開催状況

(1) 一般課題

開催日	検討会名	会場
令和4年 6月22日	全体検討会	本部、オンライン
7月 1日	第1回生産環境・作物園芸専門別検討会	本部、オンライン
8月26日	第2回生産環境・作物園芸専門別検討会	本部、オンライン
12月14日	第3回生産環境・作物園芸専門別検討会	本部、オンライン
令和5年 1月 5日	第1回果樹専門別検討会	果樹研究所、オンライン
1月 5日 ～6日	畜産専門別検討会	ふくしま自治研修センター、 オンライン
1月12日 ～13日	第4回生産環境・作物園芸専門別検討会	本部、オンライン
2月16日	第2回果樹専門別検討会	果樹研究所、オンライン
2月22日	第5回生産環境・作物園芸専門別検討会	本部、オンライン

(2) 放射性物質対策

開催日	検討会名	会場
令和5年 1月16日	令和4年度放射性物質試験研究課題に関する検討会	本部、オンライン

5 試験研究成果の公表

(1) 試験研究成果一覧

ア 普及に移しうる成果（生産者に活用され農業振興に寄与する研究成果、研究に利用できる新たな手法等の研究成果、行政施策の推進に活用できる研究成果）

(ア) 令和3年度秋冬作

No.	成果名	担当部所
1	衛星画像を活用し水稻生産のスマート化を支援する	作物園芸部

(イ) 令和4年度

No.	成果名	担当部所
1	アスパラガスに含まれる機能性成分の加熱・一次加工後の含有量の変化	生産環境部
2	ナシ黒星病の秋期防除適期は10月上旬～11月上旬頃であり、「幸水」収穫後の防除を削減できる	果樹研究所
3	カブリダニ類に影響の小さい防除体系を導入することでハダニ類の密度を削減できる	

イ 参考となる成果(面指導者の指導上の参考として適当と思われる情報)

(ア) 令和3年度秋冬作

No.	成果名	担当部所
1	複数獣種を対象にした複合柵を支柱で補強することにより最深積雪 200 cm でも耐雪性を確保できる	企画経営部
2	果実カラーチャート判定値 6.0 以上の蜂屋柿を収穫し加工すると特秀のあんぼ柿製造につながる	生産環境部
3	イチゴ「福島 ST14 号」への輸送を想定した振動による影響	
4	キャベツは雪室貯蔵 2 週間でγ-アミノ酪酸 (GABA) が増加し、貯蔵 8 週間後まで維持される傾向がある	
5	アスパラガス「ふくきたる」を 4 月上旬に定植すると定植年に a 当たり 30 kg 以上収穫できる	作物園芸部

(イ) 令和4年度

No.	成 果 名	担当部所
1	無料地図ソフトを利用して鳥獣被害対策情報の集約・共有ができる	企画経営部
2	小型トラクタでも暗渠管理を施工できる浅層暗渠施工器	
3	GAP 認証によりリスクや農作業安全に対する意識が高まる	
4	夏秋トマト栽培終了後の低温期における土壌くん蒸剤消毒の効果	生産環境部
5	トマトかいよう病は越冬した残さや汚染資材から伝染する	
6	秋耕と中干し延長による水田からのメタンガス削減効果	
7	県内水田における土壌炭素貯留量の推移	
8	CI 値 (Crispness Index) はナシのシャリ感を評価する目安となる	作物園芸部
9	「福島 ST14 号 (ゆうやけベリー)」の炭疽病抵抗性は中～弱	
10	県オリジナルカラーの3月に順化された培養苗はポリポット鉢上げと定植の組合せにより球根肥大を促進できる	
11	水稲根出し種子による無コーティング直播栽培の適応性	
12	高密度播種苗栽培では側条施肥によって初期生育を確保できる	
13	「福笑い」における刈取適期判定のための籾水分率の推定	
14	雑草イネに対する水稲除草剤の有効な処理時期	
15	タマネギ秋まき直播栽培におけるペンディメタリン乳剤を用いた雑草防除体系	
16	蕾切りダリアは通常切りとほぼ同等の日持ちを確保できる	
17	ジョイントV字樹形によるナシ「王秋」の早期成園化	果樹研究所
18	ジョイントV字樹形によるナシ「甘太」の早期成園化	
19	モモせん孔細菌病の新梢接種試験により病斑拡大程度が小さい育種実生個体を確認した	
20	台木の違いによる県オリジナルモモ品種「はつひめ」(5年生)の生育	
21	ひょう害を受けたリンゴ果実の収穫時の傷の形状	
22	摘花・摘果剤を利用することでリンゴ「ふじ」の摘果作業を省力化できる	
23	ロックウールを芯材とすることで燃焼時間を長くすることができる	
24	モモせん孔細菌病の罹病落葉は感染拡大に影響しない	
25	モモせん孔細菌病の春型枝病斑からは長期間にわたって病原細菌が漏出する	
26	アセタミプリド水溶剤及びスピネトラム水和剤はモモハモグリガの被害抑制に有効である	
27	梅雨期にナシ黒星病の果実感染を防ぐ効果が高い薬剤	
28	マンゼブ水和剤(商品名:ペンコゼブ水和剤)はモモせん孔細菌病の防除に有効である	
29	福島県独自に肉用牛のゲノミック評価ができる	畜産研究所
30	市販の綿棒で採材した鼻腔内試料でもゲノミック評価が可能	
31	電動小型除草機によるオタネニンジン栽培での除草作業の省力化	会津地域研究所
32	会津でのソバによる遊休農地再生利用の優良事例	
33	水稲育苗ハウスの未利用期間を有効活用した簡易養液栽培システムによるパプリカ栽培	浜地域研究所

ウ 放射線関連支援技術情報（農業における放射性物質対策の推進となる情報）

No.	成 果 名	担当部所
1	稲わらを持ち出して、カリ施用をせず栽培を継続すると、玄米中放射性セシウム濃度が高まる	生産環境部
2	水田におけるカリ上乘せ施用終了後の交換性カリ含量の推移	
3	放射性セシウム吸収抑制対策のためのカリ供給資材の効果の持続性	
4	果実・葉中における放射性セシウム濃度の経年変化	果樹研究所
5	搾乳牛におけるトールフェスクとオーチャードグラスの採食性は同等である	畜産研究所
6	交換性カリ含量が低下した水田土壌における籾殻くん炭を活用した放射性セシウム吸収抑制効果	浜地域農業再生 研究センター
7	メタン発酵消化液はカリ肥料の代替効果により水稲への放射性セシウムの吸収を抑制する	
8	野菜類の放射性セシウムの吸収は交換性カリ含量を高めることで抑制できる	
9	トラクタ搭載型放射能測定ロボット（KURAMA-X）による除染後農地の放射性セシウム汚染状況の可視化	

エ 営農再開実証技術情報（避難地域等の営農再開の推進に活用できる情報）

No.	成 果 名	担当部所
1	特定復興再生拠点での飼料作物の栽培実証	畜産研究所
2	営農再開地域水田の各ほ場群の土壌養分の実態（浪江町）	浜地域農業再生 研究センター
3	除染後農地における土壌の腐植含量と可給態窒素含量の実態（双葉町）	
4	福島県浜通りにおけるヘアリーベッチ春播きのすき込み適期と炭素・窒素供給量（大熊町）	
5	効果的な雑草管理を行った後の春播き緑肥作物すき込みは安定した炭素・窒素供給量を確保できる（大熊町）	
6	難防除雑草のエゾノギンギシ、スギナ混生ほ場では除草剤体系処理で有効に防除できる（南相馬市）	
7	電気柵設置条件の調査（浪江町・富岡町・川内村・大熊町）	
8	ナタネ栽培におけるヒヨドリ及びニホンザル被害の実態調査（浪江町）	
9	除染後水田での水稲湛水直播栽培における播種同時処理を組み入れた省力的な各種除草剤体系（富岡町）	
10	除染後農地において春まきマメ科緑肥すき込みで福島県の目標収量以上のソバ収量が確保できる（川俣町）	
11	排水不良ほ場でのハーフソイラ及び溝掘り機による排水対策で排水性が改善し、ソバの収量確保ができる（川内村）	
12	水田転換畑でのカットプレーカーによる心土破碎で排水性が改善し、ソバの収量確保ができる（飯館村）	
13	ソルガム夏播きのすき込みによって、タマネギの増収が期待できる（南相馬市）	
14	ユーカリ品種「銀世界」「グニー」における病害発生の比較（榎葉町）	
15	浜通り平坦部におけるトルコギキョウ抑制栽培の土壌消毒の実証（浪江町）	
16	グリホサートカリウム塩液剤に抵抗性があるオヒシバが見つかりました（浪江町）	
17	グリホサートカリウム塩液剤で除草できないオヒシバは他の薬剤で除草可能（浪江町）	
18	阿武隈中山間地域で栽培したペレニアルライグラス「夏ごしベレ」は従来品種と同等以上の収量が期待できる（飯館村）	
19	浜通り沿岸地域におけるイタリアンライグラスとソルガムとを組み合わせた二毛作栽培体系の導入（榎葉町）	

No.	成 果 名	担当部所
20	マメ科緑肥作物のすき込みにより堆肥施用と同等の飼料用トウモロコシ収量の確保ができる（浪江町）	

(2) 東北農業研究成果情報（東北地域の試験研究機関における顕著な研究成果）

No.	成 果 名	区分	担当部所
1	果樹の防霜対策を効果的に実施するための凍霜害危険度推定シート	普及	果樹研究所

(3) 「みどりの食料システム戦略」技術カタログ掲載

No.	成 果 名	担当部所
1	果樹の防霜対策を効果的に実施するための凍霜害危険度推定シート	果樹研究所

6 品種登録・職務発明

(1) 品種登録
なし

(2) 品種登録出願
なし

(3) 特許取得
なし

(4) 特許出願
なし

(5) 勤務発明届
なし

7 技術開発に伴う表彰・学位取得

(1) 表彰

ア 全国農業関係試験研究場所長会研究功労者表彰[主催 全国農業関係試験研究場所長会]
根本文宏（農業総合センター）
「イネいもち病の発生生態と防除に関する研究」

イ 第15回北日本病害虫研究会賞研究報文部門（虫害分野）[主催 北日本病害虫研究会]
松木伸浩（会津地域研究所）、田淵研、舩谷悠祐、渡邊朋也 ※斜字体は当機関外所属
「冬期気温データを用いたクモヘリカメムシ発生地域予測手法の広域適用性の検証」
北日本病害虫研究会報、第72号(2021)

(2) 学位取得 該当なし

8 有識者懇談会の開催

技術開発、地域農業支援、先進的農業者の育成、食の安全の確保、県民との交流等その役割を果たしていく上で、これらに関する全国的な動向や、県内の農業者及び消費者のニーズを把握し、よりの確かつ効果的に業務推進を図るため、外部の有識者で構成する「福島県農業総合センター有識者懇談会」を設置し、御意見を頂く「農業総合センター有識者懇談会」を開催した。

(1) 有識者懇談会の開催

開催日	開催場所	テ ー マ
令和4年 11月30日	農業総合センター	1 農業総合センターの概要と令和3年度事業実績について 2 令和4年度の取組について 3 担い手育成の取組について 4 ふくしまならではの品種開発について

(2) 有識者委員 (敬称略)

氏名	所属・役職名等
荒井 聡	福島大学農学群食農学類 教授
浦嶋 泰文	国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構東北農業研究センター 農業放射線研究センター センター長
今泉 仁寿	福島県農業協同組合中央会 常務理事
木目澤 久實子	福島県指導農業士会 副会長
野崎 玲子	みやぎ生協コープふくしま 地域代表理事

9 技術・研究に関する職員研修

No	研修名	所属・職名	氏名	研修主催機関	研修テーマ	研修期間
1	令和4年度環境放射能分析研修	安全農業推進部 主査	佐々木恵一	公益財団法人 日本分析セン ター	ゲルマニウム半導体検 出器による測定法	5/11- 5/13
2		安全農業推進部 分析課長	二宮 朋子			12/ 7-12/ 9
3	令和4年度農林水産 関係研究リーダー 研修	会津地域研究所 所長	吉田 直史	農林水産省	研究リーダーとして必 要な知見の習得及び能 力の向上	6/23- 6/24
4	牛ゲノム選抜手法 研修会	畜産研究所 副主任研究員 研究員	小林 由紀子 篠田 肇	(公社) 畜産 技術協会	ゲノム解析、SNP情報抽 出に必要な知識・技術 の習得	7/19- 7/21
5	令和4年度中央畜 産技術研修会(養 鶏)	畜産研究所 研究員	猪腰 雄也	農林水産省	養鶏を取り巻く諸状況 の認識	8/23- 8/26
6	令和4年度農林水産 関係若手研究者研 修	生産環境部 研究員	矢吹 隆文	農林水産省	知的財産、研究開発、 研究倫理等に関する基 礎知識の習得	9/28- 9/29
7	牛ゲノム選抜手法 研修会	畜産研究所 副主任研究員 研究員	小林 由紀子 篠田 肇	(公社) 畜産 技術協会	ゲノム解析、SNP情報抽 出に必要な知識・技術 の習得	10/12-10/14
8	令和4年度食肉・ 鶏卵・乳製品の官 能評価ワークショ ップ	畜産研究所 研究員	猪腰 雄也	(国研) 農研 機構 畜産研究部門	官能評価のコントロー ル、データの解析、官 能評価の実習	10/20-10/21
9	令和4年度中央畜 産技術研修会(統 計遺伝育種学)	畜産研究所 研究員	猪腰 雄也	農林水産省	家畜育種の概論及びゲ ノム情報を利用した家 畜育種、BLUPF90を用い た演習	1/16- 1/20
10	令和4年度研究職員 派遣研修	浜地域研究所 研究員	吉川 学	(国研) 農研機 構 中日本農業 研究センター	除草剤抵抗性ノビエ簡 易検定法の開発	1/16- 2/10
11	令和4年度農林水産 関係中堅研究者研 修	果樹研究所 主任研究員 浜地域農業 再生研究セ ンター 副主任研究 員	中村 傑 吉田 雅貴	農林水産省	中堅研究者としてのキ ャリアパスとして必要 となる知見の習得	1/19- 1/20

10 試験研究推進会議の開催

「農林試験研究機関検討委員会」(いわゆる「あり方検討会」)及び「福島県農林試験研究に関する有識者懇談会」の検討結果を踏まえ、現場と密着した実用性の高い技術開発と迅速な技術移転を図る目的で、センター本部、会津地域研究所、浜地域研究所、果樹研究所及び畜産研究所ごとに農業者(指導農業士等)、団体、市町村を構成員とした「試験研究推進会議」を設置しており、下記のとおり会議を開催した。

開催日	部門・開催場所	出席者					内 容
		農業者	市町村	JA	県関係	関係機関	
令和4年 12月27日～ 令和5年 1月20日	本部（書面開催）	7	7	6	5	—	1 試験研究テーマ及び研究課題について 2 農業総合センターの取組について
令和4年 11月30日～ 12月20日	畜産（書面開催）	4	20	5	15	13	1 試験研究課題及び成果について
令和4年 12月7日～ 12月23日	会津地域 （書面開催）	1	8	2	4	0	1 試験研究の取組について 2 研究成果について 3 地域の課題と試験研究への要望について
令和5年 2月13日～ 2月28日	浜地域（書面開催）	3	11	—	—	—	1 浜地域研究所における試験研究の取組について 2 地域の現状と研究に関する意見・要望について

※ 浜地域農業再生研究センター業務連携会議 令和5年3月（書面開催）

1.1 所内ゼミ

回	開催日	場 所	内 容	講 師	出席者
1	令和4年 5月25日	多目的ホール*	殺菌剤の使い方の基礎 殺菌剤散布のタイミング 薬剤耐性菌発生リスクと殺菌剤の選択	作物保護科副主任研究員 大竹 裕規	42名
2	6月8日	多目的ホール*	ルーラル電子図書館の利用法	（一社）農山漁村文化協 会東北支部 所長 和田山安信	橋本 康範 30名
3	6月10日	1階会議室*	初任者研修	安全農業推進部副部長兼指導・有機認証課長 センター職員 鈴木 芳成	和嶋山安信 11名
4	7月6日	3階ゼミ室*	第65回東北農業試験研究発表会 予行演習	センター職員	14名
5	10月31日	多目的ホール*	土壌消毒剤の基礎	作物保護科副主任研究員 大竹 裕規	50名
6	12月6日	大会議室*	統計研修（統計解析入門、統計 解析ソフトを用いた分析手法）	畜産研究所主任研究員 矢内 伸佳	17名
7	令和5年 3月17日	大会議室*	令和4年度派遣研修報告会 東日本大震災の経験を伝える会	浜地域研究所研究員 吉川 学 副所長（業務） 根本 文宏 作物園芸部野菜科科长 大竹 祐一	20名 53名
8	3月17日	大会議室*	温暖化と水稻品種の変遷	作物園芸部品種開発科専門員 齋藤 真一	32名
9	3月28日	多目的ホール*	退職者講演 （県職員、又は研究員としての経 験から得た教訓等）	副所長 根本 文宏 安全農業推進部副部長兼指導・有機認証課長 鈴木 芳成 安全農業推進部指導・有機認証課主査 齊藤 誠一 作物園芸部主任研究員 渡部 誠司 畜産研究所長 坂本 秀樹	108名

*はオンライン同時開催

1.2 初任者研修・新規採用職員研修

回	開催日	開催場所	内 容	講 師
1	令和4年 6月10日	大会議室*	センター職員としての心構え、農産物の安全管理、試験研究 の進め方、研究活動に関する諸規程	センター職員
2	令和5年 3月17日	大会議室*	OJTの実績報告及び自己評価を題材としたプレゼンテーショ ン実践	—

*はオンライン同時開催

1.3 その他研修

回	開催日	開催場所	内 容	講 師
1	令和4年 10月20日	3階ゼミ室*	試験研究予算と外部資金の事務処理	作物園芸部畑作科 主任研究員 大寺 真史
2	10月 5日	3階ゼミ室*	農林水産試験研究に係る計画や制度 わかりやすい発表資料の作成方法他	農業振興課 主任主査 齋藤 隆
3	12月 8日	大会議室*	統計基礎研修	東北大学大学院農学研究科 特任教授 池田 郁男

*はオンライン同時開催

Ⅲ 地域農業支援

1 技術移転・技術支援

(1) 技術移転セミナー

地域農業支援のため地域ごとにセミナーを開催し、普及に移しうる成果、参考となる成果、営農再開実証技術情報等の農業総合センターの試験研究成果の現地への技術移転を図るとともに、意見交換を行った。

回	月日	場所	テーマ等	内 容 、 講 師	出席者数
1	6/21	川内村 (現地ほ場)	ソバの排水対策の 実演会	○ソバの排水対策の実証研究について 浜地域農業再生研究センター 研究員 三本菅猛 ○施工内容及び機械について スガノ農機株式会社東北支店岩手営業所 佐藤匡剛 ○施工実証	26名
2	7/12	南相馬市 (テクノアカデミー浜、 現地ほ場)	水稲乾田直播技術 向上セミナー	○乾田直播入門ープラウ耕グレンドリル乾田直播栽培についてー (国研)農業・食品産業技術総合研究機構東北農業研究センター 水田輪作研究領域 上級研究員 松波寿典 ○現地研修 株式会社タイハイファーム乾田直播栽培ほ場	33名*
3	8/ 5	郡山市 (農業総合センター)	トルコギキョウほ 場見学会	○全日本花弁品種審査会「トルコギキョウ(季咲き)」の結果について 作物園芸部花き科 研究員 熊坂京 ○ほ場見学	41名
4	9/ 2	郡山市 (農業総合センター)	雑草イネについて ～発生と防除法～	○雑草イネについて～発生と防除法～ 作物園芸部稲作科 主任研究員 笹川正樹	40名
5	9/ 6	大熊町 (現地ほ場)	農地の放射性セシ ウム実態把握技術 の開発	○KURAMA-Xによる計測実演 ○農地における放射性セシウム分布実態について 浜地域農業再生研究センター 研究員 浅枝諭史 ○トラクター搭載型計測ロボットを活用した農地 の放射性セシウム分布の測定 京都大学 助教 谷垣実 ○簡便な深度分布測定装置の開発 高知工科大学 准教授 百田佐多夫	54名
6	9/ 9	福島市 (果樹研究所)	モモ・ナシ栽培の省 力化と病害虫対策 のポイント	○モモ栽培の省力技術等について 果樹研究所栽培科 副主任研究員 高橋亮之 ○モモせん孔細菌病の防除対策について 果樹研究所病害虫科 研究員 日下部翔平 ○侵入を警戒する外来カミキリムシについて 果樹研究所病害虫科 研究員 高橋佳大 ○ナシ栽培の省力技術等について 果樹研究所栽培科 研究員 佐藤寛人 ○ナシのハダニ類の防除対策について 果樹研究所病害虫科 主任研究員 中村傑 ○モモほ場視察(低樹高栽培・ジョイントV字トレリス栽培等) ○ナシほ場視察(ジョイントV字トレリス栽培、新文字栽培等)	69名
7	10/ 7	葛尾村 (現地ほ場)	葛尾村における省 力的なピーマンかん 水技術の現地検 討会	○葛尾村における省力的なピーマンかん水技術の 実証研究について 浜地域農業再生研究センター 研究員 小椋智文 株式会社安西商会 齋藤大輔 ○ピーマンの出荷・販売実績について JA福島さくらふたば地区本部営農経済部営農課 係長 松崎利一	29名
8	10/18	磐梯町 (現地法面)	リモコン操作式高 能率法面草刈機の 現地実演会	○リモコン操作式高能率法面草刈機の紹介及び実演 株式会社IHIアグリテック関東営業所長 小林正義	35名
9	10/19	飯舘村 (現地法面)	リモコン操作式高 能率法面草刈機の 現地実演会	○リモコン操作式高能率法面草刈機の紹介及び実演 株式会社IHIアグリテック関東営業所長 小林正義	45名
10	10/28	福島市 (果樹研究所)	ナシ黒星病対策の ための落葉処理技 術	○フレールモアを併用した処理 ○落葉収集機を用いた処理 ○除草ロボットを用いた処理 果樹研究所病害虫科 主任研究員 藤田剛輝	40名

回	月日	場所	テーマ等	内 容、講 師	出席者数
11	12/15	郡山市 (センター内)	イチゴ「ゆうやけベリー」技術移転セミナー	○ゆうやけベリーの育成と品種特性について 作物園芸部品種開発科 副主任研究員 三田村春香 ○ゆうやけベリーの栽培のポイントについて 作物園芸部野菜科 研究員 柳内柚香	70名*
12	2/28	JA福島さくら ふたば統括センター	令和4年度双葉地域トルコギキョウセミナー	○トルコギキョウの土壌病害とその対策方法について 生産環境部作物保護科 専門研究員 堀越紀夫 ○クロルピクリン剤について 三井化学アグロ株式会社仙台支店 植木魁人 ○還元消毒+転炉石灰処理による抑制作型の結果について 浜地域農業再生研究センター 研究員 佐藤翔平 ○双葉地域主要作型における土壌消毒方法の提案について 相双農林事務所双葉農業普及所 技師 安田貴則	31名

注)*はオンライン参加者含む。

(2) 成果発表会

回	月日	場所	テーマ等	内 容、講 師	出席者数
1	3/ 2	郡山市 (農業総合センター)	令和4年度研究成果発表(本部)	○稲作・野菜に関する成果 ○作物共通に関する成果	107名 (31)
2	3/ 7	福島市 (JA福島ビル)	令和4年度研究成果発表(果樹)	○ニホンナシ・モモ・リンゴに関する成果 ○晩霜害対策	104名 (36)
3	3/ 8	郡山市 (農業総合センター)	令和4年度研究成果発表(畜産)	○畜産に関する成果 ○話題提供	28名 (18)
4	3/ 9	会津坂下町 (会津地域研究所)	令和4年度研究成果発表(会津)	○会津地域の稲作・野菜に関する成果 ○オタネニンジンに関する成果 ○獣害対策	49名 (24)
5	3/14	大熊町 (Linkる大熊)	令和4年度研究成果発表(浜)	○浜地域の農業、営農再開に関する成果 ○農林水産分野の先端技術展開事業の取組	61名 (28)

注)Zoomによるオンライン開催併用であり、出席者数の()はオンライン参加者数

(3) 技術支援(鳥獣害防止対策)

内 容	支 援 地 方、 実 施 月 日	担 当 者
県段階活動支援 (県段階連携活動、各種研修支援等)	県全域 11回 令和4年 4/22、6/22(オンライン)、6/23(オンライン)、7/5、 8/2、8/26、9/28、10/12、10/24、12/19 令和5年 2/1(オンライン)	
	全6回 県北 6/27 会津 10/20、3/22 南会津 2/2 モデル集落関係 1/10 書面開催 1回	企画技術科 副主任研究員 成田元樹
地方会議活動支援 (地方会議、モデル集落・ 重点支援集落活動等)		
その他	農業法人、企業、個人等 3回 試験研究機関野生鳥獣関係情報交換会 4回 鳥獣被害防止総合対策交付金第三者評価 5件	

2 指導・啓発活動

(1) 研修会 その1

No	所属	担当者	内 容	月日	主 催 者
1	安全農業推進部	齋藤克彦	農産物の安全・安心に係る指導会	12/14	JA 福島さくら
2	企画経営部 作物園芸部	成田元樹 遠藤あかり	令和4年度畑作物技術講習会	7/ 5	福島県農業共済組合
3	安全農業推進部 有機農業推進室 企画経営部 作物園芸部	鈴木芳成 岡崎徹哉 本馬昌直 五十嵐裕二 仁井智己 鈴木幸雄	JICA 研修員研修 農業総合センターの概要 福島県の稲作の概要 品種の育成、種子生産、先進技術開発 福島県の有機農業の概要 試験研究と普及現場の連携	7/13	JICA
4	企画経営部	成田元樹	令和4年度就農研修(中級)	8/26	農業短期大学校
5		池田健一	県中地方園芸振興セミナー「転換畑における排水対策-暗渠排水事例を中心に-	11/30	県中農林事務所
6		宮川貴光	令和4年度第1回東北スマート農業実証プロジェクト現地勉強会「水田作」	11/10	(国研)農研機構東北農業研究センター
7		宮川貴光	中山間地におけるスマート農業セミナー	12/ 6	農村振興課
8	生産環境部	堀越紀夫	令和4年度スマート農業社会実装推進事業キク温湯消毒処理実施見学会	5/ 2	スマート農業社会実装推進事業田村地域推進協議会
9		梶 和彦	営農指導員養成技術研修講座	7/13	JA 全農福島
10		堀越紀夫	令和4年度第3回花き技術情報会議「トルコギキョウ栽培における土壌病害対策について」	10/21	農業振興課
11		堀越紀夫	郡山地域トルコギキョウセミナー(第2回)	11/11	県中農林事務所
12		大竹裕規	令和4年度タマネギ栽培指導会(べと病対策勉強会)	1/17	JA 福島さくら
13		堀越紀夫	トマト黄化葉巻病防止対策勉強会	1/24	JA 東西しらかわトマト専門部会
14		大竹裕規	きゅうり基礎講座	1/27	県北農林事務所安達農業普及所
15		堀越紀夫	いちご栽培指導会(萎黄病対策)	1/31	JA 福島さくら夏井営農経済センター
16		大竹裕規	令和3年度方部別専門研修(中通り・野菜特産)	2/ 1	県中農林事務所
17		大竹裕規	令和4年度第3回南郷トマト講座	2/ 9	南会津農林事務所
18		堀越紀夫	令和4年度双葉地域トルコギキョウ土壌消毒セミナー	2/28	相双農林事務所双葉農業普及所
19		齋藤正明	令和4年度南会津地方新規就農者等冬期研修会 講義「土づくりと肥料」	11/28	南会津農林事務所
20		菊地幹之	福島・川俣地域新規就農者研修会(第3回)農業経営開始支援セミナーⅠ～土作り・肥料・農薬及びGAPの基礎～	12/15	県北農林事務所
21		永井華澄	令和4年度第4回新規就農者等研修会「土づくりの基礎講座」	1/25	会津農林事務所
22		梅津輝	相馬地方 花き生産者向け 土づくりセミナー「土づくりと肥培管理について」	1/31	相双農林事務所
23		横田和子 石川万里那 古川鞠子	令和4年度第2回技術で支える加工研修	3/ 6	福島県県産品加工支援センター
24	作物園芸部	鈴木幸雄	専門技術向上研修(作物)	5/20	農業振興課
25		鈴木幸雄	水稻種子場生産者研修会	6/ 7	福島県米改良協会
26		遠藤あかり	令和4年度畑作物技術講習会	7/ 5	福島県農業共済組合
27		鈴木寛人	「福、笑い」現地検討会(中通り)	7/ 7	水田畑作課
28		鈴木幸雄	専門技術向上研修(作物)	7/ 7	農業振興課
29		遠藤あかり	令和5年度以降に向けた畑作物(麦・大豆・そば)生産拡大推進会議	7/ 8	水田畑作課

(1) 研修会 その2

No	所属	担当者	内 容	月日	主 催 者	
30	作物園芸部	鈴木幸雄	水稻生育管理等指導講習会	7/11	全国肥料商連合会福島県部会	
31		大竹祐一	第2回営農指導員養成技術研修講座	7/13	JA全農福島	
32		大竹祐一	園芸施設共済損害評価技術研修会	7/20	福島県農業共済組合	
33		遠藤あかり 遠藤央士	専門技術向上研修(作物)	7/28	農業振興課	
34		鈴木幸雄	安積高校生の視察研修	8/ 2	農林企画課	
35		鈴木寛人	ふくしまフェスタ in 恵比寿ガーデンプ レイス(復興プレゼン事業)	9/ 4	企画調整課	
36		八木田靖司	県南地方直播タマネギセミナー	9/13	県南農林事務所	
37		鈴木幸雄	令和4年度福島地域酒米研究会現地検討 会 酒造好適米の栽培研修	9/13	福島地域酒米研究会	
38		鈴木幸雄	専門技術向上研修(作物)	10/ 6	農業振興課	
39		仁井智己	福島県の新品種育成の現状	10/20	郡山市あさかの学園大学	
40		鈴木寛人	ふくしまフェスティバル in 名古屋(復興 プレゼン事業)	11/23	企画調整課	
41		大竹祐一 柳内柚香	JAふくしま未来営農指導員研修	11/29	JAふくしま未来	
42		鈴木寛人	ふくしまフェスタ in ららぽーと豊洲(復興 プレゼン事業)	1/28	企画調整課	
43		石井詩歩	会津地方トマト振興セミナー	2/ 2	会津農林事務所	
44		笹川正樹	水稻採種技術研修会	2/ 7	福島県米改良協会	
45		柳内柚香	きゅうり環境制御セミナー	2/13	会津農林事務所会津坂 下農業普及所	
46		柳内柚香	須賀川・石川地域農業技術革新推進協議 会	2/14	県中農林事務所須賀川 農業普及所	
47		鈴木寛人	JA新みやぎ水稻研修会	2/16	JA新みやぎ	
48		鈴木寛人	白河市認定農業者研修会	2/17	白河市産業部農政課	
49		鈴木寛人	「福、笑い」研究会説明会	3/ 6	水田畑作課	
50		笹川正樹	雑草イネの発生と防除法に関する研修会	3/15	JA東根市青年部	
51		果樹研究所	中村 傑	営農指導員養成技術研修講座	5/18	JA全農福島
52			中村 淳 日下部翔平	モモ病害虫防除現地技術研修会	11/ 7	株式会社 SDS バイオ テック
53			中村 淳	農薬管理指導士・農薬適正使用アドバイ ザー認定及び更新研修	11/28 12/ 2	環境保全農業課
54			中村 淳	農薬講習会	12/23	福島県農薬商業組合
55			日下部翔平 中村 淳 志村浩雄 山口奈々子	経営発展研修会	1/19	果樹経営者研究会
56			額田光彦 中村 傑	福島大学農学群食農学類学生実習	6/ 2 6/ 9 6/16 6/23	福島大学農学群食農学 類
57			柳田和弘	専門技術向上研修(牧草生産管理)	5/19	農業振興課
58		畜産研究所	壁谷昌彦 松崎稔史 吉田朋恵	専門技術向上研修(酪農)	7/14	農業振興課
59	柳田和弘		草地の雑草対策について	7/14	石筵牧野利用農業協同 組合	
60	遠藤幸洋 妹尾 毅		専門技術向上研修(放牧及び草地管理)	6/30	農業振興課	
61	柳田和弘		堆肥の有効活用について	7/15	JA会津よつば	

(1) 研修会 その3

No	所属	担当者	内 容	月日	主 催 者
62	畜産研究所	柳田和弘	専門技術向上研修(トウモロコシ、飼料用米)	5/19	農業振興課
63		妹尾 毅 遠藤幸洋	専門技術向上研修(肉用牛繁殖)	9/8-9	農業振興課
64		小松一樹 松田祐輝	専門技術向上研修(肉用牛肥育)	9/16	農業振興課
65		尾形賢治 佐藤妙子	専門技術向上研修(養豚、養鶏)	10/17	農業振興課
66		遠藤幸洋	セリ前ワンポイント講座「子牛の育成管理のポイントについて」	12/6-7	JA 全農福島
67		遠藤幸洋	セリ前ワンポイント講座「繁殖管理技術について」	3/7-8	JA 全農福島
68		矢内伸佳	福島県におけるゲノミック評価の展望について	3/10	JA グループ和牛技術者連絡協議会
69		会津地域研究所	小森秀雄	令和4年度稲作情報会議(第3回) (水稲移植後の栽培管理対策の説明)	6/ 1
70	長浜友佳		第1回おたねにんじん栽培研修会	6/ 7	会津農林事務所
71	小森秀雄		土地利用型作物技術情報会議(第1回) (初冬播き直播試験に関する説明)	6/ 9	農業振興課
72	小森秀雄		水稲の生育状況と今後の肥培管理	7/ 7	全肥商連福島県部会 会津支部会
73	長浜友佳		おたねにんじん催芽処理研修会	8/16	磐梯町薬草栽培研究会
74	長浜友佳		第3回おたねにんじん栽培研修会	10/26	会津農林事務所
75	会津地域研究所	長浜友佳	おたねにんじんコンテナ育苗研修会	12/23	磐梯町薬草栽培研究会
76		長浜友佳	第4回おたねにんじん栽培研修会	3/ 6	会津農林事務所
77	浜地域農業再生 研究センター	小椋智文	川内村ピーマン栽培勉強会	11/21	川内村
78		三本菅猛	令和5年度水稲直播技術講習会	3/29	JA 福島さくらふたば 地区稲作生産部会

(2) 技術指導資料

No	所 属	掲 載 資 料 名	発 行 年 月	発 行 者
1	園芸課 作物園芸部	「ゆうやけベリー」栽培の手引き	4.9	園芸課
2	作物園芸部	水稲無コーティング種子の代かき同時浅層土 中播種栽培マニュアル(Ver.7)	5.3	(国研)農研機構東北農業研 究センター
3	園芸課 果樹研究所	モモせん孔細菌病対策マニュアル(改訂版)	5.3	園芸課

(3) 技術相談対応件数

部 所	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計	
安全農業推進部	指導・有機認証課	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	発生子察課	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	2	
	分析課	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	部合計	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	2	
有機農業推進室	1	1	1	1	1	2	1	1	1	1	1	0	12	
企画経営部	企画技術科	1	1	3	1	1	1	2	1	0	0	1	0	12
	経営・農作業科	3	4	2	2	1	3	3	4	5	3	1	2	33
	部合計	4	5	5	3	2	4	5	5	5	3	2	2	45
生産環境部	作物保護科	3	3	12	16	14	9	5	3	1	0	0	1	67
	環境・作物栄養科	2	0	0	0	0	3	3	2	1	0	0	0	11
	流通加工科	6	1	1	1	2	7	3	2	0	1	1	3	28
	部合計	11	4	13	17	16	19	11	7	2	1	1	4	106
作物園芸部	品種開発科	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	稲作科	3	5	3	4	3	3	1	1	0	0	2	1	26
	畑作科	0	1	0	0	2	3	1	0	0	1	1	0	9
	野菜科	1	0	5	0	1	0	0	2	1	0	2	1	13
	花き科	1	1	0	0	3	0	0	0	2	0	0	1	8
	部合計	5	7	8	4	9	6	2	3	3	1	5	3	56
本部合計	21	17	27	25	28	31	19	16	12	7	9	9	221	
果樹研究所	19	16	18	13	17	20	23	16	11	13	9	13	188	
畜産研究所	4	3	3	1	2	3	2	3	1	2	9	3	36	
会津地域研究所	1	3	3	2	0	0	0	2	1	0	0	0	12	
浜地域研究所	2	1	0	0	0	2	1	2	1	0	1	1	11	
浜地域農業再生研究センター	23	17	15	14	15	14	7	11	7	3	8	3	137	
農業総合センター合計	70	57	66	55	62	70	52	50	33	25	36	29	605	

3 主要農作物種子生産実績

福島県主要農作物種子生産取扱基本要綱に基づき、原原種・原種ほを設置し、優良種子を生産することにより本県主要農作物の生産性と品質向上を図った。

(1) 担当者

所 属	職	氏 名	担当作物
事務部農場管理課	主任主査(兼)課長	新妻 和敏	—
作物園芸部	部 長	五十嵐 裕二	—
稲作科	科 長	鈴木 幸雄	水稻
	主任研究員	笹川 正樹	水稻
畑作科	科 長	遠藤 あかり	小麦、大豆
	主任研究員	菅田 充	小麦、大豆
会津地域研究所	所 長	吉田 直史	—
	専門研究員	中山 秀貴	水稻、小麦
	主任研究員	濱名 健雄	水稻
	主任研究員	真部 武	小麦
浜地域研究所	専門研究員	佐藤 弘一	水稻

(2) 原原種・原種ほ設置面積

項目	水稻(a)	小麦(a)	大麦(a)	大豆(a)
原原種 直 営	7.3	0	0	12
原 種 直 営	511.5	31	0	93.5
委 託	0	0	0	0.0
合 計	518.8	31	0	105.5

(3) 生産状況

ア 水稲

区分	品 種	生 産 地	面積(a)	生産量(kg)
原原種 直営	福笑い	本 部	2	30
	福乃香	本 部	4.3	48
	あぶくまもち	本 部	1	10
	小 計		7.3	88
原 種 直営	コシヒカリ	会津地域研究所	196.2	7,485
	ひとめぼれ	会津地域研究所	84.4	3,150
	天のつぶ	会津地域研究所	141.9	6,308
	里山のつぶ	本 部	35.8	1,400
	福笑い	本 部	4.3	102
	夢の香	本 部	5	158
	こがねもち	本 部	20	608
	ふくひびき	本 部	6.7	160
	ふくひびき	浜地域研究所	14	650
	あぶくまもち	本 部	3.2	90
小 計		511.5	21,629	
合 計		518.8	21,717	

イ 小麦

区分	品 種	生 産 地	面積(a)	生産量(kg)
原 種 直営	きぬあずま	本 部	4	100
	ゆきちから	本 部	12	440
	ゆきちから	会津地域研究所	15	0
合 計			31	540

ウ 大豆

区分	品 種	生 産 地	面積(a)	生産量(kg)
原原種 直営	タチナガハ	本 部	4	20
	里のほほえみ	本 部	8	40
	小 計		12	60
原 種 直営	タチナガハ	本 部	24	40
	里のほほえみ	本 部	69.5	300
	小 計		93.5	340
合 計			105.5	400

4 オリジナル品種（園芸作物等）種苗生産実績

福島県育成品種（園芸作物等）種苗生産取扱基本要綱に基づき、普及すべき園芸作物等の優良な品種について品質の高い種苗を安定的に供給することを目的として、種苗生産及び販売を行った。

(1) 担当者

所 属	職	氏 名	担当作物
作物園芸部	部 長	五十嵐 裕二	—
作物園芸部	副部長兼品種開発科長	仁井 智己	—
野菜科	科 長	大竹 祐一	アスパラガス
花き科	科 長	福田 秀之	リンドウ
	研究員	星 太介	リンドウ

(2) 生産量及び販売量

ア アスパラガス種子

品種名	生産量(粒)	販売量(粒)	備考
ふくきたる	33,132	30,400	令和4年産種子を販売
はるむらさきエフ	2,287	7,600	平成20年産種子を販売

イ リンドウ苗（令和5年5月販売）

品種名	販売予定数(本)	備考
ふくしましおん	1,800	
ふくしまみやび	480	
令和5年2月播種		

5 オリジナル品種の親株等の供給実績

オリジナル品種について、種苗増殖するための親株等を育成し、許諾先に供給した。

作物	品種名	規格	供給数量	供給先	生産地
イチゴ	ふくはる香	原種苗	150 株	福島さくら農業協同組合	本部
	ふくあや香		15 株		
カラー	はにかみ	培養苗	100個体	株式会社ベルディ	本部
モモ	はつひめ	穂木	3 kg		
ブドウ	あづましずく	穂木	6 kg	株式会社福島天香園	
	ふくしずく	穂木	1 kg		果樹研究所
	あづましずく	穂木	4 kg	株式会社カワイぶどう園	
	あづましずく	穂木	8 kg	株式会社イシドウ	
ソバ	会津のかおり	原原種	200 kg	会津のかおり種子協議会	会津地域研究所

6 家畜管理及び生産実績

(1) 畜産研究所本所

ア 家畜繫養実績

(ア) 種雄畜

(頭)

畜種及び品種	年度初頭数	受 入		払 出		年度末頭数
		購 入	組 替	廃用	その他	
牛 黒 毛 和 種	16	-	2	1		17
豚 ランドレース種	5	-	0	1		4
デュロック種	13	-	3	2		14
大ヨークシャー種	1	-	-	-		1

(イ) 基幹種雄牛（黒毛和種）

名 号	生年月日		血 統		推定育種価(R3.8評価)		
	登録番号	産 地	父	母の父	枝肉重量 (kg)	ロース芯面積 (cm ²)	脂肪交雑 (基準値)
かつただやすふく 勝忠安福	H24. 6. 28 黒原5825	石川郡 古殿町	勝忠平	安福久	65.989	10.334	2.692
ふくひらはる 福平晴	H23. 6. 3 黒原5637	耶麻郡 猪苗代町	平茂晴	平茂勝	57.555	9.193	2.704
たくみ 多久実	H22. 10. 1 黒原5638	石川郡 玉川村	安福久	安平	15.929	17.671	2.894
かつひらやす 勝平安	H20. 12. 25 黒原5373	田村市	北平安	平茂勝	56.193	17.366	2.487
きくらさくひかり 桜 咲光	H20. 8. 7 黒原5302	耶麻郡 猪苗代町	第1勝光	福桜(宮崎)	46.745	11.189	2.018
たかゆり 高百合	H20. 8. 21 黒原5303	双葉郡 川内村	百合茂	安福栄	78.200	11.300	1.742
ふくかげさくら 福景 桜	H17. 11. 22 黒原4949	耶麻郡 猪苗代町	景 東	福桜(宮崎)	39.384	15.265	2.093
かつはやしげ 勝隼茂	H17. 10. 11 黒原4850	石川郡 石川町	平茂勝	第5隼福	70.128	8.378	2.386
きたひらしげ 喜多平茂	H16. 10. 25 黒14188	喜多方市	平茂勝	北国7の8	63.719	9.446	2.457
だい かつひかり 第1勝光	H15. 3. 27 黒原4570	本宮市	平茂勝	東平茂	93.263	17.091	2.212

注 現在、繫養していない基幹種雄牛も含む。

(ウ) 種雄豚

品 種	名 号 (登録番号)	生年月日	血 統	
			父	母
ランドレース種 (フクシマL2)	フクシマ エル フクチ 4 0071 証明番号LL07-A000075	H27. 5. 3	フクシマ フクチ 6 0197 証明番号LL07-A000035	フクシマ エル フクチ 4 0314 証明番号LL07-A000012
	フクシマ エル フクチ 1 0019 証明番号LL07-A000168	H30. 1. 13	フクシマ エル フクチ 2 0203 証明番号LL07-A000154	フクシマ エル フクチ 1 0150 証明番号LL07-A000155
	フクシマ エル フクチ 4 0061 証明番号LL07-A000182	H31. 3. 28	フクシマ エル フクチ 7 0007 証明番号LL07-A000070	フクシマ エル フクチ 4 0189 証明番号LL07-A000160
	フクシマ エル フクチ 2 0181 証明番号LL07-A000186	R1. 8. 31	フクシマ エル フクチ 8 0074 証明番号LL07-A000042	フクシマ エル フクチ 3 0163 証明番号LL07-A000162
	フクシマ エル フクチ 3 0013 証明番号LL07-A000190	R2. 3. 30	フクシマ エル フクチ 8 0167 証明番号LL07-A000063	フクシマ エル フクチ 2 0023 証明番号LL07-A000176
	フクシマ フクシマデ-モータ フクチ 2 0158 証明番号 DD07-A000088	H28. 7. 7	フクシマ デ-モータウ11 フクチ 1 0073 証明番号DD07-A000021	フクシマデ-モータ フクシマ フクチ 5 0185 証明番号DD07-A000054
フクシマ デ-モータ フクシマ フクチ 7 0297 証明番号 DD07-A000303	H28. 11. 19	フクシマ デ-モータ フクシマ フクチ 5 0088 証明番号DD07-A000043	フクシマ デ-モータウ11 フクチ 5 0090 証明番号DD07-A000007	
フクシマ フクシマデ-モータ フクチ 8 0023 証明番号DD07-A000309	H29. 2. 24	フクシマ デ-モータウ11 フクチ 1 0073 証明番号DD07-A000021	フクシマ デ-モータ 09 フクチ 5 0028 証明番号DD07-A000003	
ナガラD 1154 ナガラ フクチ 2 0048 証明番号 DD07-A000310	H29. 3. 27	ナガラD 1154 7 2601 証明番号DD21-A000188	ナガラ フクシマ フクチ 6 00109 証明番号DD07-A000071	
フクシマ ナガラ フクチ 03 0191 証明番号 DD07-A000314	H29. 8. 21	フクシマ デ-モータウ12 フクチ1 0063 証明番号DD07-A000020	ナガラ フクシマ フクチ 6 00109 証明番号DD07-A000071	
ナガラD フクシマ フクチ 2 0174 証明番号DD07-A000329	H29. 8. 21	ナガラD フクシマデ-モータ フクチ 6 0059 証明番号DD07-A000079	ナガラD フクシマ フクチ 7 0029 証明番号DD07-A000075	
ナガラD ナガラ フクチ 2 0058 証明番号DD07-A000349	H30. 1. 17	ナガラD フクシマデ-モータ フクチ 4 0058 証明番号DD07-A000063	ナガラ フクシマ フクチ 2 0110 証明番号DD07-A000081	
ナガラ ナガラD フクチ 2 0076 証明番号DD07-A000345	H30. 1. 22	ナガラ フクシマデ-モータ フクチ 1 0062 証明番号DD07-A000025	ナガラD フクシマデ-モータ 7 0191 証明番号DD07-A000092	
ナガラ ナガラD フクチ 2 0078 証明番号DD07-A000346	H30. 1. 22	ナガラD フクシマデ-モータ フクチ 1 0062 証明番号DD07-A000025	ナガラD フクシマデ-モータ フクチ 7 0191 証明番号DD07-A000092	
ナガラD フクシマ フクチ 5 0175 証明番号DD07-A000393	R2. 12. 31	ナガラD フクシマデ-モータ フクチ 8 0152 証明番号DD07-A000350	フクシマ ナガラD フクチ 1 0011 証明番号DD07-A000347	
ナガラ ナガラD フクチ 7 0094 証明番号DD07-A000397	R3. 7. 18	ナガラ ナガラD フクチ 2 0076 証明番号DD07-A000345	ナガラD フクシマデ-モータ フクチ 1 0001 証明番号DD07-A000315	
フクシマ ナガラ フクチ 1 0106 証明番号DD07-A000398	R3. 7. 22	フクシマ ナガラ フクチ 03 0191 証明番号DD07-A000314	ナガラ ナガラD フクチ 3 0090 証明番号DD07-A000373	
フクシマ ナガラ フクチ 1 0119 証明番号DD07-A000399	R3. 7. 26	フクシマ ナガラ フクチ 03 0191 証明番号DD07-A000314	ナガラ ナガラD フクチ 3 0091 証明番号DD07-A000374	
大ヨークシャー種	シントク ダブル 2018-3 1367 証明番号WW01-A001742	H30. 11. 25	シントク ダブル 2015-3 1404 証明番号WW01-A000828	シントク ダブル 2016-7 0217 証明番号WW01-A001342
	シントク ダブル 2018-3 1373 証明番号WW01-A001746	H30. 11. 26	シントク ダブル 2015-6 1254 証明番号WW01-A000808	シントク ダブル 2016-7 0244 証明番号WW01-A001349

イ 各家畜繋養状況

(ア) 乳用牛移動表

区 分	年度初 頭 数	増 加				減 少				年度末 頭 数
		生産	組替	購入	小計	出荷	組替	その他	小計	
成雌牛	33	-	12	3	15	7	-	3	10	38
育成牛	14	-	8	3	11	-	12	-	12	13
子牛	11	24	-	-	24	10	11	-	21	14
合 計	58	24	20	6	50	17	23	3	43	65

(イ) 肉用牛移動表

区 分	年度初 頭 数	受 入				払 出				年度末 頭 数
		購入	組替	その他	小計	出荷	組替	その他	小計	
基幹種雄牛	7	-	-	-	0	-	-	2	2	5
直接検定牛	3	2	-	7	9	-	-	1	1	11
待機牛	12	-	-	-	-	-	-	1	1	11
肥育試験牛	36	-	4	18	22	30	-	1	31	27
供卵牛	9	2	5	-	7	-	4	1	5	11
合 計	67	4	9	25	38	30	4	6	40	65

区分	年度初 頭数	受 入				払 出				年度末 頭数	
		生産	導入	組替	小計	出荷	組替	その他	小計		
成豚 (雄)	デュロック	13	-	-	3	3	1	-	1	2	14
	大ヨークシャー	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1
	ランドレース	5	-	-	-	-	-	-	1	1	4
成豚 (雌)	デュロック	17	-	-	1	1	1	-	2	3	15
	ランドレース	19	-	-	-	-	-	-	6	-	13
	その他	18	-	-	-	-	-	-	1	-	17
試験豚	-	-	-	16	16	16	-	-	-	16	-
調査豚	デュロック	-	-	-	10	10	10	-	-	10	-
	ランドレース	-	-	-	10	10	10	-	-	10	-
	LWD	-	-	-	10	10	10	-	-	10	-
子豚	デュロック	44	214	-	-	214	13	108	73	194	64
	ランドレース	43	216	-	-	216	12	141	37	190	69
	雑種	116	408	-	-	408	-	441	43	484	40
肥育豚	101	-	-	656	656	558	16	12	586	171	
合 計	377	838	-	706	1,544	631	706	176	1,513	408	

※ 成豚（雄）及び（雌）の出荷には払下を含む。

ウ 各種生産実績

年 度	販売量	年 月	販売量
平成25年度	194,079.0	令和4年度 4月	17,098.0
26年度	209,508.0	5月	15,825.0
27年度	212,350.0	6月	16,103.0
28年度	204,974.0	7月	14,617.0
29年度	228,930.0	8月	13,627.0
30年度	214,889.0	9月	12,626.0
31年度	211,623.0	10月	11,077.0
令和 2年度	215,047.0	11月	11,416.0
3年度	207,329.0	12月	14,079.0
4年度	178,515.0	1月	17,109.0
		2月	18,586.0
		3月	16,352.0
		合計	178,515.0

	生 産		払 出		廃 棄
	生産	その他	売払	その他	
前年度繰越	114,962	-	-	-	-
今年度					
令和4年 4月	485	-	138	1	-
5月	728	-	57	10	-
6月	1,237	-	107	-	2,328
7月	719	-	99	92	-
8月	589	-	71	-	-
9月	463	-	128	30	-
10月	569	-	79	-	-
11月	172	-	63	20	-
12月	158	-	62	30	-
令和5年 1月	186	-	43	-	-
2月	225	-	43	152	-
3月	688	-	37	-	-
次年度繰越	117,591	-	-	-	-

(ウ) 肉用牛検定実績

a 直接検定実績 (頭)	
保 留	検定中
4	0

b 現場後代検定実績 (頭)

終 了	実施中
-	2

(エ) 牛受精卵生産実績

a 牛受精卵の生産及び受精卵払い下げ (頭、個)

採卵頭数	総回収卵数	払い下げ卵数
3	8	2

b 供卵牛

名 号	個体識別番号	生年月日	父	母の父	母の母の父
さなえ3	14730 3003 7	H28. 6. 1	高百合	百合茂	平茂勝
さなえ7	13689 3012 1	H28. 8. 7	高百合	福寿幸	茂勝
さなえ11	13689 3016 9	H28. 8. 23	高百合	福栄	第5隼福
なると15	11234 4884 7	H26.11.14	高百合	茂勝	北国7の8
びいち16	15909 3118 7	H30.11. 2	多久実	平茂晴	平茂勝
やえ21	15274 4511 4	H29.11.30	福増	高百合	平茂晴

(オ) フクシマ L2 生産実績 (維持頭数及び更新、配布状況)

	実績	内訳	
		雄	雌
種雄豚数 (頭)	4	4	-
種雌豚数 (頭)	13	-	13
分娩腹数 (腹)	25	-	25
生産子豚数 (頭)	216	127	89
離乳頭数 (頭)	195	-	-
育成率 (%)	90.3	-	-
子豚登記数 (頭)	5	2	3
自場更新数 (頭)	-	-	-
配布場所数 (戸)	1	-	1
配布頭数 (頭)	3	-	3

(カ) デュロック種「フクシマD桃太郎」生産実績

a 維持頭数及び更新、配布状況

	実績	内訳	
		雄	雌
種雄豚数 (頭)	14	14	-
種雌豚数 (頭)	15	-	15
分娩腹数 (腹)	25	-	25
生産子豚数 (頭)	214	114	100
離乳頭数 (頭)	154	-	-
育成率 (%)	72.0	-	-
子豚登記数 (頭)	14	11	3
自場更新数 (頭)	5	4	1
配布場所数 (戸)	2	2	-
配布頭数 (頭)	4	4	-

b と体形質

性別 及び 頭数	生体重 と殺前 (kg)	と体重 冷 (kg)	と体長 (cm)	背腰長		と体幅 (cm)	ロース		背脂肪の厚さ		
				I (cm)	II (cm)		長さ (cm)	断面積 (cm ²)	カタ (cm)	セ (cm)	コシ (cm)
去勢 5 (標準偏差)	124.2 6.5	83.5 6.4	892.6 1.4	77.6 1.0	67.8 1.1	39.3 1.2	57.7 1.0	24.6 3.6	5.7 0.7	3.5 0.4	4.5 0.2
雌 5 (標準偏差)	124.4 5.7	82.1 3.6	94.7 0.8	79.6 1.1	69.6 1.2	38.2 1.7	58.7 1.4	30.1 4.4	4.7 0.4	3.2 0.6	4.3 0.6

(キ) 飼料作物生産実績

a 牧乾草生産量(本所)

区分	収穫期間	面積(a)	生産量(現物 kg)		乾物生産量(kg)	
			総量	10a当り	総量	10a当り
1番草	5/ 6 ~ 5/24	1,820	96,802	532	68,386	376
2番草	6/20 ~ 8/ 1	1,900	69,002	363	48,558	256
3番草	8/19 ~ 10/ 3	1,900	111,501	587	45,231	238
合計	-	-	277,305	-	162,175	-

b トウモロコシサイレーズ(本所)

ほ場No.	収穫期間	面積(a)	生産量(現物 kg)		乾物生産量(kg)	
			総量	10a当り	総量	10a当り
8	9/ 6 ~ 9/ 9	240	96,503	4,021	27,079	1,128
9	9/ 9 ~ 9/13	180	94,864	5,270	29,920	1,662
合計	-	420	191,367	4,646	56,999	1,395

注 収穫面積は、ほ場内枕地を除く実栽培面積

(ク) 鶏移動表(成鶏羽数)

区分	年度初 羽数	受 入				払 出				年度末 羽数	
		生産	導入	組替	小計	出荷	組替	その他	小計		
保存鶏	育成	-	718	-	-	718	-	581	137	718	-
	成鶏	582	-	-	581	581	-	-	604	604	559
育種鶏	育成	-	2,759	-	-	2,759	-	2,042	717	2,759	-
	成鶏	1,938	-	-	2,042	2,042	1,910	-	67	1,910	2,003
種 鶏	育成	703	1,464	-	-	1,464	1,166	-	283	1,166	718
	成鶏	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
実用鶏	育成	-	481	-	-	481	300	-	181	481	-
	成鶏	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
合計	3,223	5,422	-	2,623	8,045	3,376	2,623	1,989	7,638	3,280	

(ケ) ふ化実績

区分	入卵個数 (個)	ふ化羽数(羽)			
		育雛	出荷	その他	
保存鶏	5,110	2,264	718	-	1,546
育種鶏	8,814	5,486	2,759	-	2,727
種 鶏	11,442	8,177	1,464	1,340	5,373
実用鶏	3,148	2,477	481	292	1,704
計	28,514	18,404	5,422	1,632	11,350

(コ) 卵の生産状況

月	産卵数	(個)			
		正常卵	廃棄卵	種 卵	破損卵
4月	36,128	30,570	925	3,788	845
5月	34,030	20,899	1,095	11,005	1,031
6月	27,695	20,674	1,113	4,946	962
7月	4,320	4,320	281	0	268
8月	262	184	63	0	15
9月	9,283	7,875	982	0	426
10月	31,522	29,223	1,387	0	912
11月	38,041	32,206	884	4,173	778
12月	43,699	38,403	637	3,880	779
1月	44,263	39,122	640	3,645	856
2月	38,095	35,194	620	1,458	823
3月	40,292	33,767	785	4,746	994
合計	348,179	292,437	9,412	37,641	8,689

(2) 沼尻分場

ア 肉用牛移動表

品種	区分	年度初 頭数	受 入				払 出				年度末 頭数	
			生産	組替	その他	小計	出荷	組換	その他	死亡		小計
黒毛和種	成牛(雌)	75	—	10	—	10	—	—	12	2	14	71
	子牛	37	42	—	—	42	13	20	10	2	45	34
	肥育試験牛	23	—	10	—	10	21	—	—	—	21	12
合 計		135	42	20	—	62	34	20	22	4	80	117

※その他は所内移動

イ 産子成績

(頭)

品種	分娩頭数	(死産)	(流産)	生産頭数	ハイ死
黒毛和種	45	(3)	(0)	42	2

注 死産及び流産は分娩頭数の内数

ウ 繁殖成績

人工授精 (受胎頭数/受胎牛授精回数)	受精卵移植 (受胎頭数/全移植回数)
63.8% (60頭/94回)	- % (0頭/0回)

エ 牧草生産量(沼尻分場)

区分	収穫期間	面積 (a)	生産量(現物 kg)		乾物生産量(kg)	
			総量	10a当り	総量	10a当り
1番草	6/13 ~ 6/30	1,660	148,520	895	92,579	558
2番草	8/29 ~ 9/12	1,660	137,978	831	67,932	409
3番草	—	—	—	—	—	—
合計	—	—	286,498	—	160,511	—

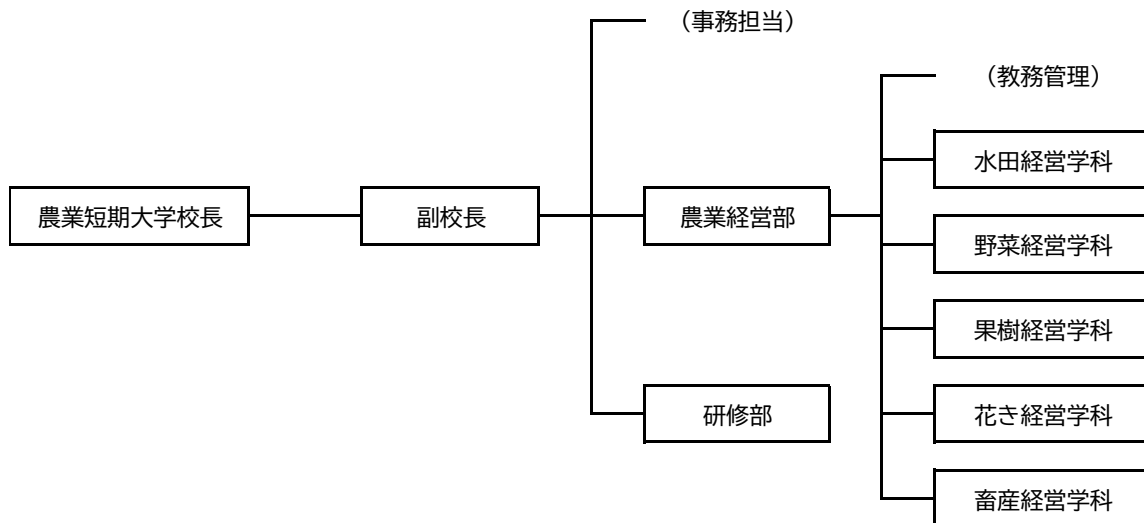
注 沼尻分場のある猪苗代町は、国の通知に基づく永年生牧草の流通・利用自粛地域であるため、除染を実施し、モニタリング検査で利用可能となった草地においてのみ収穫した。
なお、利用ができない草地については維持管理のみを実施した。

IV 先進的農業者育成・支援

1 農業短期大学の業務実績

(1) 概要

ア 組織



イ 施設

区分	主な施設内容
教育施設	本館(教室、教養ホール、視聴覚教室、職員室、事務室、会議室、講師控室) 研究実験棟(各学科、学科教室(ゼミ室)、実験演習室、研究室、無菌室、培養室) 多目的学習棟(図書室、情報処理演習室、学生ホール) 男子寮(けやき寮)、女子寮(せんだん寮)、食堂、体育館、運動場、テニスコート
実習教育施設	実習教育棟、作業棟(園芸、農産)、機械格納庫、果実選果場、鉄骨ハウス等栽培施設、 乳牛舎、肉牛舎、肥育牛舎、畜産加工演習棟、堆肥舎、パドック、農産物直売所(アグリハウス万菜)
研修施設	研修棟、屋外トイレ 農業機械実習棟(整備実習室)、トラクタ運転練習コース 農産加工技術センター(開発室、発酵加工室、高温加工室、粉体加工室)

(2) 農業経営部の取組

実践的な農業の技術力と優れた経営力を備えた地域のリーダーとなる農業者を育成するため、農業に関する講義や実験・演習、実習、研修などの教育を行った。

ア 学生の状況(学年毎の定員、農業経営部 60名)

(ア) 学生数は、1学年 45名、2学年 48名、合計 93名(前年度 111名)であり、定員を 27名下回った。学生数は、震災後減少しその後は回復傾向にあるが、今後、人口減少による高校改革、少子高齢化などにより定員確保は大きな課題である。

学科別では、水田経営学科 28名、野菜経営学科 25名、果樹経営学科 12名、花き経営学科 8名、畜産経営学科 20名の在籍数となっている。

出身高校別では、農業課程が 62名、普通課程 19名、その他が 12名であり、農業高校出身の学生が 67%となっている。

農家・非農家別では、専業農家 19名、兼業農家 26名、非農家 48名であり、非農家出身の学生は近年 5割程度を占めている。

出身地域別では、県北が 22名、県中が 18名、県南 20名、会津 15名、南会津 2名、相双 7名、いわき 8名、県外 1名であり、各地域からの応募がある。

(イ) 令和 4年度の専門士(農業専門課程)の称号が付与される者(卒業生)は、48名であった。

(ウ) 独立行政法人日本学生支援機構の奨学金貸与者は、1学年 5名、2学年 5名であった。

(エ) 学生寮の令和 4年度の入寮は、2学年は男子 25名、女子 11名、1学年は男子 19名、女子 6名であった。

イ 専修教育の状況

(ア) 水田経営学科

JGAPでは、「米(玄米)」、「そば」に加えて、新たに「小麦」で認証を取得した。更新審査に当たっては、講義や実習の中で新たなリスクを評価するとともに、施設及び帳簿の点検作業を行い、学生が主体となって受審した。また、学生 8名が JGAP 指導員資格を取得した。

スマート農業については、福島大学食農学類の准教授 2名による講義を受講し、最新のスマート農業の動向について知識を深めた。また、スマート農業機械(5機種)を操作演習する実践的な研修を受講した。

近年の米価下落に鑑み、従来の一袋 30kgでの玄米販売に加え、消費者ニーズを考慮した

一袋3 kg及び10 kgの精米販売を実施した。また、本県のオリジナル水稲品種「福、笑い」の栽培や、米穀業者と連携した大阪の米穀店で本校産米の実演販売にも取り組んだ。

直売実習等で販売している、本校産小麦を使用した乾麺「アグリカレッジ福島うどんだばい」については、消費者の意見を反映させた少量販売に取り組んだ。

1学年では、実習における多くの食用作物の栽培や加工を通して、基礎的な技術、観察力などを身に付けた。また、県内・県外研修や先進農家等留学研修により、実践的な経営感覚を養った。

卒業論文については、稲作、畑作の選択制とし、研究で得られた成果を就農後に活用できる課題に取り組むとともに、作物の栽培や調査研究を通して、高度な技術と経営感覚を醸成した。

学生の進路については、2年生15名のうち8名が卒業後に就農した(親元就農6名、法人就農2名)。

(イ) 野菜経営学科

1学年は、県内での栽培が盛んなキュウリやトマト、アスパラガス等の栽培の基礎を学ぶとともに、スマート農業、環境制御技術等の最新の農業技術などについても学習し、知識技術を高めた。また、県内先進農家において長期研修を行い、優れた技術や経営について学んだ。

2学年は、産地の課題解決や高収益生産などの卒業論文調査研究に取り組むとともに、6回開催した直売実習や、JR日暮里駅、福島空港において学生が生産物を消費者に直接販売するなど、高度な栽培技術の習得や経営実践力を養った。また、農業に係る優良事例について自ら企画して現地で視察・調査を行い、知識や技術を高めた。

JGAP及びFGAPの認証を取得しているトマト、キュウリにおいて、リスク評価や管理作業及び収穫の記録作成等の実践が学生に定着するとともに、更新審査の準備、事前の模擬審査については学生とともに受験した。

(ウ) 果樹経営学科

既にJGAP、FGAPの認証品目である「ぶどう」「かき」部門において、学生主体の実践活動が定着した。特に、経験の浅い1年生に対し、2年生が分かりやすく指導、助言するなど、学生間での技術の伝承が進み、GAPに対する意識は大きく向上した。

果樹の生育状況は、春先の好天により、開花時期が平年より5~7日程度早まったが、以後の適期管理により、高品質果実の生産が実現できたとともに、卒業論文調査研究も内容の濃い取りまとめができた。

さらに、生産物すべての販売を学生が主体となって担うことにより、全量販売した後の充実感を味わうことができたほか、新たな顧客の獲得により、従前と比較し、安定的な販売活動を行えることも実感し、農業経営における顧客管理の重要性も体感することができた。

学生の進路については、2年生6名のうち1名が自家就農した。

(エ) 花き経営学科

花き経営の基礎である栽培管理については、各栽培品目共に順調に生育し、計画どおりの生産・販売を行うことができた。特に夏秋ギクでは、早朝からの収穫実習、シクラメンでは校外の事業所等への直接販売の実習など、学生自ら生産から販売までより実践的な学習を行うことにより技術力や販売力の強化につなげた。

また、県内の先進農家や市場、県外の農業関係展示会への視察研修を行うなど、高度な栽培技術や先進的な経営感覚を実際に体験し、花き経営への理解を深めることができた。

GAP取組の一環としては、令和3年度に取得した「花き日持ち品質管理認証」について継続認定を受けるとともに、認証シールを作成し、シュッコンカスミソウの販売時に添付するなど、学生は花きの日持ち性向上の意義を認識し、実習に取り組んだ。

学生の進路については、2年生6名のうち1名が法人就農した。

(オ) 畜産経営学科

授業や実習を通して、乳用牛や肉用牛に関する知識や飼養管理技術の習得に努めた。特に昨年度作成した飼養衛生管理マニュアルに基づき、学生自らが衛生管理対策を実施し記録できる体制を整え、衛生管理に対する意識付けと理解を深めることができた。また、責任分担制の下、学生当番による分娩予定牛の観察や休日の飼養管理を実施させることにより責任を持って管理するという意識醸成を図った。

校外活動では、子牛セリ市場への参加や全国和牛共進会のオンライン視聴等を研修として実施した。

学生の進路については、2年生11名のうち7名が法人等へ就農した。

- (カ) その他特徴的な取組
- a 福島大学食農学類との連携の具現化（本校教育への支援、福大生実習受け入れ、学生の交流活動、他）
- 深山陽子 准教授 校内プロジェクト発表会指導・講評 1、2年
 スマート農業(窪田陽介准教授「スマート農業の概論」)
 (渡邊芳倫准教授「スマート農業と環境保全型農業の取組」)
- 本校職員、福島大学食農学類准教授2名によるスマート農業に関する講義と、農業機械メーカー(ヤンマーアグリジャパン(株))と連携し、スマート農業機械(5機種)を操作演習する研修を実施した。
- b GAPの取組
- (a) GAP概論の開講
 本校職員、環境保全農業課職員、GAP・ITサポート合同会社佐久間氏を講師として、GAP概論を実施した。講座では、GAPの基本理念や本県での取組状況の説明、グループ作業、本校農場における取組状況の見学等を行い、GAPに関する理解を深めた。
- (b) GAPに関しての本校の方針
 福島県GAP推進基本方針の改定に合わせて、農業短期大学校GAP推進方針を改定した(令和5年2月6日)。
- (c) GAP更新審査に向けた学生指導の強化及びマニュアルの作成
 更新審査に向けて模擬審査を実施し、学生に審査の流れや書類の内容を把握させるとともに、農場審査に対する準備を実施させた。学生は、更新審査にも立ち会い審査作業の補助等を行うことで、審査への理解を深めた。
- JGAP認証品目 水田経営学科 米(玄米)、そば、小麦
 野菜経営学科 トマト、きゅうり
 果樹経営学科 ぶどう、かき
- *認証品目追加：令和4年8月25日「小麦」
- (d) FGAP追加認証の維持
 令和2年度末に認証を取得したふくしま県GAP(FGAP)の更新認証を受けた(令和4年4月14日)。
- (e) JGAP指導員資格取得 2年生7名、1年生3名
- (f) 三重県農業大学校とのGAP交流
 コロナ禍でオンライン交流となっていた交流会については、三重県農業大学校が本校に来校し、3年振りに直接交流の形で実施した。交流会では、GAPの取組や学生自治会活動に関する情報、意見交換と、両校の農産物を直売実習で販売する直売交流を行った。
- (g) 花き日持ち品質管理認証(令和3年12月1日取得)
 認証シールを作成し、認証取得品目である宿根カスミソウの販売時に添付し、日持ち認証に対する意識の向上及びPRを図った。
- c スマート農業に係る人材育成(教職員の技術習得、研修講座開設)
- (a) スマート農業実践の開講
 本校職員、福島大学食農学類准教授2名によるスマート農業に関する講義と、農業機械メーカー(ヤンマーアグリジャパン(株))と連携し、スマート農業機械(5機種)を操作演習する研修を実施した。
- d 地域との連携
- (a) 農業体験の受入(認定こども園ポプラの木、中島幼稚園)
- (b) 矢吹町と本校との連携協定による取組(矢吹中学校職場体験の受入)
- (c) インターンシップの受入(安積高校探求活動、白河実業高校施設見学)
- (d) ドローン安全講習会
- (e) 物産販売施設の経営強化研修会
- (f) JA東西しらかわとの連携協定
 地域農業の発展と就農する担い手の確保(米の提供について)
- (g) 矢吹町広報誌に毎月本校学生の紹介が掲載
- e 販売活動
- (a) 三重農大との交流
 GAP取組を通じて交流を実施している三重農大産の煎茶等を、本校直売実習で本校学生が販売(令和4年7月22日)、三重農大学生が来校し本校直売実習で三重農大産煎茶、トマトジュース、温州みかん等を販売(令和4年11月2日)。
- (b) 大阪の米穀店において本校産米の店舗実演販売
 米穀業者と連携し、大阪の米穀店において本校産米の店舗実演販売を実施した(令和5年1月12日、セブンパーク天美内つながるおこめ)。
- (c) 福島空港
 「2022 福島空港空の日フェスティバル」に初出展し、本校産農産物等を本校学生が販売(令和4年9月17日、福島空港ターミナルビル)。
- (d) JR日暮里駅
 日暮里エキキュートにおいて開催された福島県物産展において、本校産きゅうり、ト

- マトを本校学生が販売(令和4年6月24日)。
- (e) 福、笑いの販売
本県のオリジナル水稲品種「福、笑い」の栽培研究会『あだたらの里「福、笑い」栽培研究会』の一員として、「福、笑い」の栽培に取り組んだ。本校産「福、笑い」は、あだたらの里直売所等で販売された。
- f 情報発信
- (a) テレビ・ラジオによる学生募集案内
(b) 県の公式 Twitter への学生募集掲載
(c) 学校紹介動画の作成
(d) F T V テレレポートプラスに出演
斎藤恭紀気象予報士のコーナーに2学年4名が出演し、本校概要や野菜、果物、切り花のPRを行った(7月29日)。
- (e) ラジオ取材でタレントの「なすび」さん来校
ラジオ福島「帰ってきた！進め！GAP探検隊」の取材で、タレントの「なすび」さんが来校した。学生は、GAPの取組状況や卒業後の進路について取材を受けた。
- (f) 「ふくしま花フェスプロジェクト2022」(地域経済産業活性化対策)の取組に参加し
花き生産者のほ場で学生が収穫体験等を行う様子がYouTubeで配信された。
- g 学生募集(新たな取組)
- (a) 県外(東京、千葉、埼玉、栃木、茨城)への学校要覧の送付
近隣県より学生募集があるため、情報提供を実施した。
(b) 通信制、定時制への学校訪問
近年、通信制、定時制からの学生応募が増加しているため実施した。
(c) 県外高校への訪問
東京都の農業高校への訪問を実施(毎年農業を志し、県外に出る生徒がいる)。
(d) 日本語学校への訪問
留学生の受入を検討中。ベトナムなど農業国であるため需要が多い。
(e) オープンキャンパスの時間短縮
県外からの参加者、天候などを考え内容を詰めて午前中開催とした。
- h 統合事業関係
「令和4年度福島県特定原子力施設交付金事業」を活用して新たなパイプハウスを3棟新設し、長期就農研修生受け入れ強化を図った。
- i その他
- (a) 料理研究家「栗原はるみ」さん来校
栗原氏が出演したNHK「みんなのきょうの料理」インスタライブ(3/11、日本橋ふくしま館)に食材を提供した本校への御礼と、視察のため来校。本校概要説明後、学生案内で野菜ほ場等を見学した(4/23)。
(b) 「夢っぺ行ってこっせ・牛編①」への出演
本県出身の箭内夢菜さんが、県産の農畜水産物の魅力を伝えるYouTube番組に、学生と職員が出演した。今回は、「福島牛」の魅力を生産者の視点で紹介する内容で、箭内夢菜さんと引地洋輔さん(本県出身)が、就農予定の学生2名とともに、肉用牛の飼養管理を体験した。当番組は東京電力ホールディングスが復興支援活動の一環として配信された。
- ウ 進路指導の取組
- (ア) 就農への誘導
進路状況47名(98%)が決定し、1名(2%)が未定であった。内訳は就農20名(42%)、農協7名(15%)、農業関連産業15名(31%)、他産業3名(6%)、公務員2名(4%)であり、就農率は過去最高であった前年度とほぼ同じとなった。
- a 令和3年度から就農支援サポート支援員(1名)を配置し、新規就農にかかる支援体制の充実、強化を図っている。県内の農業法人や各市町村、各農林事務所との連携を図り、親元就農に向けた準備支援や、雇用就農者を増やすため、農業法人の求人に関する意識調査、農業法人と学生とのマッチング、学生との個別相談、就農相談会開催の取組を行った。
- b 2学年を対象に、農業法人等についての理解を深め、将来の就農先としての位置づけを図るため、県内の法人等に関する説明会及び講座を3回開催した。
- c 県内研修を活用し、現地において農業の復興に取り組む農業法人や技術革新に取り組む意欲的な法人において研修を実施した。
- d 農林事務所との連携を強化し、相双農林事務所の本校1学年を対象とする就農相談会に参加した。
- e 1学年を対象に南相馬市による農業及び農業法人の説明会を実施した。また、市担当者との個別就農相談も実施し、3名が参加した。
- (イ) 進路に対する意識付けと支援
- a 1学年の5月と1月に、進路希望調査を実施した。
b 学生に進路に対する目的意識を強く持たせるとともに、就職を希望する学生に対しては就職活動における心構えを、また、自家就農を希望する学生には雇用する立場となる経営者としての資質向上が図られるよう、定期的に進路指導会を開催した。

c ハローワーク白河の学卒ジョブサポーターとの連携の下、1学年への就職相談会を1回開催し、10名の学生が就職に関する面談を行った。

(ウ) 資格取得支援

- a 大型特殊免許（農耕車に限る）
2年生 34名が免許を取得した。
- b けん引運転免許（農耕車に限る）
2年生 32人が免許を取得した。
- c 毒物劇物取扱者
1年生 1名が資格を取得した。
- d 刈払機取扱作業安全衛生教育 1年生 39名受講
- e アーク溶接業務特別教育 1年生 24名受講
- f 家畜人工授精師
畜産経営学科 2年生 10名が資格を取得した。
- g 土壌医検定
3級を1年生 3名が受験し、うち2名が合格した。
- h 日本農業技術検定試験
1級を1年生 1名が受験し合格した。

(エ) 令和4年度卒業者の主な進路

卒業生の進路は、親元就農9名（経営分野は水稲6名、野菜2名、果樹1名）、雇用就農11名、農業協同組合7名、農業関連産業（農畜産物流通業等）15名、公務員2名であった。

(オ) 農業次世代人材投資資金の活用

- a 農業次世代人材投資資金（準備型）は、就農を希望する青年が農業技術及び経営ノウハウの習得のための長期の研修実施を支援する制度で、交付金が年額150万円で最長2年間交付される。本校農業経営部の学生と研修部長期研修の研修生が交付要件を満たす研修として位置づけられている。2学年3名、1学年6名、長期就農研修生3名が受給した。
- b 本制度を活用した2学年の就農分野は、親元就農1名、雇用就農2名であった。

エ 学生募集の取組

(ア) 募集要項等の送付

募集要項等を高等学校153校、県の43機関、59市町村、19団体に送付し、募集への協力を依頼した。

(イ) 高校訪問他

県内の高校101校を訪問し、進路担当教員に対して、本校の概要及び募集について説明するとともに生徒の進路希望状況について調査した。加えて県外高校5校に訪問した。また、新たな取組として日本語学校、留学生を取り入れている専門学校への訪問を実施した。

(ウ) 進路説明会への参加

高等学校主催の説明会26校延べ34校に参加し、本校の概要等について説明した。今年度から郡山、会津、白河会場での進学相談会に参加した。

(エ) オープンキャンパスの開催

7月24日（日）、7月30日（土）、8月3日（水）にオープンキャンパスを開催し、本校の施設及び講義内容等について説明した。41校74名の高校生等及び74名の保護者が参加した。案内は高等学校116校、59市町村、農林水産部の16機関、2団体に送付し、協力を依頼した。

(オ) 県広報の活用

広報課30秒スポット放送9回、キビタンスマイル（ふくしまFM）3回、農家の皆さんへ（ラジオ福島）1回、農業総合センターだよりに学生募集の案内を掲載した。

(カ) 学校見学の受け入れ

県立高校2校の生徒52名、教員4名が来校し、農業の現状に関する施設・設備の見学及び教育内容の説明を行った。

(キ) 募集結果は、推薦入校試験受験者44名、一般入校試験（前期）受験者12名、一般入校試験（後期）受験者6名の計62名が受験をし、62名が合格となった。

才 学生数

(ア) 学科別

※入校時

学 科	1年			2年			計		
	男子	女子	計	男子	女子	計	男子	女子	計
水田経営学科	12	1	13	13	2	15	25	3	28
野菜経営学科	8	7	15	8	2	10	16	9	25
果樹経営学科	3	3	6	4	2	6	7	5	12
花き経営学科	2	0	2	3	3	6	5	3	8
畜産経営学科	6	3	9	7	4	11	13	7	20
計	31	14	45	35	13	48	66	27	93

(イ) 農家、非農家別

※入校時

	1学年		2学年		合計	
	学生数(名)	割合(%)	学生数(名)	割合(%)	学生数(名)	割合(%)
専業	8	18	11	23	19	20
農家 兼業	10	22	16	33	26	28
計	18	40	27	56	45	48
非農家	27	60	21	44	48	52
合計	45	—	48	—	93	—

(ウ) 出身高校課程別

※入校時

	1学年		2学年		合計	
	学生数(名)	割合(%)	学生数(名)	割合(%)	学生数(名)	割合(%)
農業高校	31	69	31	59	62	67
普通高校	8	23	11	19	19	20
その他	6	13	6	22	22	13
合計	45	—	48	—	93	—

カ 教育科目

区分	科目名	単位数	授業時間数				授業回数(時限数)			
			講義	演習	実験	実習	1学年		2学年	
							前期	後期	前期	後期
共通 教養科目	全 学 科 共 通	生物基礎	1	15			7			
		化学基礎	1	15			7			
		数学基礎	1	15			7			
		国語表現Ⅰ	1	15			7			
		国語表現Ⅱ	1	15				7		
		国語表現Ⅲ	1	15					7	
		人間と社会	1	15					7	
		体育	4	60			14	6	7	3
		教養講座	1	15			3	4		
		就農講座Ⅰ	2	30				14		
		農業法人等就職講座Ⅰ								
		就農講座Ⅱ	1	15					7	
		農業法人等就職講座Ⅱ								
① 小計	15	225	0	0	45	31	28	3		
共通 専 門 科 目	全 学 科 共 通	農業経営	2	30					14	
		農業経営演習	2	30						14
		農業法規	2	30						14
		農業関連産業論	1	15			5	2		
		簿記概論	3	45			22			
		農業情報処理基礎	2	30				14		
		農業情報処理応用	1	15						7
		農業情勢Ⅰ	1	15					7	
		農業情勢Ⅱ	1	15						7
		土壌肥料概論	2	30			14			
		農業機械	2	30			14			
		農業機械基礎実習	1			45	6	16		
		農業機械操作実習Ⅰ	1			45			22	

区分	科目名	単位数	授業時間数			授業回数(時限数)					
			講義・演習	実験	実習	1学年		2学年			
						前期	後期	前期	後期		
共通専門科目	マーケティング論	1	15					7			
	マーケティング演習	2	30						14		
	食品製造	1	15				7				
	スマート農業実践	1	15				7				
	GAP 概論	1	15			7					
	卒業論文	10	150				15	30	30		
	簿記検定講座*	2	30				14				
	毒物・劇物取扱解説*	1	15			7					
	毒物劇物取扱者資格講座*	1	15			7					
	農業機械操作実習Ⅱ*	1			45						
	② 小計 (*自由選択科目を除く)	37	525	0	90	68	61	80	86		
専門科目	水田野菜果樹花き学科共通	農業概論	2	30			14				
		作物保護	2	30				14			
		植物生理	1	15			7				
		環境保全と農業	2	30					14		
		有機農業	1	15					7		
		農産物流通	1	15						7	
		農学実験	1		30		8	6			
		③ 小計	10	135	30	0	29	20	7	21	
		水田経営学科	先進農家等留学研修	5			225	44			
			水田経営研修	2			90	10	12	19	4
	作物経営実習		25			1125	140	130	195	97	
	水田経営基礎		2	30			14				
	水田経営応用		2	30				14			
	水田経営実践		2	30					7	7	
	食品製造演習		2	30				14			
	④-1 小計		40	120	0	1440	208	170	221	108	
	野菜経営学科	先進農家等留学研修	5			225	44				
		野菜経営研修	2			90	10	12	19	4	
		野菜経営実習	25			1125	140	130	195	97	
		野菜生産概論	2	30			14				
		野菜栽培各論	2	30				14			
		野菜経営各論	2	30					7	7	
		食品製造演習	2	30				14			
		④-2 小計	40	120	0	1440	208	170	221	108	
	果樹経営学科	先進農家等留学研修	5			225	44				
		果樹経営研修	2			90	10	12	19	4	
		果樹経営実習	25			1125	140	130	195	97	
		果樹生産概論	2	30			14				
果樹栽培各論		2	30				14				
果樹経営各論		2	30					7	7		
食品製造演習		2	30				14				
④-3 小計		40	120	0	1440	208	170	221	108		
花き経営学科	先進農家等留学研修	5			225	44					
	花き経営研修	2			90	10	12	19	4		
	花き経営実習	25			1125	140	130	195	97		
	花き生産概論	2	30			14					
	花き栽培各論	2	30				14				
	花き経営各論	2	30					7	7		
	フラワー装飾演習	2	30				14				
	④-4 小計	40	120	0	1440	208	170	221	108		
水田、野菜、果樹、花き経営学科共通必修科目合計(①、②、③、④)		102	1005	30	1530	350	282	336	218		

区分	科目名	単位数	授業時間数			授業回数(時限数)				
			講義・演習	実験	実習	1学年		2学年		
						前期	後期	前期	後期	
専門科目	畜産経営学科	畜産概論	1	15		7				
		家畜育種学	1	15			7			
		家畜繁殖学Ⅰ	1	15			7			
		家畜繁殖学Ⅱ	2	30				14		
		家畜栄養学	1	15			7			
		家畜衛生学	1	15				7		
		畜産環境保全	1	15				7		
		家畜解剖生理学	1	15			7			
		家畜解剖実験	1		30		14			
		先進農家等留学研修	5			225	44			
		畜産経営研修	2			90	10	12	19	4
		畜産経営実習	25			1125	132	138	188	104
		乳用牛・肉用牛概論	2	30			14			
		飼料作物	1	15						7
		食品製造演習	2	30				14		
		乳用牛飼養管理技術応用	2	30				14		
		肉用牛飼養管理技術応用								
		乳用牛経営	1	15						7
		肉用牛経営								
⑤ 小計	50	255	30	1440	235	192	235	122		
畜産経営学科 必修科目合計(①、②、⑤)		102	1005	30	1530	348	284	343	211	

履修科目 (必修科目 102 単位、自由選択科目 5 単位の合計)	107	1065	30	1575	660	576
---	-----	------	----	------	-----	-----

キ 非常勤講師一覧

		科目	講師名	所属・職・機関
共通 教養 科目	全 学 科 共 通	化学基礎	柳沼力夫	元日本大学非常勤講師
		国語表現Ⅰ	國分進	ケイセンビジネス公務員カレッジ講師
		国語表現Ⅱ	國分進	ケイセンビジネス公務員カレッジ講師
		国語表現Ⅲ	國分進	ケイセンビジネス公務員カレッジ講師
		体育	高萩孝平	元高等学校教員
		農業経営演習	三部吉久	税理士法人三部会計事務所
		農業法規	本庁職員	福島県庁
		農業関連産業論	担当職員	福島県林業研究センター 福島県農業協同組合中央会 福島県農業共済組合
共通 専門 科目	全 学 科 共 通	簿記概論	居川陽明	税理士法人イカワ会計副所長
		農業情報処理基礎	志間幸恵	シップスパソコンサクール
		農業情報処理応用	志間幸恵	シップスパソコンサクール
		農業情勢Ⅱ	本庁職員	福島県庁
		土壌肥料概論	佐藤紀男	元県職員
		マーケティング論	西元良行	福島大学名誉教授
		マーケティング演習	西元良行	福島大学名誉教授
		食品製造	郡司尚子	郡山女子大学准教授
		(自由選択) 簿記検定講座	居川陽明	税理士法人イカワ会計副所長
		(自由選択) 毒物・劇物取扱解説	柳沼力夫	元日本大学非常勤講師

	科目	講師名	所属・職・機関
専 門 科 目	作物保護	佐々木正剛	福島県植物防疫協会
	環境保全と農業	佐藤紀男	元県職員
	農産物流通	津谷好人	宇都宮大学名誉教授
	フラワー装飾演習	中村良美	フラワースタジオ POCO A POCO 主宰
	家畜育種学	國分洋一	元県職員
	家畜栄養学	土屋友充	元県職員
	家畜衛生学	担当職員	中央家畜保健衛生所
	家畜解剖生理学	二瓶由佳	元県職員
	家畜解剖実験	担当職員	中央家畜保健衛生所
	飼料作物	土屋友充	元県職員

ク 教育行事

月 日	行 事 名
令和 4年 4月 7日	始業式
9日	入校式
12日	学生健康診断・オリエンテーション
22日	防災避難訓練
26日	スポーツ大会(学生自治会、寮自治会主催)
18日	卒業論文設計発表会
6月 8日	植付け祭
6月22日～ 7月 5日	先進農家等留学研修(前期)
17日	直売実習(1回目)
7月15日	学校記念日
22日	直売実習(2回目)
25日	オープンキャンパス(1回目)
30日	オープンキャンパス(2回目)
8月 3日	オープンキャンパス(3回目)
5日	直売実習(3回目)
6日～21日	夏期休業
24日～ 9月 7日	先進農家等留学研修(後期)
9月 7日	毒物劇物取扱者資格試験
22日	直売実習(4回目)
27日～30日	前期試験(1・2学年)
10月 3日	後期授業開始
15日～16日	榊隆祭
11月 2日	直売実習(5回目)
15日	校内意見発表(1学年)
16日	防災避難訓練
10日～11日	収穫祭(10日のみ)、球技大会(学生自治会、寮自治会主催)
20日	日商簿記検定試験
25日	直売実習(6回目)
12月 1日	卒業論文発表会
10日	日本農業技術検定
17日～ 1月10日	冬季休業
令和 5年 1月17日～18日	東日本農業大学校等プロジェクト発表・交換大会(記録動画)
23日～24日	後期試験(2学年)
23日～ 2 22日	家畜人工授精に関する講習会
12日	土壌医検定試験
2月13日～14日	後期試験(1学年)
26日	日商簿記検定試験
3月 2日	卒業記念講演会 (講師：幡谷明里氏「農家出身アナが見た新時代の農業」)
3月 9日	卒業式
17日	終業式
18日～ 4月 6日	春期休業 海外農業研修の開催は中止

ク 各種表彰者

月 日	行事名	結 果
令和4年11月15日	校内意見発表会	最優秀 水田経営学科1年 今野 幸弥 「地元南相馬での稲作・畑作農家を目指して」 優 秀 水田経営学科1年 桑島 大智 「私の農業(ゆめ)」 優 秀 畜産経営学科1年 古家 和音 「じゃーお君がくれた私の目標」
令和4年12月5日	第50回毎日農業記録賞	優秀賞 畜産経営学科1年 諸根 こはる 「父の背中を追いかけて」
令和4年12月7日	校内卒業論文発表会	最優秀 野菜経営学科2年 竹島 和輝 「春ブロッコリー作付けによるナス半身萎凋病の発病抑制技術の有用性に関する検討」 優 秀 水田経営学科2年 田村 芽衣 「「べにはるか」の直売用途における最適栽培日数について」 優 秀 花き経営学科2年 矢口 陽菜 「セル苗定植が宿根カスミソウの生育と収量に及ぼす影響」

ケ 卒業生の進路状況(令和5年3月1日現在)

進 路		農業経営部
就 農	自家	9
	法人	11
	研修	0
	小計	20
非就農	農協	7
	農業団体	0
	農業関連産業	15
	他産業	3
	公務員	2
	進学	0
	小計	27
未定		1
合 計		48

(3) 研修部の取組

ア 研修実施状況

就農研修は就農希望者や新規就農者の技術習得を目的として初級・中級コースを設け、受講希望者のレベルに応じた体系により実施した。

長期就農研修は就農希望者が就農後の農業経営を早期に安定できるよう、1年を単位とした実習主体の研修として実施した。

初級、中級、長期研修の実施により、初級1名、中級4名、長期就農研修9名(内果樹6名)計14名の新規就農者を確保した。

また、「令和4年度福島特定原子力施設地域交付金事業」を活用し、新たにパイプハウス3棟を増設して長期就農研修生受け入れ強化を図った。

農産加工研修は、加工初心者を対象とした「基礎コース(全4回継続参加)」を年2回開催し農産加工に必要な講義を実施した。実際に農産加工品開発を行っている方を対象に「応用コース」を開催し、より高いレベルの商品開発につなげるために実施した。

大型特殊免許及びけん引免許(いずれも農耕車限定)の取得支援を目的とした「安全運転技術総合コース」、農業機械の基本操作や点検整備、ロボット技術や情報通信技術(ICT)を活用したスマート農業を学ぶ「技術向上コース」、農作業の安全対策を学ぶ「農作業安全推進コース」を実施した。新規就農者から認定農業者まで受講者のレベルに応じた指導を行った。

施設利用研修として、就農、農産加工、農業機械の各研修体系の中にも組み入れ実施するとともに、農作業安全に関する研修は現地の要請に応じ実施した。

イ 研修実績
 (ア) 就農研修

a 初級

名称	主な内容	対象者及び定員	受講者数	期間(日数)
(a) 春コース	[講義]・栽培のための基礎知識 ・営農に係る基礎知識 [実習]・栽培管理実習 ・農業機械体験実習	就農予定(希望)者 15名	15名	6~8月(6日) (日曜日開催)
(b) 秋コース	[講義]・栽培のための基礎知識 ・営農に係る基礎知識 [実習]・栽培管理実習 ・農業機械体験実習		14名	8~11月(6日) (日曜日開催)

b 中級

名称	主な内容	対象者及び定員	受講者数	期間(日数)
(a) 中級	[講義、演習、見学] 必修科目: 土壌肥料 農業経営、農業機械、鳥獣害対策 選択科目: 水稲、野菜、果樹、花き、畜産、有機農業	就農予定者及び就農者 15名	15名	6~12月 (必修科目10日) (選択科目各4日) (平日開催)

c 長期就農研修

名称	主な内容	対象者及び定員	受講者数	期間
(a) 長期就農研修	[実習、講義] 栽培管理実習を柱にした1年間の研修 研修科目 施設野菜、露地野菜、果樹、花き、水稲・畑作物 1、畜産、有機栽培 研修場所 農業短期大学校研修部、農業総合センター本部、果樹研究所、畜産研究所、会津地域研究所、浜地域研究所	福島県内で農業により生計を立てることを目標とし、就農前に農業の知識及び技術の習得を目指す者 農業短大枠5名 他若干名	10名 内訳 農業短大 4名 果樹研 6名	令和4年4月 ~ 令和5年3月

d 施設利用研修

名称	主な内容	対象者及び定員	受講者数	期間(日数)
(a) 令和4年度地場産物活用のための作物栽培研修	講義 農作物の基礎、農産物の安全対策・GAPの基礎 実習 竹プランター作り、土作り、施肥、畝立て、マルチ張り、作付け作業、播種(直蒔)、連結ポットを使った苗作り	県北・相双・いわき地区の市町村立小・中学校教諭・栄養教諭	9名	7/29~7/30(2日)

e 研修用ハウス増設

事業名	主な内容	事業量	事業費
農業短期大学校研修用ハウス整備事業	研修希望者の多い施設栽培の強化を図るため、環境制御装置等を実装した栽培施設を整備する。	5.4×18m一式(3棟)	33,550,000

(イ) 農産加工研修

a 基礎 (春コース)

名称	主な内容	対象者及び定員	受講者数	期間(日数)
(a) 営業許可と食品表示	・衛生管理、食品営業許可について ・栄養表示について	農産物加工販売予定者 15名	15名	5/11(1日)
(b) 殺菌と包装	・食品の殺菌方法 ・6次化に関する補助事業等の紹介について			5/25(1日)
(c) 瓶詰め・袋詰め食品	・瓶詰め・袋詰めの加工方法			6/ 8(1日)
(d) 事例紹介	・優良農産加工者による事例紹介 ・加工所運営について			6/22(1日)

b 基礎 (秋コース)

名称	主な内容	対象者及び定員	受講者数	期間(日数)
(a) 営業許可と食品表示	・衛生管理、食品営業許可について ・栄養表示について	農産物加工販売予定者 15名	15名	10/ 5(1日)
(b) 殺菌と包装	・食品の殺菌方法 ・6次化に関する補助事業等の紹介について			10/19(1日)
(c) 瓶詰め・袋詰め食品	・瓶詰め・袋詰めの加工方法			11/ 2(1日)
(d) 事例紹介	・優良農産加工者による事例紹介 ・加工所運営について			11/16(1日)

c 応用

名称	主な内容	対象者及び定員	受講者数	期間(日数)
(a) 加工技術応用	・新商品づくりについて ・食品の殺菌方法	農産物加工販売者15名	15名	8/31(1日)

d 施設利用研修

名称	主な内容	対象者	受講者数	期間(日数)
(a) 農産加工	福島県農産物加工者連絡協議会全体研修	福島県農産物加工者連絡協議会	17名	6/ 1(1日)
	かぼちゃ加工	株式会社奥会津金山大自然	1名	6/28(1日)
	令和4年度第1回技術で支える加工研修	加工業者	16名	8/ 4(1日)
	令和4年度地場産物活用のための作物栽培研修	県北・相双・いわき地区の市町村立小・中・義務教育学校 教諭・栄養教諭	12名	8/ 9(1日)
	職場体験「農産物の加工」	矢吹町立矢吹中学校	9名	9/14(1日)
	きゅうり漬けの袋詰めの常温販売	亀石ファーマーズ	2名	10/17(1日)
	発酵調味料の瓶詰めと袋詰めの常温販売	NP0法人勿来まちづくりサポートセンター交流スペースなっくる	2名	12/ 7(1日)
	いちご加工	鮫川村農林商工課	1名	12/ 9(1日)
	小豆の缶詰め	ゆめねっと福	1名	2/ 1(1日)

(ウ) 農業機械研修

a 安全運転技術総合コース

名称	主な内容	対象者及び定員	受講者数	期間(日数)
(a) けん引操作 (農耕車限定)	・けん引免許(農耕車限定)取得に向け、公道を安全に運転ができるための技術習得	農業者等 各10名	10名 10名 10名 10名 10名 10名 8名	第1回 5/24~ 5/26(3日) 第2回 5/31~ 6/ 2(3日) 第3回 6/ 7~ 6/ 9(3日) 第4回 6/14~ 6/16(3日) 第5回 6/21~ 6/23(3日) 第6回 6/28~ 6/30(3日) 第7回 7/ 5~ 7/ 7(3日)
(b) 大型特殊操作 (農耕車限定)	・大型特殊免許(農耕車限定)取得に向け、公道を安全に運転ができるための技術習得	農業者等 各10名	9名 9名 10名 9名 9名	第1回 10/18~10/20(3日) 第2回 10/25~10/27(3日) 第3回 10/31~11/ 2(3日) 第4回 11/15~11/17(3日) 第5回 11/29~12/ 1(3日)

b 技術向上コース

名 称	主な内容	対象者及び定員	受講者数	期間(日数)
(a) 初めての刈払機	・刈払機の基礎知識 ・基本操作の習得	農業者等 各8名	8名 8名	第1回 5/19 (1日) 第2回 9/ 1 (1日)
(b) 初めての農機整備	・農業機械(トラクタ、刈払機、管理機)の点検整備	農業者等 各8名	8名 4名	第1回 7/28 (1日) 第2回 1/12 (1日)
(c) スマート農業(ドローン研修)	・ドローンの基本知識及び飛行操作体験	農業者等 各15名	7名 6名	第1回 9/ 7(半日) 第2回 9/ 7(半日)
(d) 初めてのアーク溶接	・アーク溶接の基礎知識 ・基本操作の習得	農業者等 10名	10名	9/14~ 9/15(2日)
(e) トラクタ操作技術向上	・トラクタの基本操作 ・ロータリ耕 ・点検整備	農業者等 10名	10名	11/10~11/11(2日)
(f) スマート農業	・自動操舵システムの体験 ・ドローンの飛行操作体験	農業者等 20名	5名	12/ 6~12/ 7(2日)
(g) 田植機の整備点検	・整備点検技術の習得	農業者等 10名	7名	2/ 7~ 2/ 8(2日)

c 農作業安全推進コース

名 称	主な内容	対象者及び定員	受講者数	期間(日数)
(a) 農作業安全	・農作業事故の現状と課題 ・農業機械の安全対策	農業者、関係機関、団体職員等 20名	3名	3/2(1日)
(b) 現地支援研修 現地で学ぶ農作業安全	・農作業事故の現状 ・農業機械の安全対策	中島村・川原田地区 中島村 南相馬市・鶴谷地区 矢吹町・弥栄地区 石川町・JA夢みなみ 福島市・県北農林事務所 本宮市・福島県酪農協 南相馬市・相双農林事務所	28名 28名 25名 18名 26名 18名 12名 23名	4/23(1日) 5/27(1日) 5/29(1日) 6/ 5(1日) 9/27(1日) 11/18(1日) 11/22(1日) 2/ 1(1日)

d 施設利用研修

名称	主な内容	対象者	受講者数	期 間(日数)
(a) 農業機械	トラクタ免許	郡山園芸振興センター	3名	10/ 3～ 4(2日)
	けん引運転免許	郡山園芸振興センター	5名	12/12～13,16 (3日)
	専門技術向上研修	普及指導員	12名	6/17(1日)
	農作業安全研修	郡山園芸振興センター	5名	9/22(1日)

2 福島県農業総合センター農業短期大学校運営会議の開催

大学校が適切かつ円滑に運営されるよう、大学校の教育・研修等の基本的事項について、県内各層の意見を徴し、助言を求めめるため設置。令和2年度からは学校教育法に基づく学校関係者評価委員会を兼ねる。

(1) 農業短期大学校運営会議の開催

開催日	開催場所	テ ー マ
令和5年 2月24日	農業総合センター 農業短期大学校教養ホール	1 令和4年度の教育実績 2 学校評価 3 令和5年度の教育内容 4 学生の活動紹介（映像による学校・学科紹介） 5 意見交換

(2) 運営会議委員（敬称略）

氏名	所属・役職名等
鈴木 光一	福島県指導農業士会 会長
中田 幸司	うつくしまふくしま農業法人協会
鈴木 正洋	福島県農業会議 担い手・経営対策部長
紺野 明宏	福島県農業協同組合中央会 人材育成部長
菅野 雅敏	就農支援センター 所長
安田 修久	福島県高等学校教育研究会農業部会 部会長
新田 洋司	福島大学 教授
柳沼 力夫	大学校外来講師
鈴木 敏子	農業短期大学校後援会 会長
小沢 充博	農業短期大学校同窓会 会長
竹内 孝重	農業担い手課 課長

V 食の安全・環境と共生する農業支援

1 安全農業推進部の業務実績

(1) 指導・有機認証課の業務

ア 農薬に関する業務

農薬取締法に基づき、農薬販売の届出受理、農薬販売者に対する立入検査等を実施した。

(ア) 農薬販売届の受理（令和5年3月31日現在）

新規届出	変更届出	廃止届出	販売者総数
45	35	44	1,223

(イ) 農薬販売者立入検査（令和5年3月31日現在）

立入検査 延べ数	注意指導票による指導事件数							左のうち 改善済み 件数
	販売の 制限、禁 止	虚偽宣 伝等の 禁止	販売所 の届出	帳簿の 備付、記 載、保管	その他 (表示等)	指導延べ 件数計		
254	15	0	0	6	26	0	32	32

(ウ) 主な農薬適正使用指導記録

月 日	内 容	受講者数
7月11、14日	農薬危害防止講習会	283
11月28、29日、12月2日	農薬適正使用アドバイザー認定・更新研修	132
11月28、29日、12月2日	農薬管理指導士認定・更新研修	25
12月14日	農産物の安全・安心に係る指導会	38

(エ) ゴルフ場の検査・指導

農薬使用実績に基づく適正使用確認件数	35
--------------------	----

(オ) 航空防除（無人航空機）に関する指導

防除実施面積	8,759.6ha（水稻8,156.2ha、大豆567.8ha、麦類2.5ha、その他33.1ha）
事故発生状況	2件
指導対応状況	防除実施者等に対し、周辺住民等への事前情報提供、飛散防止、作業事故防止、事故発生時の報告方法等について文書で周知し、併せて防除所のホームページに情報を掲載した。

(カ) 農作物病虫害防除指針掲載農薬登録変更内容の確認とホームページによる周知

防除指針掲載農薬の登録内容変更に関する情報	12回
-----------------------	-----

(キ) 農薬流通量調査

令和3年10月から令和4年9月までの期間（令和4農薬年度）を対象に、農薬卸売業者及びホームセンターから農薬販売量の報告を求め、県内の流通量を取りまとめた。なお、令和3年度業務年報の令和3農薬年度調査データに誤りが確認されたため、修正した表を記す。

分 類	令和4農薬年度		令和3農薬年度	
	流通品目数	流通量 (t, kl)	流通品目数	流通量 (t, kl)
殺菌剤	299	794	310	1,287
殺虫剤	338	1,393	334	2,068
殺虫殺菌剤	174	915	175	1,283
除草剤	565	2,445	583	3,308
その他	145	4,742	142	7,998
合 計	1,521	10,288	1,544	15,945

イ 農作物の野生鳥獣被害取りまとめ（調査対象期間 令和3年4月～令和4年3月）

総被害面積 (ha)	120.36 (鳥害8.76、獣害111.60)
総被害金額 (千円)	139,842 (鳥害26,559、獣害113,283)

ウ 肥料に関する業務

肥料の品質の確保等に関する法律に基づき、知事登録肥料の登録申請等受理及び保証値の分析、指定混合肥料・特殊肥料・肥料販売の届出受理、生産業者等への立入検査及び取去を実施した。

(ア) 知事登録普通肥料 登録・届出受理（令和5年3月31日現在）

新規登録	登録更新	変更届出	失効届出
3	16	17	1

(イ) 指定混合肥料届出受理 (令和5年3月31現在)

新規届出	変更届出	廃止届出
2	2	0

(ウ) 特殊肥料生産・輸入届出受理 (令和5年3月31現在)

生産業者届出	変更届出	廃止届出
25	47	42

(エ) 肥料販売業務開始届出受理 (令和5年3月31現在)

新規届出	変更届出	廃止届出	有効届出数
33	96	42	1,134

(オ) 肥料生産・販売事業場立入検査 (令和5年3月31現在)

立入検査件数	収去・分析	主な検査・指導事項
93	14	表示票、帳簿、届出内容、重量検査(生産業者)、 内容成分(収去肥料)

(カ) 肥料入荷量調査

調査対象期間は、令和3年6月から令和4年5月までとした。

総入荷量は80,338tで、前年比99%であった。普通肥料の種類ごとの入荷量は以下のとおり。

(t)

窒素質	リン酸質	カリ質	複合	石灰質	有機質	その他
2,938	3,191	2,425	54,788	11,003	1,538	4,455

(キ) 肥料生産数量調査

令和4年1月から12月までの1年間を対象に、肥料の生産数量を調査し取りまとめた。

項目	知事登録肥料	指定混合肥料	特殊肥料	輸入特殊肥料
事業者数	20 (13)	6 (3)	516 (418)	7 (2)
銘柄数	46 (26)	29 (7)	602 (465)	13 (2)
生産数量 (t)	1,712	510	208,097	40

()内は生産・輸入実績があるもの

エ 飼料に関する業務

飼料の安全性の確保及び品質の改善に関する法律に基づき、販売届の受理や業者への立入検査を実施した。

(ア) 飼料販売届出受理 (令和5年3月31現在)

新規届出	変更届出	廃止届出	販売者総数
2	22	0	58

(実質廃止、取扱いなし、ペット用のみの業者は除く)

(イ) 飼料添加物販売届出受理 (令和5年3月31現在)

新規届出	変更届出	廃止届出	販売業者総数
1	13	0	11

(取扱いなしの業者は除く)

(ウ) 飼料製造・販売事業者立入検査 (令和5年3月31現在)

立入検査件数	収去・分析	主な検査・指導事項
62	9	・表示票、帳簿、届出事項、重量検査(製造業者) ・BSE対応ガイドライン、有害物ガイドライン及び食品残さ ガイドライン等の遵守状況 ・栄養性及び安全性(収去飼料)

オ 有機認証に関する業務

日本農林規格等に関する法律（JAS 法）に基づき、登録認証機関として有機農産物生産行程管理者の認証業務を実施した。

(ア) 業務経過

月 日	内 容
5月11日、6月1日、 6月21日、7月20日、 10月3日、12月9日、 12月16日、3月22日	認証書交付式
4月13日	有機認証検査員委任状交付式及び第1回認証業務担当者会議
6月15日	第1回認証業務講習会（受講者29名）
6月29日、30日	FAMICによる事業所調査
9月16日	格付実績及び面積報告（農林水産省へ）
9月21日資料発送	第1回公平性委員会（書面開催）
10月26日	第2回認証業務担当者会議
11月22日	FAMICによる実地調査の立会対応
11月30日	登録認証機関内部監査
12月1日、2日	有機JAS指導員研修（基礎研修）
12月7日	第2回認証業務講習会（受講者14名）
2月14日	第2回公平性委員会
3月1日、8日	認証生産行程管理者全体研修会
3月8日	第3回認証業務担当者会議

(イ) 認証状況（令和5年3月31日現在）

申請受理件数	9 (148)	
受理後自ら申請を取り下げた件数	0 (4)	
新たな認証生産行程管理者数	9 (132)	
認証しなかった件数	0 (8)	
認証を取り消した件数	0 (2)	
認証を自ら取り下げた件数	2 (73)	
認証生産行程管理者数	57	個人54、組織3、農家総数64
認証ほ場面積（令和3年度）(a)	6,575	水田4,897、畑1,608、その他70

() 内は業務開始からの累計

(ウ) 有機農産物格付実績（kg）（令和3年度）

野菜	20,636
果樹	831
米	93,360
小麦	0
そば	7,403
大豆	29
その他豆類	12
雑穀	0
きのこ類	225,091
植物種子（エゴマ）	0
香辛料（ハーブ）	86
計	347,447

令和4年9月に農林水産大臣へ報告

(2) 発生予察課の業務

ア 病害虫発生予察事業

植物防疫法に基づき、病害虫の発生予察・診断、防除対策情報提供等を実施した。

(ア) 普通作物

水稲は定点10か所、巡回240ほ場、麦類は巡回32ほ場、ダイズは巡回36ほ場において病害虫の発生状況を定期的に調査した。また、予察灯1か所、フェロモントラップ等14か所（センター2を含む）で害虫の発生消長を調査した。

(イ) 果樹

リンゴで定点8か所、巡回33ほ場、モモで定点3か所、巡回21ほ場、ナシで定点5か所、

巡回 24 ほ場、カキは巡回 7 ほ場で、病害虫の発生状況を定期的に調査した。また、フェロモントラップ 20 か所(うち 2 地点は複数種を調査)、カメムシ越冬量調査 2 か所で害虫の発生消長を調査した。

(ウ) 野菜・花き

キュウリで定点 3 か所、巡回 8 か所、トマトで定点 4 か所、巡回 8 か所、イチゴで定点 5 か所、巡回 16 か所、キクで定点 2 か所、巡回 9 か所、リンドウで巡回 7 か所において、病害虫の発生状況を定期的に調査した。また、フェロモントラップ 15 か所(センター1 か所を含む)で害虫の発生消長を調査した。

(エ) 情報の提供

病害虫発生予察情報を延べ 16 回発表し、各作物の防除対策資料として提供した。また、水稲穂もちで 1 回、水稲斑点米カメムシ類で 1 回、リンゴ褐斑病で 1 回、モモせん孔細菌病で 3 回、モモハモグリガで 1 回、ナシ黒星病で 3 回、野菜類・花き類ハスモンヨトウで 1 回、イチゴハダニ類で 1 回の計 12 回の防除情報を発表した。

また、ホームページに各作物の病害虫発生状況、防除対策情報、BLASTAM、予察灯やフェロモントラップのデータなどの防除情報を提供した。

(オ) 国への報告事務

病害虫発生予察現況報告(13 回)、ウンカ類発生現況報告(随時)、各農作物病害虫発生面積報告(10 月、3 月)、その他病害虫発生情報等を報告した。

(カ) 病害虫防除員

農家、農協職員 74 名を委嘱し、予察灯やフェロモントラップの調査及び病害虫発生状況情報を定期的に収集した。

イ 病害虫診断同定

令和 4 年(令和 4 年 1 月 1 日～令和 4 年 12 月 31 日)の依頼件数は、10 件であった。

診断・同定の結果	病害	4 件(糸状菌 1 件)
	虫害	1 件(カメムシ目 1 件)
	その他	5 件(原因不明 5 件)

ウ ミバエ類等侵入警戒調査事業

諸外国から侵入の危険性の高い病害虫である、チチュウカイミバエ及びミカンコミバエを 5 か所、コドリングを 2 か所、火傷病を 5 か所で調査した。

チチュウカイミバエ、ミカンコミバエ及びコドリングは、フェロモントラップによる調査を行った結果、誘殺されなかった。

火傷病は、目視による調査を行った結果、いずれの調査地点においても疑わしい症状は認められなかった。

エ ウメ輪紋ウイルス(plum pox virus)の発生状況調査

東京都のウメにおいて国内初確認されたウメ輪紋ウイルスによる病害(平成 21 年 4 月 8 日、東京都病害虫防除所発表)について、本県で生産されている核果類での発生の有無を調査した。

調査地点は県内 8 か所とし、調査対象植物の栽培面積や過去の調査実績から、農林事務所ごとに調査地点数を設定した。

生産園地の調査は、ほ場で目視による病徴確認を行った後、病徴の有無によらず 1 か所当たり 5 樹を選定し、1 樹から成葉 5 枚を採取し、イムノクロマト法によるウイルス検定を行った。苗生産園の調査は、生産園地と同様に目視による調査を行った後、横浜植物防疫所に試料を送付し、検定を実施した。

一部の樹体で葉の退緑症状が確認されたが、ウイルス検定の結果、すべての検体が陰性であり、本県での発生は確認されなかった。

オ キウイフルーツかいよう病 Psa3 系統の発生状況調査

平成 26 年 5 月に初めて発生が確認された本病について、「キウイフルーツかいよう病の Psa3 系統の防除対策マニュアル」(平成 30 年 5 月 22 日付け 30 消安第 892 号消費・安全局植物防疫課長通知)に基づき、本県で生産されているキウイフルーツでの発生状況を調査した。

キウイフルーツ生産園地のある、農林事務所農業振興普及部及び農業普及所のうち 2 部所に対し、各 2 園地程度を選定の上、目視による病徴確認又は生産者への聞き取り調査を依頼した。疑似症状は認められず、本県での発生は確認されなかった。

キウイフルーツかいよう病の Psa3 系統のまん延防止のため、「キウイフルーツ苗木等検査実施要領(以下、「要領」という。)」(平成 30 年 4 月 25 日付け 30 消安第 228 号消費・安全局長通知)に基づき、清浄なキウイフルーツ苗木等(キウイフルーツ、さるなし、しまさるなし及びみやまたたびの苗木、母樹及び花粉)のみが流通するよう、検査が行われた。

要領により、検査対象苗木等の生産園地の把握や、農林水産省横浜植物防疫所による現地での検査

の補助を行った。検査対象苗木等の生産園地等は 10 か所(さるなし)で、疑似症状は確認されなかった。

カ クビアカツヤカミキリの発生状況調査

本種は、平成 24 年に愛知県のサクラでの国内初発生を皮切りに、現在まで複数の都府県でサクラ及び核果類果樹(モモ、スモモ、ウメ)において被害が確認されている。近隣の県でも発生を確認していることから、本県においても本種の侵入を警戒するため、調査を実施した。

県境に近い県内 4 地点(主に公園)において、4 月上旬及び夏期に、1 地点当たりサクラ 100 樹程度について、フラス及び寄生(成虫、幼虫)の有無を確認した結果、いずれにおいても本種をはじめカミキリムシ類の寄生は確認されなかった。

キ スイカ果実汚斑細菌病

国は、国内にまん延すると有用な植物に重大な損害を与えるおそれがある病害虫(重要病害虫)を指定しており、本県未発生病害虫の侵入を警戒する必要がある。また、本病害虫が発生した場合、迅速に初動防除等を開始し、早期に根絶することが重要である。そこで、重要病害虫のスイカ果実汚斑細菌病の県内の発生の有無を調査した。

夏秋露地キュウリ主要産地から 11 ほ場選定し、令和 4 年 5~9 月に月 1 回調査した。1 ほ場当たり任意の 100 果について、発病の有無を確認した。スイカ果実汚斑細菌病の発生は、確認されなかった。

ク 種馬鈴しょ検査

種馬鈴しょによる有害動植物のまん延を防止するため、種馬鈴しょの生産ほ場検査及び生産物検査に立ち会い、検査の補助を行った。令和 4 年度は、計 6 回の検査補助を行った。

ケ 農林水産データ管理・活用基盤強化事業

国立研究開発法人農業・食料産業技術総合研究機構を代表とする予察情報 API コンソーシアムに参加し、WAGRI の API として生産者へ直接的でタイムリーに病害虫情報を通知する仕組みを構築するため、各県ごとに異なる予察情報のフォーマットを標準化した API 構築に向けて、予察情報を広域に情報発信するためのシステム実証を行った。

本年度は、予察情報を登録するシステムの効率の検証と、登録スキームにおける問題点を洗い出すため、予察情報の登録実証を行いながら、機能などについて改善点を洗い出した。

コ 主要病害虫の発生状況

(ア) 水稻

a いもち病

本田での葉いもちの初発確認は、全域で平年並であった。7 月下旬に一部の地域で多数の病斑やズリコミ症状が確認されたが、その後の高温により進展が抑制され、8 月上旬の発生ほ場割合は平年並であった。

穂いもちの初発確認日は、全域で平年並であった。9 月上旬の発生ほ場割合は、平年並であったが、常発地域では発病程度の高いほ場も確認された。

b 紋枯病

紋枯病の初発確認日は、全域で平年並であった。発生ほ場割合は、平年並~低く推移し、発病程度も低かった。

c 稲こうじ病

9 月上旬の発生ほ場割合は、全域で平年より低く、発病程度も低かった。

d ごま葉枯病

9 月上旬の発生ほ場割合は、中通り地方で平年より低く、会津地方、浜通り地方では発生が確認されなかった。

e イネミズゾウムシ

6 月下旬の発生ほ場割合は、全域で平年よりやや高いから高く、浜通り地方では被害程度の高いほ場も確認された。

f イネドロオイムシ(イネクビホソハムシ)

6 月下旬の発生ほ場割合は、中通り地方で平年より高く、会津地方、浜通り地方では発生が確認されなかった。中通り地方の被害程度の高かった地域では、チアメトキサム剤に対する感受性低下が確認された。

g ニカメイガ(ニカメイチュウ)

幼虫の発生ほ場割合は、全域で平年並からやや高かったが、被害程度は低かった。

h フタオビコヤガ(イネアオムシ)

8 月の幼虫の発生ほ場割合、発生程度ともに平年より低く、すくい取りでも発生量は平年より

少なかった。

i イナゴ類

発生量は平年並からやや低く推移し、8月下旬の発生ほ場割合、被害程度はともに平年並であった。

j 斑点米カメムシ類

すくい取り調査では、6月下旬から発生が確認され、畦畔雑草では平年より発生がやや多かった。本田では発生地点割合、発生程度とも平年並であった。坪刈り調査における斑点米混入率は、平年並であった。

k イチモンジセセリ（イネツトムシ）

8月下旬の幼虫の発生ほ場割合は、全域で平年より低く、発生程度も低かった。

(イ) ムギ類（令和4年産）

a 赤かび病

6月の発病穂率は、中通り地方で平年並、会津地方では発生が確認されず、浜通り地方でやや低かった。

b 雪腐病類

会津地方の麦産地での根雪期間は平年並で、葉先が枯れた株はあったが、枯死面積率は平年より低かった。

(ウ) ダイズ

a 紫斑病

子実調査では、被害粒率は中通り地方で平年よりやや高く、会津地方、浜通り地方で平年並であった。

b ベと病

8月の発生ほ場割合は、全域で平年より高かった。子実調査では、被害粒率は中通り地方で平年並、会津地方でやや高く、浜通り地方で低かった。

c 吸実性カメムシ類

9月の払落し調査では、県全体で発生が少なかった。子実調査では、被害粒率は全域で平年よりやや高かった。

d フタスジヒメハムシ

9月の払落し調査では、払落し頭数は中通り地方、会津地方で平年並、浜通り地方で少なかった。子実調査では、被害粒率は中通り地方、浜通り地方で平年よりやや低いから低く、会津地方で高かった。

e マメシンクイガ

子実調査では、被害粒率は中通り地方、会津地方で平年より低く、浜通り地方でやや高かった。連作初年目でも、連作ほ場が付近にあったことで被害が大きいケースが確認された。

f ウコンノメイガ

8月の幼虫による葉巻の発生状況は、全域で平年よりやや少ないから少なかった。

(エ) リンゴ

a 斑点落葉病

新梢での発生は、5月下旬から確認された。発生ほ場割合は、平年より高く推移したが、発生程度は低く推移し、総じて平年並の発生状況であった。

b 褐斑病

7月下旬から新梢葉での発生が確認され、中通りでは発生ほ場割合は平年よりやや高く推移し、会津では平年並で推移した。9月以降は、一部で発病葉率の高いほ場が確認され、早期落葉する事例も確認された。

c 腐らん病

5月下旬の発生ほ場割合は、平年並であった。中通り南部で発生程度が高い傾向であった。

d 輪紋病

9月上旬から果実での発生が確認され、発生ほ場割合は平年並で推移した。

e すず点病

中通りでは9月上旬から発生が確認され、発生ほ場割合は平年並で推移した。会津では11月に発生が確認された。

f シンクイムシ類

ナシヒメシンクイ及びスモモヒメシンクイ果実被害は、8月下旬から一部のほ場で確認された。

g アブラムシ類

5月下旬から新梢での寄生が確認されたが、発生ほ場割合はやや低かった。

h ハダニ類

5月下旬から新梢葉での寄生が確認された。発生ほ場割合は平年並に推移したが、8月以降増

加したほ場があった。優占種がリングハダニのほ場が多かったが、一部のほ場ではナミハダニが優先した。

(オ) モモ

- a せん孔細菌病
春型枝病斑は4月中旬ごろから確認され、発生ほ場割合は、平年並であった。
新梢葉での発生は5月下旬から確認され、発生ほ場割合は、平年並であった。
果実での発生は7月上旬から確認され、平年並であった。
- b シンクイムシ類
ナシヒメシンクイによる新梢の被害は、9月上旬に確認されたものの、果実被害は確認されなかった。
- c モモハモグリガ
新梢葉の被害は5月下旬から確認された。8月以降発生が増加し、9月上旬の発生ほ場割合は平年より高く、一部寄生程度が高いほ場も確認された。
- d ハダニ類
5月下旬から新梢葉の寄生が確認された。
主にクワオオハダニ、ナミハダニが確認され、一部のほ場でナミハダニの寄生が多かった。

(カ) ナシ

- a 黒星病
花そう基部病斑の初確認は、4月13日であった。5月の発生ほ場割合は、平年並であった。
新梢葉での発生は、5月下旬から確認された。発生ほ場割合は、中通り、浜通りとも平年並で推移した。
果実での発生は、6月下旬から確認された。発生ほ場割合は、中通りでは6~7月は平年よりやや高く、8~9月は平年並で推移した。浜通りでは平年並で推移した。
- b カイガラムシ類
8~9月に、ナシマルカイガラムシによる果実被害が確認された。発生ほ場割合は、平年並であった。
- c ハダニ類
新梢葉の寄生は、中通りでは8月下旬に確認され、発生ほ場割合は平年並であった。浜通りでは5月下旬から確認され、その後発生ほ場割合は9月までおおむね平年並で推移したものの、一部で多発生園が認められた。
優占種は中通りではナミハダニ、浜通りではカンザワハダニであった。

(キ) カキ

- a 円星落葉病
新梢葉での発生ほ場割合は、平年並であった。

(ク) 果樹共通

- a 果樹カメムシ類
リングの果実被害は、7月下旬に確認され、発生ほ場割合はやや少なかった。
モモ及びカキの果実被害は、確認されなかった。
ナシの果実被害は、7月下旬から確認され、7~8月の発生ほ場割合は平年並であった。

(ケ) 夏秋トマト

- a 灰色かび病
6月から発生が確認され、8月の発生ほ場割合は高かったが、生育期間を通して平年並に推移した。8月以降、発病程度の高いほ場が多かった。
- b 葉かび病
7月から発生が確認され、発生ほ場割合は平年並に推移した。9月に発生ほ場割合および発病程度の高いほ場が多かった。
- c すすかび病
8月から発生が確認され、発生ほ場割合は例年並に推移した。
- d かいよう病
一部のほ場で6月から発生が確認され、7月から常発ほ場を中心に発生が散見された。
- e オオタバコガ(タバコガ類)
フェロモントラップによる誘殺ピークは、一部地域を除き平年並の8月中下旬であった。被害果の発生ほ場割合は平年よりやや低く推移した。
- f コナジラミ類
発生ほ場割合は平年並に推移した。9月に寄生程度の高いほ場が多かった。

- g アザミウマ類
7月から被害果（白ぶくれ果）の発生が確認されたが、発生ほ場割合は平年よりもやや低く推移した。

(コ) 夏秋キュウリ

- a ベと病
6月から発生が確認され、7月以降発病程度の高いほ場割合が多くなった。
- b うどんこ病
7月から発生が確認され、発生ほ場割合は平年よりやや低く推移した。
- c 炭疽病
6月から発生が確認され、7月以降発生量が増加し、発生ほ場割合は平年よりやや高く推移した。
- d 褐斑病
8月から発生が確認され、発生ほ場割合は平年よりやや低く推移した。
- e モザイク病
7月から発生が確認され、発生ほ場割合は平年よりやや低く推移した。
- f アブラムシ類
6月から寄生が確認され、発生ほ場割合は平年並に推移した。
- g ハダニ類
6月から寄生が確認され、発生ほ場割合は平年並に推移した。

(サ) イチゴ（令和3年定植）

- a 灰色かび病
果実被害は1月から確認され、発生ほ場割合は平年よりやや低く推移した。
- b うどんこ病
1月の発生ほ場割合は、平年より高かったが、その後は平年よりやや低く推移した。
果実被害は、11月から確認され、2月に一部発病程度の高いほ場が確認された。
- c 土壌病害（炭疽病、萎黄病）
育苗床からの持ち込み及び定植直後から発生が確認され、補植しているほ場が確認された。
炭疽病、萎黄病ともに発生ほ場割合は平年並であった。
- d アブラムシ類
定植直後から寄生が確認され、11月に一部発生程度の高いほ場がみられたが、その後の発生ほ場割合は平年並に推移した。
- e コナジラミ類
定植直後から寄生が確認され、発生ほ場割合は平年並に推移した。
- f アザミウマ類
主要寄生種は、ヒラズハナアザミウマとミカンキイロアザミウマで、花での寄生は12月から確認され、発生ほ場割合は平年並に推移した。
- g ハダニ類
主要寄生種はナミハダニで、12月まで発生ほ場割合は平年より低かったが、その後は平年並に推移した。
- h ハスモンヨトウ
定植以降11月まで寄生が確認され、発生ほ場割合は平年並に推移した。

(シ) キク

- a 白さび病
苗床からの持ち込みによると思われる発生が5月から確認された。発生ほ場割合は平年並に推移した。
- b アブラムシ類
定植直後から寄生が確認され、発生ほ場割合は平年並に推移した。
- c ハダニ類
6月から寄生が確認されたが、7月はほとんど寄生が認められず、8月の発生ほ場割合は平年並だった。
- d オオタバコガ（タバコガ類）
6月から被害が確認され、発生ほ場割合は平年よりもやや低く推移した。
- e アザミウマ類
定植直後から寄生が確認され、発生ほ場割合は平年並に推移した。
- f ナモグリバエ
5~6月まで発生が確認され、発生ほ場割合は平年並に推移した。

(ス) リンドウ (例年：2015年～2021年の7年間平均)

- a 葉枯病
6月から発生が確認され、発生ほ場割合は例年より高く推移した。
- b 褐斑病
8月に発生が確認され、発生ほ場割合は例年並に推移した。
- c ハダニ
寄生種はカンザワハダニで、5月から発生が確認され、発生ほ場割合は例年より低く推移した。
- d リンドウホソハマキ
芯折れ被害は6月から確認され、発生ほ場割合は例年並に推移したが、6月は発生程度の高いほ場が確認された。

(3) 分析課の業務

- ア 農林水産物を対象とした緊急時環境放射線モニタリングの実施
 災害対策基本法及び原子力災害対策特別措置法等に基づき、農林水産物の緊急時環境放射線モニタリング検査を実施した。当課は、主務課が作成したサンプリング計画に基づき農林事務所等が採取した試料の放射性物質(放射性セシウム)を測定し、測定結果を原子力災害現地対策本部に報告した。県が公表した農林水産物の緊急時環境放射線モニタリング実施状況は次のとおりである。

農林水産物の緊急時モニタリング実施状況

令和5年3月31日現在
 福島県環境保全農業課

【令和4年度(出荷確認検査)※1】

食品群	品目数	基準値※2 (100Bq/kg) 以下件数	基準値※2 (100Bq/kg) 超過件数	検査結果 件数	月 別											
					4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
玄米※3	1	1,062	0	1,062	0	0	0	0	13	475	573	1	0	0	0	0
穀類(玄米除く)	5	171	0	171	0	0	4	39	18	4	28	62	16	0	0	0
野菜	181	1,711	0	1,711	153	177	270	339	172	114	165	146	81	29	15	50
果実	34	426	0	426	0	3	23	42	50	152	89	48	15	3	1	0
原乳	2	97	0	97	8	8	9	8	8	8	8	8	8	8	8	8
肉類	5	1,723	0	1,723	219	281	136	144	101	141	132	143	77	121	104	124
鶏卵	2	150	0	150	12	12	12	12	13	13	14	12	12	13	12	13
はちみつ	1	35	0	35	0	5	30	0	0	0	0	0	0	0	0	0
牧草・飼料作物	-	608	1	609	3	16	118	36	62	106	92	90	73	0	0	13
水産物(海産)※4※5	148	3,849	0	3,849	356	233	345	170	195	340	305	350	410	163	349	633
水産物(河川・湖沼)※5	14	219	0	219	49	6	39	16	5	7	16	7	0	0	1	73
水産物(内水面養殖)	5	26	0	26	0	3	4	4	0	4	5	2	0	0	0	4
山菜(野生)	16	406	0	406	132	198	48	5	0	0	0	0	3	3	1	16
山菜(栽培)	1	121	0	121	52	64	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0
きのこ(野生)	40	88	0	88	0	0	0	3	13	35	24	12	1	0	0	0
きのこ(栽培)	21	488	0	488	26	24	33	29	26	96	162	53	17	7	5	10
果実(野生)	1	4	0	4	0	0	0	0	0	0	4	0	0	0	0	0
樹実類	2	23	0	23	0	0	0	0	0	4	6	7	5	0	1	0
合計	477※6	11,207	1	11,208	1,010	1,030	1,076	847	676	1,499	1,623	941	718	347	497	944

- ※1 出荷・販売用の品目を対象に実施した検査(出荷制限等品目の解除に向けた検査を除く)
- ※2 食品衛生法における食品の基準値(セシウム134、セシウム137の合算値)(一般食品)100Bq/kg、(牛乳)50Bq/kg
- ※3 玄米は原産事故で避難指示等のあった一部地域(米の全量全袋検査を継続する12市町村)を除き、令和2年度からモニタリング検査に移行
 令和4年度からは広野町、川内村がモニタリング検査に移行。
 令和4年度米の全量全袋検査実施市町村：田村市、南相馬市、楡葉町、富岡町、大熊町、双葉町、浪江町、葛尾村、飯館村、川俣町(旧山木屋村)の10市町村
 米の全量全袋検査の結果
 福島県 農林水産部 水田畑作課 <https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/36035b/kome-kensa.html>
 ふくしまの恵み安全対策協議会 <https://fukumegu.org/ok/contentsV2/>
- ※4 ズワイガニ(オス)、ズワイガニ(メス)はそれぞれ1品目として集計
- ※5 シロザケ(筋肉)、シロザケ(精巣)、シロザケ(卵巣)は「海産」と「河川・湖沼」でそれぞれ1品目として集計
- ※6 シロザケ(筋肉)、シロザケ(精巣)、シロザケ(卵巣)は「海産」と「河川・湖沼」の区別なく合計ではそれぞれ1品目として集計

●出荷制限等品目の解除に向けた検査(令和4年度公表)

食品群	品目数	基準値※2 (100Bq/kg) 以下件数	基準値※2 (100Bq/kg) 超過件数	検査結果 件数	月 別											
					4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
野菜	7	166	0	166	0	2	0	0	6	4	28	83	43	0	0	0
水産物(海産)	1	321	0	321	19	57	52	26	12	16	11	21	9	4	34	60
水産物(河川・湖沼)	6	243	2※7	245	10	20	29	5	29	66	41	26	8	0	0	11
山菜(野生)	1	22	0	22	0	0	0	0	0	22	0	0	0	0	0	0
合計	15	752	2	754	29	79	81	31	47	108	80	130	60	4	34	71

※7 基準値超過は、既に国から出荷制限の指示が継続されているイワナ1件及びヤマメ1件

●食品群の区分方法について
 詳細は、「ふくしま復興情報ポータルサイト」の「これまでのモニタリング検査結果【年度別集計】」参照
<https://www.pref.fukushima.lg.jp/site/portal/ps-monthly-report.html>

イ その他検査の実施

出荷等制限品目の解除可否を判断する等、上記アの検査に資するため、県の自主的な検査を次のとおり実施した。

検査名	検査実績	検査の概要
事前確認検査	1,561点	農林水産物の緊急時環境放射線モニタリング検査の品目のうち、出荷等制限品目の解除可否を判断する検査等
その他の検査	99点	農林水産物の緊急時環境放射線モニタリング検査の他に主務課が必要とし、環境保全農業課が認める品目等の検査

ウ 放射性物質測定技能試験

測定・分析の技能の維持や向上のために取り組んだ各種技能試験とその結果は次のとおりである。

参加した精度管理	実施主体	検査項目	評価結果
IAEA-TERC-2022-01 World Wide Open Proficiency Test Exercise	国際原子力機関(IAEA)	Cs-134, Cs-137 Co-60	良好
福島県放射能分析精度管理事業	福島県環境創造センター	Cs-137	良好
放射性セシウムを含む玄米試料を用いた技能試験	セイコー・イージーアンドジー株式会社	Cs-137	良好

2 有機農業推進室の業務実績

(1) 有機農業推進担当者等連携会議の開催

有機農業の技術確立、普及を目的とし、次のとおり開催した。

回	開催月日	内 容
第1回	4月11日	環境にやさしい農業拡大推進事業、有機農業の推進体制について協議
第2回	6月24日	双葉地域実証ほ見学を実施、普及活動の進捗状況等について協議
第3回	7月20日	会津地域実証ほ学会を実施、環境にやさしい農業拡大推進事業の進捗状況等について協議
第4回	8月24日	事業推進活動状況、オーガニックふくしまマルシェ、有機栽培米産地見学会等について協議
第5回	10月19日	事業推進活動状況、福島県有機農業推進計画(第3期)素案等について協議
第6回	12月7日	事業推進活動状況、オーガニックフェアについて協議
第7回	2月1日	事業推進活動状況、環境にやさしい農業セミナーについて協議

(2) 有機農業技術実証の取組

応用的技術の実証・確立や、各地方の実態を踏まえた有機農業の推進活動を展開するため、県内6か所に有機農業実証ほを設置した。

No	作物	実証地区	担 当	実証内容	結 果
1	水稻	福島市	農業総合センター 有機農業推進室	有機栽培「福、笑い」での栽培特性把握	慣行の栽培暦を基に、幼穂形成期の葉色値から追肥判断を行うことで、有機栽培米の「福、笑い」を生産することができた。
2	ニンジン	郡山市	農業総合センター 有機農業推進室	太陽熱土壌消毒を利用した有機栽培ニンジンの収量・品質の把握	太陽熱消毒により雑草発生が抑制されるとともに、効果が1か月以上持続することが確認された。
3	水稻	南会津町	会津農林事務所 農業振興普及部	中山間地における水田除草機活用による有機水稻の生育特性把握	紙マルチに比べ初期生育が確保され、出穂期・成熟期が早まったものの、収量・品質・食味は同等の結果であり、栽培法上の優劣は確認できなかった。
4	トマト	猪苗代町	会津農林事務所 農業振興普及部	中玉トマトの総合的病害虫防除による収量・品質の向上	モニタリングにより病害虫の発生初期を捉えることで、効果的な防除につなげることができた。収量・品質向上に向けては、防除以外の栽植密度や肥培管理等の更なる改善が必要と考えられた。

No	作物	実証地区	担 当	実証内容	結 果
5	水稻	双葉町	相双農林事務所 双葉農業普及所	双葉地域における 水稻有機栽培の施 肥改善	機械除草を3回行うことで、十分な除草効果を得られることが確認できた。また、堆肥、有機 JAS 適合肥料を用いることで、良質な有機栽培米を生産することが可能と考えられた。
6	ナス	檜葉町	相双農林事務所 双葉農業普及所	ナスにおける有機栽培での長期穫りの実証	堆肥と有機 JAS 適合肥料を用いて、ナスの長期収穫が可能であることが確認できた。また、整枝による病害虫抑制効果は判然としなかったものの、摘葉には一定の効果があると考えられた。

(2) 各種技術研修会等の開催

有機農業技術に関する栽培技術や販路拡大の支援、実需者などの理解促進を図るため、研修会などを開催した。

回	開催月日	場 所	研修名	内 容	参加者数
1	9月2日 3日	農業総合センター	農業理解促進 ミニ講座	有機農業理解促進のためのミニ講座を実施した。	親子 16組 29名
2	9月15日	農業総合センター	農的楽しみセ ミナー	「家庭でできる肥料づくり」に関する講義に加え、ほ かし肥料づくり体験として実習を行った。	15名
3	1月19日	郡山市	郡山女子大学 短期大学部 学生向け理解 促進講座	有機農業及び有機 JAS 認証制度等に関する講義に加 え、生産者を講師として有機農業の取組事例につい て講義を行った。	対象 学生 及び 教員 42名
4	2月20日	農業総合センター	環境にやさしい 農業セミナー	講演 「緑肥等の有機物による土づくりと化学肥料代替」 講師 (国研)農研機構中日本農業研究センター 唐澤 敏彦 氏 また、現地実証ほ成果報告(3か所)を行った。	72名

(3) 有機農産物販売促進支援

有機農産物販売促進活動を、次のとおり実施した。

回	開催月日	場 所	行 事 名
1	10月30日 11月6日	福島市、会津若松市、喜多方 市、南相馬市、磐梯町、檜葉 町、天栄村	福島県有機栽培米生産者見学会7カ所 (米穀小売店 17社・23名)

(4) 有機農業者組織への活動支援

有機農業者組織への活動支援を次のとおり行った。

対象組織名	支 援 内 容	活 動 月 日
郡山環境保全 農業研究会	研修会(グリーンファーム水口視察)	7月29日
	定例会・総会	10月25日 令和5年3月27日

(5) 広報誌「オーガニック通信」の発行

有機農業推進のための各種情報を掲載した広報誌を3回発行した。

- 第1号(6月20日発行) 267部(中通り)
- 第2号(11月07日発行) 267部(中通り)
- 第3号(3月17日発行) 267部(中通り)

(6) 農業総合センター農業短期大学校での有機農業の講義・研修の実施

ア 本科2学年の学生に対して6月から9月にかけて7回の講義を行った。

イ 就農研修(中級)有機農業講座の受講生11名に対して、研修を実施した。

6月8日 有機農業の基礎、ぼかし肥づくり実習 所内

6月15日 水稻有機栽培に関する講義・現地研修 所内、郡山市有機現地ほ場

8月3日 野菜有機栽培に関する講義・現地研修 所内、郡山市有機現地ほ場

VI 県民との交流・情報発信

1 交流事業

(1) 第15回農業総合センターまつり

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、規模を縮小して開催した。

会場	開催月日	入場者数	内 容
本部	9/ 2(金)~ 3(土)	230人 104人(2日) 126人(3日)	技術移転セミナー、家庭菜園セミナー、有機農業理解促進ミニ講座、センターツアー、農業技術相談、サツマイモ収穫体験、UV樹脂細工体験
果樹研究所	9/ 9(金)	78人	技術移転セミナー、ほ場案内、研究成果展示

(2) 農的楽しみセミナー

回	開催日	内 容	講 師	参加人数
1	6/28	ブルーベリー栽培の基礎	南 春菜	14名
2	8/ 2	夏秋野菜の管理方法	石井 詩歩	13名
3	9/15	家庭でできる肥料づくり	柳内 柚香	8名
4	12/ 1	ブルーベリーのせん定	南 春菜	4名

(3) 子どもアグリ科学教室 開催なし

(4) イモ掘り体験学習

月 日	内 容	講 師	保育園名	参加児童数
10/12	サツマイモ収穫体験	企画経営部企画技術科 野田 智美	鉄道弘済会 郡山保育所 (若竹保育園)	19名

(5) 第13回田んぼの学校

※ 郡山市立高倉小学校の5年生児童を対象とした。

回	月 日	内 容	講 師	参加人数
1	5/24	講義「米作りについて1」 実習「田植え」	作物園芸部稲作科 鈴木 幸雄	6名
2	6/14	講義「米作りについて2」 実習「田車による除草作業」	作物園芸部稲作科 鈴木 幸雄	6名
3	10/11	実習「稲刈りとはせ掛け作業」	作物園芸部稲作科 鈴木 幸雄	5名
4	11/ 7	講義・実習「お米の食べ比べ」	作物園芸部品種開発科 松崎 拓真	6名

(6) 農業総合センター農業短期大学の取組

回	月 日	内 容	講 師	参加人数
1	5/26	サツマイモ植付け体験(中島幼稚園)	乗田 和志	85名
2	5/31	サツマイモ植付け体験(認定こども園ポプラの木)	乗田 和志	29名
3	10/13	サツマイモ収穫体験(中島幼稚園)	乗田 和志	88名
4	10/24	サツマイモ収穫体験(認定こども園ポプラの木)	乗田 和志	27名
9	8月~ 11月	講義 矢吹町との連携 実習 フロンティア農園(野菜作り)6回	安田 康二	82名

2 視察見学者の受入状況

月	本部					果樹研究所					畜産研究所				
	団体数				人数	団体数				人数	団体数				人数
	県内	県外		計		県内	県外		計		県内	県外		計	
	国内	国外			国内	国外			国内	国外					
4月	1	2	0	3	15	1	0	0	1	2	0	0	0	0	
5月	1	1	0	2	12	2	1	0	7	9	0	0	0	0	
6月	5	0	0	5	171	1	2	0	7	8	1	0	0	1	
7月	4	4	1	9	77	6	1	0	61	67	1	0	0	1	
8月	13	2	0	15	68	2	1	0	5	7	1	0	0	1	
9月	8	3	0	11	107	3	1	0	8	11	1	0	0	1	
10月	3	7	2	12	163	5	1	0	11	16	0	0	0	0	
11月	3	3	1	7	102	5	0	0	24	29	0	0	0	0	
12月	2	1	0	3	18	2	1	0	9	11	1	0	0	1	
1月	2	1	1	4	13	2	0	0	2	4	0	0	0	0	
2月	3	3	1	7	71	1	2	0	18	19	0	0	0	0	
3月	1	2	2	5	29	0	4	0	51	51	0	0	0	0	
計	46	29	8	83	846	30	14	0	204	234	5	0	0	5	
月	会津地域研究所					浜地域研究所					浜地域農業再生研究センター				
	団体数				人数	団体数				人数	団体数				人数
	県内	県外		計		県内	県外		計		県内	県外		計	
	国内	国外			国内	国外			国内	国外					
4月	2	1	0	3	25	0	0	0	0	0	1	0	0	1	
5月	1	1	0	2	3	0	0	0	0	0	1	0	0	1	
6月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
7月	1	1	0	2	23	1	0	0	1	1	1	0	0	1	
8月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	
9月	0	1	0	1	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
10月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	
11月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
12月	0	1	0	1	3	0	0	0	0	0	0	1	0	1	
1月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	2	
2月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
3月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	
計	4	5	0	9	59	1	0	0	1	1	6	9	0	9	

注1) 人数は個人見学者と団体見学者の合計。畜産研究所は沼尻分場を含む。

注2) オンラインツアーへの対応含む(本部)。

3 施設の利用状況

(1) 多目的ホール、大会議室

ア 件数及び利用者数

月	農業関係		一般		県関係		合計	
	件数	人数	件数	人数	件数	人数	件数	人数
4月	4	160	8	467	5	195	17	822
5月	7	605	18	1,169	8	410	33	2,184
6月	14	620	22	1,510	8	255	44	2,385
7月	8	360	15	925	10	800	33	2,085
8月	2	100	19	1,370	3	136	24	1,606
9月	2	110	10	607	6	300	18	1,017
10月	2	200	24	1,978	138	335	164	2,513
11月	3	65	15	1,223	13	815	31	2,103
12月	1	40	16	1,162	8	350	25	1,552
1月	0	0	6	482	12	660	18	1,142
2月	9	554	7	565	8	355	24	1,474
3月	6	390	4	273	6	320	16	983
合計	58	3,204	164	11,731	225	4,931	447	19,866

イ 会場別（多目的ホール）

月	農業関係		一般		県関係		合計	
	件数	人数	件数	人数	件数	人数	件数	人数
4月	0	0	3	230	4	185	7	415
5月	4	305	9	685	3	190	16	1,180
6月	4	200	14	1,175	1	25	19	1,400
7月	3	200	7	450	7	620	17	1,270
8月	1	50	9	710	1	80	11	840
9月	2	110	3	330	4	200	9	640
10月	2	200	15	1,243	133	170	150	1,613
11月	1	15	9	923	8	640	18	1,578
12月	1	40	10	917	2	130	13	1,087
1月	0	0	3	400	6	350	9	750
2月	4	330	4	340	4	260	12	930
3月	2	150	2	123	3	260	7	533
合計	24	1,600	88	7,526	176	3,110	288	12,236

ウ 会場別（大会議室）

月	農業関係		一般		県関係		合計	
	件数	人数	件数	人数	件数	人数	件数	人数
4月	4	160	5	237	1	10	10	407
5月	3	300	9	484	5	220	17	1004
6月	10	420	8	335	7	230	25	985
7月	5	160	8	475	3	180	16	815
8月	1	50	10	660	2	56	13	766
9月	0	0	7	277	2	100	9	377
10月	0	0	9	735	5	165	14	900
11月	2	50	6	300	5	175	13	525
12月	0	0	6	245	6	220	12	465
1月	0	0	3	82	6	310	9	392
2月	5	224	3	225	4	95	12	544
3月	4	240	2	150	3	60	9	450
合計	34	1,604	76	4,205	49	1821	159	7,630

(2) 開放実験室 (利用件数)

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
件数	0	0	0	0	1	1	2	1	0	0	0	4	9

(3) 図書室

ア 受入れ書籍類

項目	冊数
図書類	71冊
雑誌類	189冊
資料類	112冊

イ 県民貸出冊数

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
貸出者数	3	5	6	2	3	7	7	10	8	6	2	3	62
貸出冊数	4	7	10	4	5	15	24	26	14	9	2	7	127

4 研究成果の発表

(1) 学会等研究発表 その1

No	所 属	発表、講演者	演 題	名 称 等	年 月
1	安全農業推進部 生産環境部	金澤 優紀 青木 大祐 吉田 昂樹 有賀 雅喜 東條 浩幸	福島県におけるイネドロオイムシのチアマトキサム感受性低下と要因の推定	第76回北日本病害虫研究発表会	2023.2
2	企画経営部	池田 健一	福島県における農業用水路管理の現状と課題	2022年度(第71回)農業農村工学会大会	2022.8
3	生産環境部	大竹 裕規 堀越 紀夫	積雪地域におけるクロルピクリン燻蒸剤の冬期間処理の検証	令和4年度日本植物病理学会東北部会	2022.9
4		堀越 紀夫 穴戸 邦明 鈴木 洋平 芳賀 紀之 大竹 裕規 平子 喜一	キュウリホモプシス根腐病菌の土壌中での残存期間(続報)	令和4年度日本植物病理学会東北部会	2022.9
5		前原 瞳 大竹 裕規 山田 真孝	福島県におけるダイズ紫斑病菌のアゾキシストロピン剤感受性	第76回北日本病害虫研究会	2023.2
6		大竹 裕規 堀越 紀夫	トマトかいよう病菌の越冬源と次作における伝染源	第76回北日本病害虫研究会	2023.2
7		大竹 裕規 堀越 紀夫	トマトかいよう病菌は農業用資材上で越冬し次年度の伝染源となる	令和5年度日本植物病理学会大会	2023.3
8		堀越 紀夫 宮崎麻里子 大竹 裕規	トルコギキョウ斑点病に対する各種粒剤の防除効果	令和5年度日本植物病理学会大会	2023.3
9		齋藤 正明	福島県内の農地における放射性物質に関する研究(第54報)玄そばへの放射性セシウム移行特性の解析	日本土壌肥料学会2022年度東京大会(ポスター発表)	2022.9
10		古川 鞠子	アスパラガスに含まれる機能性成分への加熱調理の影響	第70回質量分析総合討論会	2022.6
11		古川 鞠子	アスパラガスに含まれるアミノ酸とその局在及び加熱調理による含有量の変化	園芸学会令和4年度秋季大会	2022.9
12		作物園芸部	三田村春香 秋葉 未歩 宮下 聡美	福島県イチゴ新品種「福島 ST14号」の育成	園芸学会令和3年度秋季大会(ポスター発表、オンライン)
13	小林 恭子		日本の陸稲品種における深根性育種材料の探索	日本作物学会第254回講演会(ポスター発表)	2022.9
14	小林 恭子		水田における陸稲と水稲の耐干性に対する評価方法の検討	日本作物学会第255回講演会(ポスター発表)	2023.3
15	笹川 正樹		福島県会津地方における水稲初冬直播き栽培での前年産種子利用の検討	日本作物学会第254回講演会(口頭発表)	2022.9
16	鈴木 寛人		ドローンリモートセンシングによる福島県育成水稲品種「福笑い」の生育指標値の設定	日本作物学会第254回講演会(口頭発表)	2022.9
17	果樹研究所	高橋 佳大 中村 淳 中村 傑	ツヤハダゴマダラカミキリのリンゴに対する寄生リスク調査及び街路樹における発生消長	第76回北日本病害虫研究発表会	2023.2
18		藤田 剛輝	ナン黒星病に対するマンデストロピン水和剤の果実における予防効果	植物病理学会九州部会	2022.11
19		藤田 剛輝 七海 隆之	福島県におけるナン黒星病に対する秋期防除の開始時期と削減体系の検証	第76回北日本病害虫研究発表会	2023.2

(1) 学会等研究発表 その2

No	所属	発表、講演者	演 題	名 称 等	年 月
20	果樹研究所	藤田 剛輝	福島県における梅雨期以降のニホンナシ ‘豊水’果実の黒星病に対する感受性	第70回関東東山病害虫 研究発表会	2023.3
21		藤田 剛輝	ナシ黒星病に対するインピルフルキサム水 和剤の果実における残効性	日本農薬学会第48回大 会	2023.3
22		藤田 剛輝	ナシ黒星病に対する各種 QoI 剤の果実 における防除効果と強化防除体系の検証	日本植物病理学会大会	2023.3
23		日下部翔平 七海 隆之	モモせん孔細菌病春型枝病斑からの病原 細菌の漏出期間	日本植物病理学会東北 部会	2022.9
24		日下部翔平	福島県におけるブドウ黒とう病及びブドウ 晩腐病の防除対策強化の検討	第76回北日本病害虫 研究発表会	2023.2
25		日下部翔平	新規剤を組み入れたモモせん孔細菌病の 防除体系の効果	日本植物病理学会大会	2023.3
26		中村 傑 吉田 昂樹 高橋 佳大 中村 淳	福島県会津地域のリンゴ栽培における銅 剤の使用を考慮したアシノナビル水和剤 使用時期の検証	第76回北日本病害虫 研究発表会	2023.2
27		中村 傑 吉田 昂樹 高橋 佳大 中村 淳	福島県県北地域のナシ栽培におけるミヤ コバンカー®及び天敵保護防除体系がハ ダニ類及びカブリダニ類に及ぼす影響	第67回日本応用動物昆 虫学会大会	2023.3
28	佐藤寛人	ニホンナシの新一文字型樹形及びジョイント 型樹形は定植 10 年目を経過しても多 収を維持できる	第65回 東北農業試験 研究発表会	2022.8	
29	畜産研究所	松田 祐輝	本県における繁殖和牛生体放射能測定 の取組み	第60回福島県獣医 畜産技術総合発表会	2022.7
30		松崎 稔史	大規模酪農家の経営実態調査	第60回福島県獣医 畜産技術総合発表会	2022.7
31	会津地域研究所	青木 循 林 和信 国立 卓生 木島 悦男 佐野 修一 渡邊 善仁 江川 孝二	遠隔操作式高能率法面草刈機の開発－ 試作 2 号機の性能試験－	第80回農業食料工学会 年次大会	2022.9
32		松木 伸浩 吉岡 明良 田淵 研 遠藤わか菜 三田村敏正	原子力災害に伴う営農中断が水田におけ るアシナガガモ類の生息に及ぼす影響	日本蜘蛛学会第54大会	2022.8
33		松木 伸浩 吉岡 明良 田淵 研 遠藤わか菜 三田村敏正	原子力災害に伴う営農中断が水田におけ るカエル類の生息に及ぼす影響	第76回北日本病害虫研 究発表会	2023.2
34	浜地域研究所	Toshimasa MITAMURA Wakana ENDO Nobuhiro MATSUKI Akira YOSHIOKA and Ken TABUCHI	The fauna of aquatic insects in the rice paddy fields on farming interruption and decontamination after an accident at the TEPCO Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant	XXVI International Congress of Entomology	2022.7
35		三田村敏正 高橋 賢臣 吉田 裕介 東崎昭弘 本多 貴之	天蚕(ヤママユ)が産出する絹糸への放射 性セシウムの濃縮動態解明—福島県浜通 り地域における天蚕絹糸の評価—	第27回日本野蚕学会大 会	2022.9

(1) 学会等研究発表 その3

No	所属	発表、講演者	演 題	名 称 等	年 月
36	浜地域農業 再生研究セ ンター	岡田 将幸 百田 佐多 生吉田 武 谷垣 実 齋藤 隆 平山 孝 佐藤 優平 浅枝 諭史 星 典宏	土壌放射性セシウムの簡易深度分布測定法	第 60 回アイトープ・放射線研究発表会	2023.7
37		吉田 雅貴 菅野 拓郎	「ふくひびき」の湛水直播栽培における苗立数が収量へ及ぼす影響	第 65 回東北農業試験研究発表会	2022.8
38		中村 大輔 吉田 雅貴 小坂井千夏 藤本 竜輔 星 典宏 竹内 正彦	特定復興再生拠点区域周辺におけるアライグマの行動特性の把握	日本哺乳類学会 2022 年度大会	2022.8
39		稲葉 修武 山下 善道 佐藤 優平 内藤 裕貴 星 典宏	福島県営農再開地域における熟練生産者のハウス環境管理の知識・技能の可視化に関する一考察	第 58 回東北農業経済学会・新潟大会	2022.8
40		小椋 智文 木幡 裕介 浅井 元朗	福島県浜通りのタマネギ秋まき移植栽培におけるタマネギ生育期の除草剤処理によるカラシナ防除効果	第 24 回東北雑草研究会	2022.9
41		木幡 裕介 小椋 智文 浅井 元朗	秋まきタマネギ生育期のネズミムギに対する各種イネ科用除草剤の防除効果	第 24 回東北雑草研究会	2022.9
42		佐藤 優平 山下 善道 内藤 裕貴 稲葉 修武 星 典宏	営農再開地域のストック栽培における通い農業支援システムを活用した栽培状況の可視化と評価	一般社団法人園芸学会令和 4 年度秋季大会	2022.9
43		久保 堅司 八戸 真弓 齋藤 隆 菅野 拓郎 浅枝 諭史 佐藤 孝	ヘアリーベッチおよびクリムゾンクローバへの放射性セシウムの移行性	日本土壌肥料学会 2022 年度東京大会	2022.9
44		平山 孝 齋藤 正明	福島県内の農地における放射性物質に関する研究(第 57 報)ラッカセイの放射性セシウム吸収特性	日本土壌肥料学会 2022 年度東京大会	2022.9
45		松岡 宏明 井倉 将人	福島県内の農地における放射性物質に関する研究(第 58 報)低カリ条件下での水稻ポット栽培 3 作から評価した土壌改良資材の放射性セシウム吸収抑制効果の持続性	日本土壌肥料学会 2022 年度東京大会	2022.9
46		浅枝 諭史 齋藤 隆 久保 堅司 脇坂 裕昭 三本菅 猛	福島県内の農地における放射性物質に関する研究(第 59 報)籾殻くん炭を活用した塩化カリ代替効果の検証	日本土壌肥料学会 2022 年度東京大会	2022.9
47		平山 孝 遠藤 央士 平 敏伸	エゴマの手刈りにおける収穫可能時期	日本作物学会第 254 回講演会	2022.9
48		松岡 宏明	2021 年現地調査による除染後水田内での水稻生産性と玄米への放射性セシウム移行の傾向	第 24 回「環境放射能」研究会	2023.3
49		佐藤 優平 浅井 元朗	営農再開地域の花木ほ場におけるグリホサート抵抗性オヒシバの確認と防除効果	第 25 回東北雑草研究会	2022.3

(1) 学会等研究発表 その4

No	所属	発表、講演者	演 題	名 称 等	年 月
50	浜地域農業再生研究センター	三本菅 猛 小椋 智文 浅井 元朗	グリホサートカリウム塩液剤及び塩素酸粒剤による保安全管理水田の多年生雑草防除効果	第25回東北雑草研究会	2023.3

※ 斜体字は当機関外所属

(2) シンポジウム等講演

No	所属	講演者	内 容	名 称 等	年 月
1	安全農業推進部	二宮 朋子	福島県における農林水産物の緊急時環境放射線モニタリングの取組	日本作物学会第254回講演会公開シンポジウム「被災農耕地をみて地域と一緒に考える農業と作物生産」(ハイブリット開催)	2022.9
2		二宮 朋子	福島県農業総合センターにおける放射能分析の取組み	第232回農林交流センターワークショップ「食品を対象とした放射能分析(初級者向け)」(オンライン)	2022.12
3	作物園芸部	三田村春香	「福島県のイチゴ」	新宿高野フルーティライフ教室「COT ONOWA」	2023.1
4		三田村春香	「福島県のイチゴ」	新宿高野フルーティライフ教室	2023.2
5	果樹研究所	中村 傑	果樹病虫害とその被害	福島大学 農学群 食農学類 講義:「病虫害管理学」	2023.7
6		志村浩雄	福島県における果樹に関する研究について(効率・軽労化及び高品質果実生産を目指した技術開発)	2022年度日本農作業学会秋季大会	2022.9
7		佐久間宣昭	果樹栽培における凍霜害対策の現状と気候変動への対応	富山県気候変動適応セミナー	2023.2
8	畜産研究所	矢内 伸佳	家畜育種とゲノミック評価	福島大学 農学群 食農学類 講義:「畜産学概論」	2022.7
9		木村 有希	福島県の飼料作物の現状と課題	福島大学 農学群 食農学類 講義:「飼料資源学」	2022.7
10		齋藤 大士	福島県の肉用牛の現状と展望	福島大学 農学群 食農学類 講義:「飼料資源学」	2022.7
11	浜地域研究所	三田村敏正	東電福島第一原発事故による被災地域における営農再開後の水田生物	令和4年度第2回環境動態部門セミナー	2022.8
12		三田村敏正	福島県における外来カミキリムシの生息状況と対策・課題	外来カミキリムシに関する市町村等担当者会議	2022.12
13	浜地域農業再生研究センター	平山 孝	除染後農地の問題点と農業復興に向けた取り組み	令和4年度第2回環境動態部門セミナー	2022.8
14		松岡 宏明	原子力災害から復興のための除染後水田での家畜ふん堆肥を活用した土づくりの実証	第10回SOFIX実践・事例研究会	2022.10
15		平山 孝	除染後農地の保安全管理技術	福島県営農再開支援事業「除染後農地の保安全管理に関する放射性物質対策」講座	2023.2

(3) 学会誌等投稿

No	所属	著者	題名	発表誌名	巻(号)頁	年月
1	生産環境部	前原 瞳 山田 真孝 藤 晋一	福島県におけるイネばか苗病菌の プロクロラズ剤に対する感受性低下	北日本病害虫 研究会報	第73号 P61-64	2022.12
2		大竹 裕規 堀越 紀夫	トマトかいよう病に対するカーバナ トリウム塩液剤の防除効果(講要)	北日本病害虫 研究会報	第73号 P155(講 要)	2022.12
3		岡田 花音 松木 伸浩 堀越 紀夫	福島県県南地方に寄生するコナジ ラミ類の薬剤感受性	北日本病害虫 研究会報	第73号 P155(講 要)	2022.12
4		大竹 裕規 堀越 紀夫	積雪地域におけるクロルピクリン燻 蒸剤の冬期間処理の検証	日本植物病理学会 東北部会報	89巻1号 P44-45	2023.2
5		堀越 紀夫 穴戸 邦明 鈴木 洋平 芳賀 紀之 大竹 裕規 平子 喜一	キュウリホモプシス根腐病菌の土壌 中での残存期間(続報)	日本植物病理学会 東北部会報	89巻1号 P45	2023.2
6	作物園芸部	横田 祐未 八木田靖司 石井 試歩 大竹 祐一 白木 一英 室 崇人 松尾健太郎	福島県のタマネギ秋播き直播栽培 における雑草防除体系の開発	園芸学研究	21(2):22 9-235.	2022.5
7		鈴木 健策 柏木 純一 中島 体賢 笹川 正樹 ほか	水稻の初冬直播き栽培における播 種時期と種子コーティングが出芽 率に及ぼす影響の広域評価	日本作物学会 紀事	91(4):2 91-302	2022.10
8	果樹研究所	藤田 剛輝	福島県における梅雨期以降のニホ ンナシ‘幸水’果実の黒星病に対す る感受性と重要防除時期	関東東山病害 虫研究会報	第68集	2022.12
9	畜産研究所	鈴木 庄一 橋本 武 阿部 正彦 沼 玲子 佐藤 妙子 酒井 隆	エゴマ搾油粕の給与が「会津地鶏」 の肉中の脂肪酸組成に及ぼす効果	東北農業研究	第74号 P53-54	2023.3
10	会津地域研究所 浜地域研究所	Akira YOSHIOKA Toshimasa MITAMURA Nobuhiro MATSUKI et.al	Camera-trapping estimates of the relative population density of Sympetrum dragonflies: Application to multihabitat users in agricultural landscapes	PeerJ	DOI:10. 7717/pe erj.148 81	2023.2
11	浜地域農業 再生研究セ ンター	信濃 卓郎 浅枝 諭史 八代 沙絵子 齋藤 隆 丸山 隼人 根本 知明 八戸 真弓	Radioactive Cs transfer to vegetables after the FFNPP accident	Soil Science and Plant Nutrition	Vol.69, 2023- Issue 1	2022.12
12		佐藤 孝 齋藤 隆 菅野 拓朗 安田 貴則 三本菅 猛 松岡 宏明 山田 夏子 内田 珠央 小野寺梨紗 間世田 安希 田中 草太 金田 吉弘 高階 史章	福島県除染後農地におけるマメ科 緑肥を用いた土壌改良	復興農学誌	3巻1号	2023.1

No	所属	著者	題名	発表誌名	巻(号)頁	年月
13	浜地域農業再生研究センター	小椋 智文 木幡 裕介 浅井 元朗	福島県相双地域のタマネギ秋まき移植栽培におけるタマネギ生育期の除草剤処理によるカラシナ防除効果	東北雑草研究会報誌「東北の雑草」	第22号 P14-17	2023.6

※ 斜体字は当機関外所属

(4) 雑誌等投稿

No	所属	著者	題名	発表誌名	巻(号)頁	年月
1	有機農業推進室	岡崎 徹哉	中山間地における水稲スマート有機栽培体系の実証	JATAFF ジャーナール	Vol.10 No.11 P8-12	2022.11
2	作物園芸部	三田村春香	福島県オリジナルイチゴ品種‘ゆうやけベリー(福島 ST14号)’の育成	施設と園芸	NO.200 冬2023 P41	2023.1
3		小林 恭子 佐藤 弘一 大寺 真史 吉田 直史 佐々木 園子 朽木 靖之 齋藤 隆 菅野 拓朗 菊地 伸広 中島 奈津子 鈴木 賢二	酒造好適米新品種「福乃香」の育成	農業および園芸	第97巻 第9号 p774-780	2022.9
4		小林 恭子 川島 史寛 大寺 真史 佐藤 弘一 吉田 直史 菅野 拓朗	水稲新品種「福笑い」の育成	農業および園芸	第97巻 第10号 p902-908	2022.10
5		横田 祐未	夏秋トマトの「側枝2本仕立てセル苗」の直接定植による低コスト化	農耕と園芸	2022 冬号 P28-31	2022.11
6		藤田 剛輝	乗用草刈り機で落ち葉を粉碎、ナシの黒星病が減る	現代農業	2023年1月号	2022.12
7	果樹研究所	日下部翔平	福島県におけるモモせん孔細菌病の発生動向と防除対策	果実日本	2023年 vol.78	2023.4
8	佐藤寛人	福島県における二ホンナシ栽培の早期成園化新技術の実証	果樹種苗	第168号	2022.11	
9	畜産研究所	木村 有希	ペレニアルライグラスの新たな奨励品種「夏ごしペレ」	畜産福島	第633号	2022.4
10		妹尾 毅	セリで導入した去勢肥育素牛での短期肥育	畜産福島	第634号	2022.7
11		堀切 眞太郎	「勝忠安福」去勢産子は3ヶ月早く出荷しても牛肉中オレイン酸含量が高い	畜産福島	第635号	2022.9
12		橋本 武	「ふくしま赤しゃも」の能力は維持・継承されている	畜産福島	第636号	2022.11
13	妹尾 毅	肥育前期に濃厚飼料を多給した去勢肥育素牛での短期肥育	畜産福島	第637号	2023.1	
14	浜地域研究所	吉田 祐介 三田村敏正 高橋 賢臣 ほか	天蚕(ヤママユ)が産出する繭糸への放射性セシウムの影響の解明	野蚕	No.90 p.5-6.	2022.12
15	浜地域研究所	三好 博子	春まきたまねぎと夏まきブロッコリーの輪作体系	グリーンレポート	2022年8月号 P10-11	2022.8

※ 斜体字は当機関外所属

※ 畜産福島は著者名を所属として投稿

5 刊行物

刊行物名	発行年月	発行部数
令和3年度農業総合センター業務年報	2022. 9	※
福島県農業総合センター研究報告 放射性物質 対策特集第3号	2023. 3	120
令和4年度福島県農業総合センター研究成果集	2023. 3	※
農業総合センターだより 第5号	2022. 6	7,500
第6号	2022.11	7,500

※ 農業総合センターホームページに掲載

6 主要作物の生育情報の提供

内容	提供回数	月 日
作況情報※	18	6/7、6/14、6/21、6/28、7/5、7/12、7/19、7/26、8/9、 8/16、8/23、8/30、9/6、9/13、9/20、9/27、10/4、2/20
	4	7/27、8/16、9/1、1/12
	5	R3年産 12/17、2/16、3/18、3/24、4/11、5/6、8/27 R4年産 12/20、2/15、3/7、3/25、4/4、5/6、8/17
果樹の生育概況	21	R2 4/1、4/9、4/20、4/30、5/17、6/1、6/15、7/1、7/15、 8/2、8/16、9/1、9/15、10/1、10/15、11/1、12/2、 R3 3/1、(3/10)、(3/23)

※ 農業総合センターホームページに掲載

7 インターネットによる情報提供

(1) 農業総合センターホームページにおいて、各種技術情報、交流事業の情報等の提供を行った。
ホームページアクセス数(トップページアクセス数)

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
1,642	1,630	1,834	1,733	1,495	1,460	1,352	1,142	811	960	1,103	1,395	16,557

※1 ホームページのアクセス件数はボット(プログラムによる自動アクセス)を除いた数としている。

(2) 農業総合センターホームページ内に「ラウンド農ふくしま Web」を設け、これまで広報誌で発信していた業務やイベント紹介等の情報発信を行った。

R4.4月～R5.3月 掲載記事数 15件、ページアクセス数合計 466

(3) 農業総合センター浜地域研究所 Facebook (<https://www.facebook.com/nogyocentre.hama/>)において、情報発信を行った。

令和4年4月～令和5年3月 掲載記事数 3件、リーチ数合計 237

8 マスメディアによる報道 その1

※ 媒体 新：新聞、雑：雑誌、テ：テレビ、イ：インターネット、他：その他

No	媒体	掲載・放送月日	掲載紙・報道局	報道内容	取材対応等
1	新	4/ 6	日本農業新聞	桃など凍霜害防止へ 農業総合センター危険度推定シート作成	果樹研究所
2	新	4/10	福島民友新聞	県、果樹凍霜害危険度予測システム公開	果樹研究所
3	新	4/12	福島民報新聞	5学科に45人入校 アグリカレッジ福島	農業短期大学校
4	新	4/17	福島民報新聞	就農へ学び誓う アグリカレッジ長期研修開講式	農業短期大学校
5	新	4/18	福島民友新聞	独自品種 開発、改良へ 農業総合センター所長	企画経営部
6	新	4/18	日本農業新聞	「丁寧な代かき」による雑草イネの防除	作物園芸部
7	新	4/19	日本農業新聞	福島県果樹研入所式 長期研修生学び誓う	果樹研究所
8	テ	4/22	NHK総合	福島県イチゴ新品種「福島ST14号」について	作物園芸部
9	新	4/26	日本農業新聞	福島県農業短期大学校 決意胸に45人入校	農業短期大学校
10	イ	5月	あがらんしょ福島キャンペーン	福島県オリジナル水稲品種「福笑い」について	作物園芸部
11	テ	5/ 4	福島テレビ	おいしい牛肉の生産に向けた新たな取り組み～ゲノミック評価の活用～	畜産研究所
12	新	5/15	福島民友新聞	県産カスミソウ欧州市場狙う 空輸前の温度・照明県実証へ	会津地域研究所
13	新	5/18	朝日新聞 福島民報新聞 福島民友新聞 河北新報	内堀知事との「福、笑い」田植えへの参加	農業短期大学校
14	新	5/19	日本農業新聞	福島県農業総合センター 奨励品種植え付け	作物園芸部
15	新	5/19	日本農業新聞	「福、笑い」飛躍に期待 知事、学生らが田植え	農業短期大学校
16	新	5/20	日本経済新聞	郡山で産官学事業 続々 エゴマ種子自動選別機製品化	企画経営部
17	新	5/21	福島民友新聞	環境適したコメ調査 農業総合センター坂下で田植え	会津地域研究所
18	新	5/23	福島民報新聞	1000品種苗植えおいしく育て 郡山で県農業センター大田植え	作物園芸部
19	新	5/24	日本農業新聞	各地で田植え 農業総合センター会津地域研究所で田植え	会津地域研究所
20	新	5/25	福島民友新聞	農業楽しく実践 農的楽しみセミナー参加募集	企画経営部
21	新	5/26	福島民報新聞	高倉小児童、田植え挑戦 田んぼの学校はじまる	企画経営部
22	新	5/26	日本農業新聞	小学生が田植え体験 田んぼの学校	企画経営部
23	新	5/29	福島民友新聞	泥んこ 田植えに熱中 田んぼの学校	企画経営部
24	新	6/ 5	福島民友新聞	水稲奨励品種調査で40種の苗を植え付け	作物園芸部
25	新	6/10	福島民報新聞	豊作願い学生が田植え アグリカレッジ福島 学校内水田で	農業短期大学校
26	新	6/11	日本農業新聞	福島農業短期大 伝統の「植付祭」	農業短期大学校
27	新	6/17	日本農業新聞	流通に触れて 直売実習始まるアグリカレッジ福島	農業短期大学校
28	イ	7/ 2	YouTube	首都圏等消費者交流事業(リアルツアー)ふくしまの肉コース	企画経営部 安全農業推進部
29	新	7/ 4	福島民友新聞	ブルーベリー栽培注意点などを解説 郡山でセミナー開講	企画経営部
30	新	7/ 5	日本農業新聞	育てた野菜や花学生が直売実習アグリカレッジ福島	農業短期大学校
31	新	7/10	日本農業新聞	ブルーベリーの栽培でセミナー	企画経営部
32	新	7/13	福島民友新聞	田植えの作業を省力化 乾田直播栽培を解説 南相馬でセミナー	浜地域研究所
33	イ	7/13	「福、笑い」通信 第2号	農業総合センターからの生産技術ポイント	作物園芸部

8 マスメディアによる報道 その2

※ 媒体 新：新聞、雑：雑誌、テ：テレビ、イ：インターネット、他：その他

No	媒体	掲載・放送日	掲載紙・報道局	報道内容	取材対応等
34	新	7/14	福島民報新聞	外国人研修員郡山で稲作学ぶ JICA	企画経営部
35	新	7/14	福島民友新聞	水田周辺の生物を観察 郡山「田んぼの学校」番外編	企画経営部
36	新	7/19	日本農業新聞	JICA外国人研修員 福島で水稲栽培学ぶ	企画経営部
37	新	7/23	福島民報新聞	「乾田直播」理解深める 南相馬で技術向上・普及セミナー	浜地域研究所
38	イ	7/24	関西圏等消費者交流事業	福島県オリジナル水稲品種「福笑い」について	作物園芸部
39	他	7/24 9/24 10/29 11/19 12/10	近畿日本ツーリスト株式会社 福島支店SNS	関西圏等消費者交流事業(オンラインツアー)	企画経営部 安全農業推進部
40	新	7/29	日本農業新聞	アグリカレッジオープンキャンパス高校生が見学	農業短期大学校
41	テ	7/29	福島テレビ	テレポートプラスの斉藤恭紀気象予報士のコーナーに2学年4名出演	農業短期大学校
42	新	8/ 4	福島民報新聞	県産米の作柄解析試験で不備	会津地域研究所
43	新	8/ 7	日本農業新聞	夏秋野菜の整枝市民に 農的楽しみセミナー	企画経営部
44	新	8/11	福島民報新聞	2022年産米抽出検査開始	農業総合センター
45	テ	8/12	福島放送	小ギクの電照栽培について	作物園芸部
46	新	8/13	日本農業新聞	町民体験農園 今年も開園	農業短期大学校
47	新	8/17	日本農業新聞	トルコギキョウ有望品種を紹介 技術移転セミナー	作物園芸部
48	新	8/21	福島民友新聞	来月、農業総合センターまつり	企画経営部
49	新	8/26	福島民友新聞	自動運転稲刈りコンバイン実演 学生の研修も	農業短期大学校
50	雑	9月号	Style郡山	収穫の秋到来！Do you 農 ふくしまの農業	企画経営部
51	新	9/ 6	日本農業新聞	アグリカレッジ農産物加工で研修	農業短期大学校
52	新	9/ 7	福島民友新聞	収穫体験、農業にふれる	企画経営部
53	新	9/ 8	日本農業新聞	サツマイモ掘り農業に親しもう 福島県農業総合センターまつり	企画経営部
54	新	9/15	福島民報新聞	果樹栽培の新技術発表 県農業総合センター 福島でセミナー	果樹研究所
55	新	9/15	日本農業新聞	福島県農業総合センターがセミナー 桃、梨の栽培省力化	果樹研究所
56	新	9/17	福島民友新聞	モモ、ナシの栽培技術紹介	果樹研究所
57	テ	9/18	福島中央テレビ	ごじテレSun「農業総合センターまつりに行ってみた」	企画経営部
58	新	9/19	福島民友	福島県農業総合センター技術移転セミナーが開催されました	果樹研究所
59	新	9/21	日本農業新聞	農業の生産現場 農高生が見学	農業短期大学校
60	イ	9/22	「福、笑い」通信 第3号	農業総合センターからの生産技術ポイント	作物園芸部
61	新	10/ 1	読売新聞	復興プレゼン事業の紹介	作物園芸部
62	新	10/ 1	福島民報新聞	内堀知事との「福、笑い」収穫式への参加	農業短期大学校
63	新	10/ 6	福島民友新聞	飼料トウモロコシ県内生産拡大図る 実証試験で品種・栽培技術検証	畜産研究所
64	イ	10/ 7	カルチベオンライン	カルチベ取材班現場参上 農業試験場の“文化祭！”福島県農業総合センターまつりレポート	企画経営部
65	新	10/ 9	福島民報新聞	県畜産研 優等賞9位	畜産研究所
66	新	10/15	開拓情報	秋まき移植タマネギの灌水による収量向上について	作物園芸部

8 マスメディアによる報道 その3

※ 媒体 新：新聞、雑：雑誌、テ：テレビ、イ：インターネット、他：その他

No	媒体	掲載・放送日	掲載紙・報道局	報道内容	取材対応等
67	新	10/17	福島民友新聞	サツマイモ掘りで笑顔	企画経営部
68	新	10/22	日本農業新聞	傾斜地の草刈り楽々 福島県農業総合センター リモコン操作を実演	会津地域研究所
69	雑	11月号	CJ monmo	あだたらの里との連携による「福, 笑い」の作付け	農業短期大学校
70	新	11/ 1	農機新聞	水路管理省力化ロボット アグリビジネス創出フェア 展示内容	企画経営部
71	新	11/ 2	農業共済新聞	令和3年度参考成果「リモコン草刈機と際刈アタッチを使うと電気柵下の草刈りが容易に行える」	企画経営部
72	新	11/ 3	日本農業新聞	梨の黒星病対策学ぶ 福島県 落葉粉碎法を紹介	果樹研究所
73	新	11/10	読売新聞	香港駐東京代表知事にあいさつ	農業総合センター
74	新	11/10	福島民報新聞	県産農産物の安全性PR	農業総合センター
75	新	11/10	福島民友新聞	香港駐東京貿易代表来県し内堀知事表敬	農業総合センター
76	新	11/10	日本農業新聞	福島県農業短大生三重の学生と交流	農業短期大学校
77	新	11/11	福島民報新聞	スマート農業南相馬で学ぶ(スマート農業実証プロジェクト現地勉強会)	企画経営部
78	新	11/18	日本農業新聞	千歯こき体験 福島で田んぼの学校	企画経営部
79	新	11/20	福島民友新聞	コメ食べ比べ違いを確認	企画経営部
80	新	11/22	日本農業新聞	今年の実りに感謝 アグリカレッジ福島が収穫祭	農業短期大学校
81	新	11/23	朝日新聞	「スマート農業」成果と課題(スマート農業実証プロジェクト現地勉強会)	企画経営部
82	テ	11/23	福島テレビ	キビタンGO! 果樹王国ふくしま ~おいしいナシ栽培に向けて~	果樹研究所
83	イ	11/27	Style 郡山 (WORLDマガジン)	Do You Know Anything About Agriculture in Fukushima? -Fukushima Agricultural Technology Centre: The Pride of Fukushima!	農業総合センター
84	新	12/ 4	福島民友新聞	避難地域の農業支援取り組み成果を報告 郡山で有識者懇談会	企画経営部
85	イ	12/12	YouTube	「福島花フェスプロジェクト2022」アンスリウム収穫体験	農業短期大学校
86	新	12/15	日本農業新聞	スマート農業の中山間活用探る	農業総合センター
87	新	12/16	読売新聞	「ゆうやけベリー」セミナー	作物園芸部
88	新	12/20	日本農業新聞	品種特性、こつ生産者が学ぶ 福島県がセミナー	作物園芸部
89	新	12/22	福島民友新聞	「ゆうやけベリー」特徴紹介	作物園芸部
90	テ	12/24	福島テレビ	福島県イチゴ新品種「ゆうやけベリー」について	作物園芸部
91	新	12/28	日本農業新聞	農業技術10大ニュース 急傾斜高速草刈り	農業総合センター
92	新	1/ 6	福島民友新聞	本校産青春GAP米 大阪で店舗実演販売	農業短期大学校
93	イ	1/ 7	ANI New	Fukushima maintains safety measures after 2011 earthquake	安全農業推進部
94	新	1/13	福島民報新聞	本校産青春GAP米 大阪で店舗実演販売	農業短期大学校
95	他	1/16	TOKYO FM	福島県イチゴ新品種「ゆうやけベリー」について	作物園芸部
96	新	1/31	農業共済新聞	水稻 高品質安定生産のための育苗技術	作物園芸部
97	新	2/ 6	読売新聞	営農再開 トウモロコシで	畜産研究所
98	新	2/18	福島民報新聞	防除10月上旬～11月上旬 ナシ黒星病県が有効時期示す	果樹研究所
99	新	2/18	福島民報新聞	アスバラガスの研究成果も発表	生産環境部
100	新	2/18	福島民報新聞	防除10月上旬～11月上旬 ナシ黒星病 県が有効時期示す	果樹研究所

8 マスメディアによる報道 その4

※ 媒体 新：新聞、雑：雑誌、テ：テレビ、イ：インターネット、他：その他

No	媒体	掲載・放送日	掲載紙・報道局	報道内容	取材対応等
101	新	2/18	福島民友新聞	トラクターで線量測定	浜地域農業再生研究センター
102	新	2/18	福島民友新聞	来月 研究成果を発表	企画経営部
103	他	2/21	ラジオ福島	農業短期大学校におけるGAPの取り組みについて	農業短期大学校
104	新	3/ 1	日本種苗新聞	イチゴ新品種「ゆうやけベリー(出願品種名 福島ST14号)」及びリンドウ新品種「天の川」の紹介	作物園芸部
105	新	3/ 3	福島民友新聞	園芸や稲作研究を発表	企画経営部
106	新	3/ 9	日本農業新聞	最新の栽培技術生産者らに紹介 福島県農業総合センター	企画経営部
107	新	3/11	福島民報新聞	農業復興へ活躍期待 アグリカレッジ福島48人卒業	農業短期大学校
108	新	3/12	福島民報新聞	里山環境の指標「赤とんぼ類」自動撮影で生息数把握	会津地域研究所 浜地域研究所
109	新	3/15	開拓情報	果樹凍霜害危険度推定シート公開	果樹研究所
110	新	3/22	福島民友新聞	農業短期大学校で卒業式	農業短期大学校
111	新	3/30	日本農業新聞	凍霜害を防げ 安全限界温度を知る 発生リスクを予測	果樹研究所

9 福島県インターンシップの受入れ

インターンシップを開催し、学生の受入れを行った。また、令和4年度県庁技術職ナビゲーター面談実施概要に従い、面談を実施した。

形式	受入部所	受入月日	所属団体
インターンシップ	浜地域研究所	7/25- 8/ 5	新潟大学大学院自然科学研究科
	生産環境部	8/22- 8/26	北里大学獣医学部生物環境科学科
	生産環境部	8/22- 9/ 1	福島大学農学群食農学類
	生産環境部	8/29- 9/ 2	福島大学農学群食農学類
	作物園芸部	9/ 5- 9/ 7	新潟大学大学院自然科学研究科
	作物園芸部	9/ 5- 9/ 7	東北大学農学研究科
	作物園芸部	9/12- 9/14	奈良先端科学技術大学院大学
	果樹研究所	9/14- 9/16	福島大学農学群食農学類(2名)
ナビゲーター面談	生産環境部	11/15	秋田県立大学院生物資源科学研究科
	作物園芸部		
	安全農業推進部	11/24	東京農業大学農学部農学科
	作物園芸部	3/ 9	岩手大学農学部
	生産環境部	3/13	福島大学農学群食農学類
実習	浜地域研究所	7/25- 8/ 5	新潟大学大学院自然科学研究科

VII 職員・財産

1 職員数

(令和4年4月1日現在)

職 種	本 部	果 樹 研 究 所	畜 産 研 究 所	沼 尻 分 場	会 津 地 域 研 究 所	浜 地 域 研 究 所	浜 地 域 農 業 再 生 研 究 セ ン タ ー	農 業 短 期 大 学 校	計
行政職	42(29)	2	2	1	1	1	1	32(28)	82(57)
研究職	68	16	22	3	9	6	9	0	133
技能労務職	16	7	15	5	5	3	0	5	57
計	126(29)	25	39	9	15	10	10	37(28)	272(57)

()は技術職員の内数

2 施設・ほ場の面積及び飼養家畜数

(1) 施設・ほ場の面積

区 分	建 物		宅 地 (ha)	田 (ha)	畑 (ha)	山 林 (ha)	原 野 (ha)	その他 (ha)
	棟数	面積(m ²)						
農業総合センター (内訳)	67	28,886.54	12.1	12.5	19.2	3.2	0.3	5.2
交流棟	1	2,594.49						
管理研究棟・実験棟	1	7,039.93						
付属施設(建物)	65	19,252.12						
果樹研究所 (内訳)	28	4,749.41	1.9		8.1			
庁舎	1	1,680.86						
付属施設(建物)	27	3,068.55						
畜産研究所 (内訳)	74	18,042.52	19.1		40.4	2.7		
庁舎	1	1,166.48						
付属施設(建物)	73	16,876.04						
沼尻分場 (内訳)	26	6,548.72	8.6		114.9	121.6		3.3
庁舎	1	132.68						
付属施設(建物)	25	6,416.04						
会津地域研究所 (内訳)	18	6,828.75	4.6	9.7	5.5			1.3
庁舎	1	2,442.59						
付属施設(建物)	17	4,386.16						
浜地域研究所 (内訳)	15	1,508.52	0.6	2.4	1.0			
庁舎	1	472.50						
付属施設(建物)	14	1,036.02						
浜地域農業再生研究センター (内訳)	2	692.51	0.3					
庁舎	1	478.01						
作業所棟	1	214.50						
農業短期大学校 (内訳)	56	19,791.99	5.7	5.1	23.3	9.8	3.0	5.0
校舎	1	2,002.36						
附属施設(建物)	55	17,789.63						

(2) 飼養家畜数

ア 牛、豚及び鶏の飼養頭(羽)数

区 分	乳用牛			肉用牛						豚				鶏				
	経産牛	育成牛	子牛	種雄牛	雌牛	育成牛	子牛	直検牛	待機牛	供卵牛	肥育牛	種雄豚	種雌豚	子豚	肥育豚	保存鶏	育種鶏	種鶏
畜産研究所	38	13	14	5	-	-	-	11	11	11	27	19	45	173	171	559	2,003	718
畜産研究所沼尻分場	-	-	-	-	71	-	34	-	-	-	12	-	-	-	-	-	-	-
農業短期大学校	9	5	1	-	11	-	12	-	-	-	6	-	-	-	-	-	-	-

※ 令和5年3月31日現在

令和4年度 福島県農業総合センター業務年報

令和5年8月

福島県農業総合センター

〒963-0531 福島県郡山市日和田町高倉字下中道116番地

電話 024-958-1700

FAX 024-958-1726

<https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/37200a/>
